

ISSN 2759-9191

第 48 回国際日本文学研究集会 予稿集

THE 48th INTERNATIONAL CONFERENCE
ON JAPANESE LITERATURE

2025 年 5 月 10 日(土)～5 月 11 日(日)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館 

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE
NATIONAL INSTITUTES FOR THE HUMANITIES

使用言語 日本語

第 48 回国際日本文学研究集会 予稿集

THE 48th INTERNATIONAL CONFERENCE
ON JAPANESE LITERATURE

開催にあたって

国際日本文学研究集会は、日本文化、日本文学に関する国際的な研究集会をもちたいという国内外のかねてからの声に応える形で、1977年11月に第1回が開催されました。同年6月に国文学研究資料館の開館式が行われておりますから、この集会はまさに当館と歩みをともにしてきた事業の一つといえるでしょう。

以来、本集会は「国内外の日本文学研究者による研究発表と討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深める」という設立趣旨のもと、継続して開催され、今年で第48回を迎えることとなりました。

この間、日本文学・文化研究のあり方は多様化し、国際的な研究集会や学会も増えてきましたが、本集会は当初の設立趣旨を受け継ぎつつ、日本文学研究のさらなる広がりや未来に目を向けていきます。国内外の研究者、さらには若手研究者の発表を歓迎いたします。

2025年4月

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会専門部会

国際日本文学研究集会は国際日本文学研究集会専門部会の審査のもとに運営されています。

【国際日本文学研究集会専門部会委員】

サイトウ マサオ
斎藤 理生 大阪大学大学院人文学研究科 教授

シュ シュウジ
朱 秋而 國立臺灣大學日本語文學系 教授

スズ キ ケンイチ
鈴木 健一 学習院大学文学部 教授

ニイミ アキヒコ
新美 哲彦 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

ヒラ ノ タ エ
平野 多恵 成蹊大学文学部 教授

カジ オ フミタケ
梶尾 文武 神戸大学大学院人文学研究科 准教授

ジョ ナサン ズイッカー
Jonathan Zwicker カリフォルニア大学バークレー校 准教授

ダヴァン ディディエ
Davin Didier 国文学研究資料館 教授 研究主幹

オカザキ マキコ
岡崎 真紀子 国文学研究資料館 教授 研究主幹

ヤマモト カズアキ
山本 和明 国文学研究資料館 教授 研究主幹

オオ タ ナオヒロ
太田 尚宏 国文学研究資料館 准教授

クリハラ ユタカ
栗原 悠 国文学研究資料館 准教授

ヤマモト ヨシタカ
山本 嘉孝 国文学研究資料館 准教授

ノット ジェフリー
Knott Jeffrey 国文学研究資料館 助教

目 次

■研究発表■

(発表要旨) 発表資料ページ

第1セッション

奈良・平安初期の書序と進書表について
—「古事記序」再論—

オウ カクカク
王 格格……………(3) 4

文の解釈と作品の解釈—『伊勢物語』「さるさがなきえびす
心を見てはいかがはせむは」考—

クリタ ガク
栗田 岳……………(8) 9

第2セッション

西行の釈教歌における自然と仏教的解釈
——法華經二十八品歌の「方便品」を中心に——

ラ ケツシン
羅 杰彬……………(13) 14

細川幽斎『九州道の記』における地名の詠み方
—実景と伝統の調和—

コウ イツショウ
黄 逸松……………(18) 19

『平家物語』灌頂卷前半部の形成過程
——結節点としての「女院出家」「大原入」——

ノナカ ジョウジュン
野中 成 淳…(23) 24

第3セッション

『枕草子』周作人訳と林文月訳との比較
——「頭弁の、職にまゐりたまひて」段前半部を中心に——

ユ ウ ゴウ
顧 宇豪……………(28) 29

江戸時代における詩経名物学の展開
—京都本草学派を中心に—

シャ ソ コウ
謝 蘇杭……………(33) 34

第4セッション

『通俗三国志』章題の典拠と方法

オウ ジョンキン
王 順鑫……………(39) 40

—幸田露伴の方法への復帰と再検討—

デビュー作『ひと夜』から始まる革新:

エ レ ン チ ノ ワ クリスティーナ
Erenchinova Kristina…(44) 45

宇野信夫と一幕物の世界

帝国の統治恐慌と熱帯病について

シャ アヘイ
謝 亜平……………(49) 50

—森三千代の「南溟」を中心に—

第5セッション

松岡譲『敦煌物語』における「大谷ミッション」の表象

リュウ トウハ
劉 東波……………(54) 55

——未公開草稿を手掛かりに

日本語と中国語の間—楊逸、李琴峰、横山悠太の「日本語
文学」におけるバイリンガル性—

ザ ベ レ ジ ナ ヤ オリガ
Zaberezhnaia Olga…(58) 59

「童謡」の概念再考“Childlike, though Never
Childish”——金子みすゞの「童謡」を手がかりに——

ム テ イ グ リ ナ スベトラーナ
Mutygulina Svetlana…(63) 64

第6セッション

安部ヨリミの創作活動とその生涯に関する伝記的研究

クラチ トモヤ
倉地 智哉……………(68) 69

——プロレタリア作家から歌人への変貌——

多和田葉子「ペルソナ」における遊歩者の表象

ケイ アナン
邢 亜南……………(73) 74

■インフォメーション・セッション発表■

1900-1920年代の東京における文学者とカフェ

^{ゴキタセナ}
五木田 星南……………80

『江戸六地藏建立之略縁起』の分析(類本情報のお願い)

^{スギモトカズエ}
杉本 和江……………81

発表者紹介 ……………82

プログラム ……………87

研究発表

奈良・平安初期の書序と進書表について

—「古事記序」再論—

王 格格

私は、博士課程の間、主に勅撰和歌集の序文についての研究を行っている。そのため、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』が成立する以前の、日本書序の歴史についても興味を持っている。

日本における奈良・平安初期の書序についての研究は、ほとんど『古事記』「并序」の文章を出発点として展開したものである。奈良・平安初期の書物に、書序・進書表どちらか一方しか現存しないもの、両方現存しているものがある。又、それらの書序の中、文体特徴がはっきりと進書表と異なっているもの、進書表とだいぶ混同しているものがあり、かなり複雑な事情が見られる。『古事記』「并序」は又、「序」と名付けられながらも、上表文の形式を持っている、文体上曖昧な文章である。先学達は、同時期の書序・進書表の歴史を整理した上、『古事記』「并序」成立時期の推測を試みてきた。

そこで、本研究は先学達の研究を基に、再び奈良・平安初期の書序・進書表創作の実状に迫るつもりである。

先に結論を言ってしまうと、『日本後紀』(840)を境目とし、それより以後、書物を撰進する場合、書序一本で「序」「表」両方の機能を統合するようになった可能性があるのではないかと考えられる。その根拠として、まず、書序の文体特徴が段々と進書表に近づいていくこと。又、『日本後紀』(840)に書物の撰進を記録する場合、挙げた資料は全て進書表であるが、『日本三代実録』(879)になると、進書表の代わりに、『貞観格』(869)『貞観式』(871)両書の書序が収録されていることが挙げられる。

本研究における奈良・平安初期の書序・進書表の創作事情をまとめる作業は、従来検討されてきた『古事記』「并序」の成立時期の推測に役たつのみならず、勅撰和歌集序など、後世序文が成立する「前史」としても多大な意義があると考ええる。

奈良・平安初期の書序と進書表について

—「古事記序」再論—

北京外国語大学 国文学研究資料館 王格格

はじめに

『古事記』の真偽は、従来多く検討されてきた課題である。「偽書説」の根拠は、『続日本紀』（797年）に撰録の記事がないこと、『日本書紀』（720年）に引かれなことをはじめとして、先学たちにより多く提示された。その中、『古事記』の巻首にある「并序」（真福寺本では「序并」、便宜上、以下記序と略す）と名付けられた文章の「偽作説」が挙げられた。この文章の疑わしい点の一つとして、それは「序」と名付けられながらも、明らかに上表文の形式を採った、ということが多くの先行研究に検討されてきた。記序が『古事記』成書された当初、太安万侶が作った上表文であった、という観点は通説化になったようである。しかし、近来、通説に反した三浦佑之氏及び矢嶋泉氏の説があり、記序の文体については、結局、諸説紛紛のままで、未だ検討の余地があると考えられる。

本稿では、先行研究を踏まえた上、文章構成の視点により、記序をその典拠である中国唐代長孫無忌の「進五経正義表」、及び『古事記』より以後、日本本土の勅撰書物のために書かれた進書表（書物を進呈するための上表文）と比べながら、記序の文体について改めて考えていく。

一、記序研究の方向

1、二つの問題点

① 記序の真偽（それは和銅五（712）年太安万侶が書いたものであるか、又は後人の偽作であるか）

「偽作説」：中沢見明『古事記論』・筏勲「古事記偽書説は根拠薄弱であるか（上）（下）」・三浦佑之「古事記「序」を疑う」

② 記序の文体

「真作説」：

「表文説」：河村秀興『古事記開題』・倉野憲司『古事記の研究』・志田延義「古事記上表の諸典拠」・山田孝雄『古事記序文講義』・藤井信男『古事記上表文の研究』等

「序文説」：河村秀興『古事記開題』に挙げられた秀根説・矢嶋泉「古事記成立論の行方——序文研究史の再検討」『古事記の文字世界』『古事記』序文の形式・構造・論理

「偽作説」：筏勲「古事記偽書説は根拠薄弱であるか（上）（下）」

2、「文章構成」の視点

① 三段分けの方法

② 文章構成を文体判別の手がかりとした先行研究

藤井信男『古事記上表文の研究』・矢嶋泉「『古事記』序文の形式・構造・論理」

両氏の論は、いずれにしても不備な所があると考えられるが、彼らの文章構成・構造を重んじる視点は注目すべきである。

3、奈良・平安初期書序と進書表のまとめ

筏勲「古事記偽書説は根拠薄弱であるか（上）（下）」・矢嶋泉『古事記の文字世界』・西條勉『古事記の文字法』

二、記序と「進五経正義表」（付けた番号は【付表】を参照）

記序が中国唐代長孫無忌の「進五経正義表」を典拠としたことは、明治国学者吉岡徳明氏『古事記伝略』により始めて提示された。その上、倉野憲司氏が両文章を比較し、文字に限らず、「敷文構句」までの類似性を指摘した。しかし、倉野氏が行った比較は、文辞に焦点を当てたもので、文章の内容構成には触れなかった。二つの文章の内容を細かく分けて比べてみると、記序は実は「進五経正義表」と大きく異なっていることが分かる。両文章の類似したところは、記序が「進五経正義表」からの模倣であったとすれば、相違した所こそ、記序作者独自の意図を反映しているのだろう。又、これらの相違点により、記序を上表文と見なすことに対して、如何にも違和感を覚える。

問題一：歴史紹介

「進五経正義表」（2-②）：経書と緯書の起源・五経が発揮していた政教作用・五経を闡揚するための学校教育について紹介した後、「斯乃邦家之基、王化之本者也」と、五経が以上さまざな面により、国政の根本であると言えるほどの重要性を提示した。

「古事記序」（1-②）：「夫混元既凝」から、神代から、神武天皇・崇神天皇・仁徳天皇・成務天皇・允恭天皇の順に従って、各代の天皇の主な功績を並べた。宛も『古事記』本文を抜粋した紹介文のようである。最後に、「雖歩驟各異、文質不同、莫不稽古以繩風猷於既頹、照今以補典教於欲絶」という、歴史・史書の効用を説いた一文により結んだ。しかし、これより前の内容には、歴史を記録すること、又は史書を撰録することについて一言も書かなかった。「進五経正義表」の「斯乃邦家之基、王化之本者也」に習い、無理矢理につけた一文であるような印象がある。

問題二：前代の編纂事業

それぞれ間隔の時期は違うが、『古事記』は『五経正義』と同様に、編纂の事業が二回に分かれた。一回目の編纂についての紹介は「古事記序」（1-③）と「進五経正義表」（2-④）に共通した内容である。しかし、記序はこの部分において、天武天皇が壬申の乱を勝利して皇位に登ったことを詳しく述べてきた。「六師雷震、三軍電逝。杖矛举威、猛士煙起」という戦争の場面を物語のように描いたのは、上表文として不自然なところである。

問題三：稗田阿礼人物伝

稗田阿礼は、『古事記』と同時期の歴史記録に全て見られなく、今までもその真実性が疑われてきた人物である。このように、まるで伝説であるような人物紹介は、正確性・真実性に慎重すべき上表文に、如何にも相応しくないのだろう。

以上により、記序は構成上、一見して「進五経正義表」と近似しているが、「進五経正義表」より、更にいえば上表文より外れた内容は実際多くあることは分かるのだろう。

三、記序と日本本土の進書表（付けた番号は【付表】を参照）

（現在見られる勅撰書物の進書表の中、最古の資料として、『続日本紀』二回の上表文（794年、797年）と『新撰姓氏録』の上表文（815年）を参考とする）

問題一：文章の冒頭内容(1-② 3-② 4-② 6-②)

『続日本紀』一回目の上表文の他、「臣聞」の次、書物内容の意義・効用を説明するための一般論を打ち出すのは各文章に共通する点である。『続日本紀』一回目の上表文は、最初に「沮誦」「伯陽」「班馬」「范謝」という中国代々の史官と史書編纂の歴史について述べてきたのも、この一段の最後「史籍之用、蓋大矣哉」を引き出すためであった。進書表を書く場合、冒頭部分で書物内容の意義と効用提示するのは、日本でも中国でも共通される書き方であろう。つまり、記序第一段の『古事記』本文に記されている日本の歴史を抜粋したような内容は、日本本土の進書表と比較する場合でも、やはり違和感がある。

問題二：前代の編纂事業

『続日本紀』の二回の上表文は、桓武天皇の時代に作成されたもので、前代の光仁天皇時代の撰録を紹介した内容はあるが、光仁天皇の治世を褒め称える儀礼的な言葉は見られない(3-⑤ 4-⑤)。又、「上新撰姓氏録表」にも、前代の桓武天皇時代の撰録について述べた内容がある(6-⑤)。「先朝鑑其假濫、留慮根源、味旦臨軒、仄景忘膳」と書いただけで、『続日本紀』上表文と同様に、前代天皇への賛辞は見当たらない。

記序に見られるような、天武朝における「帝紀」「旧辞」の撰録を述べるために、天武天皇が壬申の乱で勝利した過程・天武天皇の治世について紙幅を費やした内容(1-③)は、以上の進書表と比較する場合、やはり独自性が見出せる。

記序の書き方は、「新撰姓氏録序」(5-④)「弘仁格式序」といった序文の方に近似している。これらの序文において、前代の編纂事業を紹介する際に、まず前代天皇の治世を賛美する言葉を書くのは共通されている点である。

問題三：「編纂方針」の内容(1-⑥ 3-⑥ 4-⑥ 6-⑦)

「編纂方針」は、「古事記序」と『続日本紀』の二回の上表文・「上新撰姓氏録表」に共通する内容である。『続日本紀』の二回の上表文と「上新撰姓氏録表」の当該部分は、撰録のために使用した資料、資料の扱い方、取捨の方針をめぐって紹介した。一方、記序では、『古事記』の撰録資料である「帝王日継」「先代旧辞」は挙げられたが、「編纂方針」において、表記法のみ言及し、撰録資料の扱い方についての内容が見当たらない。

以上、記序を日本本土の進書表と比べてきた。天皇へ上表することには、必ず明確な目的があり、その際に書く上表文は目的を闡明するための文章である。それ故、文章の各部分において、どれほど展開しても、上表の中心内容を十分に説明することが旨で、この旨から外れることはあるべきではない。以上見てきた、記序以外の進書表は、いずれにしてもそのような求心的な性格が見て取れる。しかし、記序は、分析してきたように、主旨から外れた内容が多々あるため、上表文であったことは認めかねる。

四、日本上表文の歴史

中国の場合、例えば『大唐六典』巻一に「凡下之所以達上、其制亦有六、曰表状箋啓辞牒」があるように、「表」は公文書的一种として法令に見られる。しかし、『養老律令』(757年)の「公式令」を見てみると、「論奏」「奏事」「便奏」という、律令制下の最高機関である太政官により出された「奏」についての規定は明確に書かれたが、「表」は見られない。それでは、上表文という文体は、いつから日本において利用され、又、どのような目的に利用されていたのか、ということは問題である。

『続日本紀』(797年)を調べると、文武天皇・元明天皇・元正天皇時代において、太政官の上奏は多く記録されたが、上表に関する記事は、文武紀の三年閏四月辛酉朔の条、文武天皇の詔書に引かれた「新羅国使薩淦金福護表云、寡君不幸、自去秋疾、以今春薨、永辞聖朝」という、新羅国使が進呈した上表文の一例しか見られない。日本国内における上表に関する記事は、聖武紀の四年十一月戊戌朔己亥の条にある、「太政官及八省各上表、奉賀皇子誕生、并献玩好物」という、皇子の誕生を祝賀するための上表が最初の例である。後に、賜姓を請うことや時政の得失を進言することなど、上表の内容が多様になり、上表に関する記事も多くなっていく。しかし、上表の記事が多くなったとはいえ、『続日本紀』において、書物を進呈するための上表は見当たらない。『続日本紀』に、『大宝律令』(701年)と『日本書紀』(720年)の成書についての記録がある。しかし、前者について「撰定律令、于是始成」と、後者について「至是、功成奏上。紀卅卷、系図一卷」と書いてただけで、その際に書物を進呈するために上表文が書かれたかどうかについて、明確な記述がない。これらの書物は、現存資料で見た限りでは、序文も進書表も付けられていない。進書のための上表は、後の時代の『日本後紀』(840年)に記された、桓武天皇の延暦十三(794)年に『続日本紀』を献上した際の上表文は最初である。

以上見てくると、元明天皇時代の前後には、日本国内において上表文はまだ使われていなかった可能性がある。しかも、後の時代になると、上表文がますます多くの目的に使用されるようになったが、おそらく桓武朝より以前、勅撰書物を進呈するために上表文を書くことはなかったのではないかと推測した。

【付表】

1、古事記序	①臣安萬侶言 ②神代からの天皇の歴史(夫混元既凝～照今以補典教於欲絶)③天武天皇の登極・治世賛美・一回目の編纂(暨飛鳥清原大宮御大八洲天皇御世～未行其事矣)④伏惟 ⑤元明天皇治世賛美・下命(皇帝陛下～以献上者)⑥編纂方針(謹随詔旨～随本不改)⑦体例(大抵所記者～謹以献上)⑧臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首(日付・位署)
2、進五経正義表	①臣聞 ②五経の歴史・五経の意義(混元初辟～王化之本者也)③伏惟 ④今上の治世賛美・一回目の編纂(皇帝陛下～尚有未周)⑤下命(爰降糸綸～傍撫群書)⑥編纂事情(釈左氏之膏肓～繕写如前)⑦謙辞(臣等学謝伏恭～惧乖典正)⑧謹以上聞、伏増戦越。謹言(日付・位署)
3、上続日本紀表(一回目)	①臣聞 ②中国修史の歴史・歴史の意義(黄軒御曆～蓋大矣哉)③伏惟 ④今上の治世賛美・下命(伏惟聖朝～以継先典)⑤前代の修史(若夫～類無綱紀)⑥編纂方針(臣等～以備故実)⑦体例(勒成一十四卷～其目如左)⑧謙辞(臣等、学謝研精、詞慙質弁、奉詔淹歳、伏深戦兢)
4、上続日本紀表(二回目)	①臣聞 ②中国修史の歴史・歴史の意義(三墳五典～千祀之指南)③伏惟 ④今上の治世賛美・下命(天皇陛下～奉揚先業)⑤前代の修史(夫自宝字二年～全亡不存)⑥編纂方針(臣等～並從略諸)⑦体例(凡所刊削廿卷～其目如別)⑧結び(庶飛英騰茂～伝万葉而作鑑)⑨謙辞(臣等輕以管窺～伏増戦兢)⑩謹以奉進、帰之策府
5、新撰姓氏録序	①蓋聞 ②姓氏の歴史(天孫～輟而不興)③前代の治世賛美・一回目の編纂(皇統～鳳輿登遐)④今上の治世賛美・下命(天朝至明～尋諸氏之苑丘)⑤編纂方針(本其元生～煥乎指南)⑥体例(起自神武～名曰新撰姓氏録)⑦結び(雖非～列於別卷)⑧云爾
6、上新撰姓氏録表	①臣万多等言。臣聞 ②姓氏の意義(陰陽定位～襲王風而興替者也)③伏惟 ④姓氏の歴史(国家～虚記黻冕)⑤前代一回目の編纂(先朝鑑其假濫～仄景忘膳)⑥受命(今臣等謹奉綸言～空淹四時)⑦編纂方針(夫才非博物～則集為別卷)⑧体例(年肇神武～名新撰姓氏録)⑨謙辞(譬如窺井談星～撰緝謬違)⑩謹詣闕奉進、伏増谷氷、謹白(日付・位署)

文の解釈と作品の解釈

- 『伊勢物語』「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」考 -

栗田 岳

ある文の解釈は、時に作品全体の理解を左右する。しかし、細部に即した文の解釈は、「文学」よりも「語学」的な課題と見なされることがある。その結果、「文学」研究、「語学」研究のいずれからでも十分にアプローチされず、作品の理解が深まらないままになっている場合もあるかと思われる。本研究は、そうした問題意識のもと、『伊勢物語』十五段の「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」という文（「当該箇所」と称する）をめぐって考察を行う。

当該箇所は、昔男が、陸奥国の女に「しのぶ山しのびて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく」という歌を送り、女がそれを「めでたし」と感じたことに纏わる記述である。この当該箇所に関して、既説では〔女の自制を示した心内文〕〔田舎女との交流など笑止とする語り手の揶揄〕〔他者の心に踏み込もうとした昔男への語り手の批判〕〔返歌をしなかった女に対する語り手の非難〕といった解釈が提示されている。しかし、そのいずれにも首肯しがたい部分が残りと、定見を見たとは言えない。

以上をふまえて本研究は、中古文学作品の用例の調査を行い、次の結果を得た。

① 「めでたし」：自身が上位者と接点を持ちえた、或いは、上位者から何らかの利益が供与されたことに対し、下位者が抱く満足の感情。

② 「さがなし」：他者の思いに心を寄せることなく、自身の立場から一方的になされた言動に対する否定的な評価。

③ 「いかがはせむ」：望ましくない状況に関して、それを手の施しようのないことと切り捨てる表現。

昔男は、女を田舎には似つかわしくない人物と感じ、心を通わせようと歌を送った。しかし女は、それを田舎暮らしの我が身にもたらされた僥倖と思うのみであった。十五段は、そうした女の姿勢を、昔男の心を汲み取って向き合おうとはしない、自分本位なものとする。そして当該箇所では、そんな女の「えびす心」など見ても致し方がないと断じるのであった。

文の解釈と作品の解釈

- 『伊勢物語』「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」考 -

電気通信大学 栗田 岳

1. 序

本研究は『伊勢物語』十五段末尾の「さるさながきえびす心を見てはいかがはせむは」という文（以下、当該箇所と称する）を、どう理解するのが適当であるか、語に即しつつ分析し、それを通して、これまで様々な説が提起されてきた十五段という章段の解釈についても言及しようとするものである。次に、その十五段を引く¹。

むかし、みちの国にて、なでふ事なき人の妻に通ひけるに、あやしう、
さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく
女かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびすころを見ては、
いかがはせむは。

2. 既説、及び本研究の主張

本研究の見る範囲で、当該箇所の理解に関して既説の述べるところは、大きく四つに分類される。

① [女の心内文] 説²

昔男からの働きかけに、いったんは心が傾いた女が、とっさに自制心を示したものと解する。

② [田舎蔑視] 説³

昔男が女と心を通わせたいと願ったことに関して、田舎女にそれを求めるなど笑止であると、語り手が揶揄したものと解する。

③ [男への批判] 説⁴

他者の心の中に踏み込んでいこうとする昔男の好奇心を、語り手が批判したものと解する。

④ [女への批判] 説⁵

昔男からの歌に女が返歌しなかったことに対して、風雅を知らぬ行いであると、語り手が批判したものと解する。

¹ 引用は『新潮日本古典集成』による。

² 野口元大「みやびと愛 - 伊勢物語私論」『日本文学』110（1962年）等。

³ 渡辺実「伊勢物語の人物批評」『国語国文』36-10（1964年）等。

⁴ 後藤康文「みやび男のえびす心 - 『伊勢物語』第十五段の解釈 - 」『中古文学』47（1991年）。

⁵ 神田龍之介「『伊勢物語』における方法としての〈語り〉」『国語と国文学』78-3（2001年）。

①の心内文という理解に対しては、②が指示語「さる」の用法等の観点から異論を示した。以来、当該箇所を語り手の批評と見る向きが多い。ただ、その具体的な内容については見解が分かれている。

こうした状況をふまえて、本研究は第3節以降の考察により、次のように主張する。

昔男は、田舎には似つかわしくない人と思って、女と交流を求めたが、女はその申し出をありがたがるのみであった。当該箇所は、そんな女の姿勢が、昔男の心を受け止め、応じることのない自分本位なものであると断じた語り手の批判である。

3. 「めでたし」

当該箇所直前の「めでたし」は、昔男から「あなたの心が知りたい」という主旨の歌を送られた際の女の反応であるが、その在りようを考えるにあたり、次の(a)(b)のごとき例に注目される⁶。

(a) 衛門、かくしたまふを、思ふやうにめでたしと、男君を思ふ。

(落窪 卷三)

(b) 桂のみこに、式部卿宮のすみたまひける時、その宮にさぶらひけるうなゐなむ、この男宮をいとめでたしと思ひかけたてまつりけるをも、え知りたまはざりけり。(大和 四十)

(a)では、落窪の君を厚遇し、その実家への報復にも余念のない男君に対して、衛門が「めでたし」と思っており、価値ある上位者から受けた処遇に満足する状況で、「めでたし」という感想が抱かれる例となっている。また(b)は、女主人のもとに通ってくる式部卿宮に対し、召使の少女が憧憬の思いを持つもので、この少女は宮から何らかに処遇されたわけではない。接触の機会を持ちえたのみでも、「めでたし」という充足感が生じるということであろう。

そして、考察対象の「めでたし」は、構造的にこれら(a)(b)と等しいように思われる。昔男は都人と遜色ない女に出会って、もっと心を通わせたく歌を送った。しかし、女にとっては、その歌を送られたこと自体が果報だったのである。

なお、直接、考察対象に通うわけではないが、「めでたし」という評価・感情を全体的に捉えるために、次の例を示しておきたい。

(c) 内裏にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。

(源氏 霽標)

(d) 藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

(枕 木の花は)

(c)は、朱雀帝が春宮を「めでたし」と感じており、(a)等のように

⁶ 以下、『伊勢物語』以外の挙例は『新編日本古典文学全集』による。

上位の者に対する例ではない。また、(d)で「めでたし」とされるのは藤の花だから、その対象は人ですらない。これらを踏まえると、「めでたし」とは、それに備わる美質や長所を存分に発揮している対象に向かう称賛の気持ちと、それに立ち会えたことによる満ち足りた思いを言うのであろう。そうした感情は、往々にして貴人に向けられもするが、それに限られるわけでもないということである。

4. 「さがなし」

前節で述べたような反応を示す女に対して、当該箇所は「さがなし」と否定的に評価する。本研究が中古文学作品の用例を調査したところ、その否定的な評価とは、他者の思いへの顧慮が無く、自分の意思にのみ即して行動することに向けられるものである。次に、「さがなし」の例を示す。

(e) この女の親の、わびしくさがなき朽媼の、さすがにいとよくものの気色を見て、かしがましきものなりければ、かく文通はすと見て、文も通はさず。(平中 二十七)

(f) 「あやしあやし。戸内にさしたるか。翁をかく苦しめたまふにこそありけれ。(後略)」と言へど、誰かはいらへむ。(中略)腹こぼこぼと鳴れば、「あなさがな。冷えこそ過ぎにけれ」と言ふに、

(落窪 巻二)

(g) 祖父大臣いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと上達部、殿上人みな思ひ嘆く。(源氏 賢木)

(e)は、娘の気持ちを無視して、男との文通を邪魔する母親が「さがなき朽媼」と評されるものである。(f)では、寒い中、典薬助が室外に締め出され、体が冷えきってしまったため、落窪の君に「さがな」と訴える。(g)の場合は、右大臣が実権を握ることとなって、その下の立場にある者たちが先行きを憂慮するという文脈であるから、この「さがなし」は、右大臣の専横により周囲が疲弊することに関わるものと解せよう。先の規定に妥当する例だと言える。

以上より、当該箇所は、昔男から交流を求められたにもかかわらず、その働きかけに自足するのみである女の姿勢に対し、相手の思いを汲み取らぬ、自分本位な態度と難ずるものと考えられる。

5. 「いかがはせむ」

ここでは「いかがはせむ」との比較により、「いかがはせむ」の意味するところを検討する。

(h) げに今さらさやうにならびなき有様はいかがはせむなど思ひて、

(和泉式部)

(i) かかるもいとかたはらいたくおぼゆれば、いかがはせむ、た

だともかくもしなさせたまはむままにしたがひて、さぶらふ。

(和泉式部)

(h)と(i)は、共に和泉式部が宮邸に迎えられることに関わる例であるが、(h)では宮邸入りを持ちかけられて、どうしたものかと悩んでいるのに対し、(i)の場合は、宮邸に入った後、今さら仕方がないと開き直るかの口ぶりとなっている。

(j) 三尺の御几帳一つぞいるべかめる。いかがせむ。誰に借らまし。

(落窪 巻一)

(k) 「いと馴々しうはべれども、また見知る人の侍らばこそあらめ、

いかがはせむ」 (落窪 巻一)

(j)と(k)も、落窪の君に男君を迎える支度のないことに関して、あこきが苦慮している点で共通する。(j)は、几帳の調達先を考えるものだが、(k)では、他に方法がなく、あこきの袴を落窪の君に提供すると申し出つつも、その僭越さには恐縮するという文脈である。

これらの比較から、「いかがせむ」の場合は、事柄に即して判断をまとめようとしている様子が見て取れよう。一方、「いかがはせむ」からは、対処のすべが無いことによって喚起される話し手の情意が認められる。当該箇所においても、「さがなきえびす心」などを見たところでどうしようもない、つまりは、何にもならない、無意味であると、感情的に断ずる性格が読み取られることになるのである。

6. おわりに

ここまで述べてきた、当該箇所に対する本研究の理解は、語り手による女への批判という点で、既説の中では④にもっとも近い。ただ、本研究は、返歌をしなかったことが野蛮とされているのではなく、昔男の思いに寄り添わなかったことが身勝手とされていると考えるわけである。

そして、女が返歌しなかったことに関して、次掲(1)を視野に収めてみると、①の見解は、当該箇所という文には妥当せずとも、十五段の解釈にとって意義深い視座を示していることがわかる。

(1) めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、
なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて涙ぐまれて、さらに
例の動なきを、 (源氏 明石)

明石の君が、光源氏から送られた歌に「めでたし」とは思うものの、彼我のあまりの懸隔ゆえに、関係に踏み込んでいくことができないという例である。①とは、十五段の女からも、この明石の君のごとき思いを汲み取ったうえでの理解であろうし、そうした視点自体はもっともなものかと思われる。また、女の置かれる状況に目を向けることなく、「さがなきえびす心」と批判する当該箇所は、あくまで都人の側にのみ立脚している。そうした在りようからは、②の理解に通じる質が看取されるであろう。

西行の釈教歌における自然と仏教的解釈

——法華經二十八品歌の「方便品」を中心に

羅 杰彬

西行（1118～1190）の『聞書集』に収められた「方便品」の歌、「あまのはら雲吹きはらふ風なくはいででややまむ山の端の月」（聞書集・2）は、自然現象としての「風」「月」「雲」を詠みつつ、それらが『法華經』の經文と重ねられている点が特徴的である。この歌は、それぞれの自然現象に仏教的意味を付与するだけでなく、一首全体の詠みぶりまでが仏教的な教義と結びついている点で異色を放っている。西行の釈教歌の詠法の特徴を、この歌を切り口に考えてみたい。

先行研究では、石原清志や山田昭全、宇津木言行、久保田淳などの論考が挙げられ、これらの研究者は歌の中で「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」がそれぞれ何を象徴するのかについて様々な解釈を展開している。それを踏まえて、本発表では、釈教歌における「風」と「月」の歌を通じて、西行の「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」の意味を検討し、「方便品」の歌意および西行の仏教思想を明らかにしたい。

具体的には、まず同じく「風」と「月」を詠んだ他の歌を考察し、これらの歌における「風」や「月」がそれぞれ何を象徴するのかを分析する。次に、「山の端の月」という表現に注目し、他の歌人や西行自身が詠んだ「山の端の月」の歌と比較することで、その象徴的意味を探る。また、西行の法華經二十八品歌における「月」を詠んだ歌（六首）を取り上げ、その中での「月」の意味を検討することによって、西行の「方便品」の歌における「山の端の月」の意味を解き明かす。さらに、「風」については、釈教歌における「風」の象徴的意味を分析し、西行がどのように解釈して詠んだのかを明らかにする。

これらの考察を通じて、西行歌の歌意を掘り下げ、仏教思想を自然現象として表現する際に西行がどのような工夫を凝らしたのか、また、深遠な仏教思想をあえて自然詠の形で表現する意図を解明することを目指す。

西行の釈教歌における自然と仏教的解釈

——法華經二十八品歌の「方便品」を中心に

千葉大学 羅 杰彬

はじめに

西行（一一一八―一九〇）は、自然の情景を通して仏教的な意味を表現した和歌を多く詠んでいる。その中でも「風」と「月」は、西行の和歌において繰り返し登場する重要な象徴であり、自然現象でありながらも、仏教的真理や悟りの境地を示唆する要素として機能している。本研究では、西行の法華經二十八品歌の「方便品」の歌を切り口に、西行の釈教歌における「風」と「月」の表現の特徴を明らかにすることを目的とする。

まず、取り上げる「方便品」の歌を掲げる。

方便品 諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世

あまのはら雲吹きはらふ風なくはいでややまむ山の端の月（西行・聞書集・2）

先行研究では、石原清志⁽¹⁾や山田昭全⁽²⁾、宇津木言行⁽³⁾、久保田淳⁽⁴⁾などの論考が挙げられ、これらの研究者は歌の中で「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」がそれぞれ何を象徴するのかについて様々な解釈を展開している。それを踏まえて、本研究では、釈教歌における「風」と「月」の歌を通じて、西行の「雲吹きはらふ風」と「山の端の月」の意味を検討し、「方便品」の歌意および西行の仏教思想を明らかにしたい。

一、「山の端の月」の従来の詠み方と西行による新たな解釈

西行の和歌において、「山の端の月」は従来の釈教歌に見られる象徴的な意味を継承しつつ、さらに悟りの形成や西方浄土とのつながりを強調する新たな詠み方がなされている。従来の釈教歌では、「山の端の月」は釈尊や高僧の光輝を象徴し、衆生を導く存在として詠まれることが多かった。

性空上人のもとに、よみてつかはしける

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月

（和泉式部・後拾遺集・哀傷・1342）

寿量品 我時語衆生、常在此不滅、以方便力故、理有滅不滅

人めには世のうき雲にかくろへてなをすみわたる山の端の月

（藤原忠通・田多民知集・183）

寿量品 常在靈鷲山

末の世は雲のはるかにへだつとも照さざらめや山の端の月

（藤原俊成・長秋詠藻・466）

和泉式部の歌では、「山の端の月」は暗闇の中を進む者を照らす光として表現されている。ここでの「山の端の月」は、単に性空上人の象徴にとどまらず、迷いの道を進む衆生にとつて進むべき方向を示す存在としての意味を持っている。忠通の歌では、世俗の苦しみや迷妄（雲）が月を覆い隠しても、その光はなおも澄み渡ると詠まれており、釈尊の智慧がどのような状況でも変わらず存在し続けることを示している。俊成の歌においても、時代が下るにつれ人々の迷妄が深まる（雲が月を隔てる）としても、釈尊の光は変わらず衆生を導くこと

が詠まれている⁽⁵⁾。

それに対して西行における「山の端」の「月」を見てみよう。

見月思西と云事を

山の端に隠るる月をながむればわれと心の西に入るかな（西行・山家集・870）

西行の歌は、従来の「山の端の月」の表現を受け継ぎながらも、特に悟りの形成や西方浄土への指向性と結びつけて詠まれている点に特徴がある。この歌では、沈みゆく月を見つめることで、心が自然と西方へ向かう様子が詠まれている。ここでの「山の端」の「月」は、単なる仏の光ではなく、悟りへの接近を象徴するものとして表現されている。

また、表現が類似している「聞はれて心の空にすむ月は西の山辺や近くなるらん」（山家集・876）という歌においても、山辺の月は、心の迷いが晴れるにつれて悟りへと近づくものとして詠まれている⁽⁶⁾。ここで詠まれる「月」は、単なる仏の象徴ではなく、修行によつて自らの心の中に現れる悟りそのものである。これにより、「山の端」の「月」は悟りの象徴としての側面を強調しつつ、自らの修行による心の変化とも結びつけられている。

このように、西行の「山の端」の「月」の表現は、従来の詠み方を踏まえながらも、悟りとの関わりをより強調する点に特徴がある。

二、「風」の釈教歌における役割と西行の風の詠み方

和歌における「風」もまた、多様な象徴性を帯びている。特に釈教歌の伝統では、「風」はしばしば仏法や悟りに関わる比喻として用いられる。その意味するところは文脈によって異なるが、大きく三つの側面が指摘できる。

第一に「仏法の広がり」としての風である。風が大気中に吹き回る様子から、仏の教えが世に広まり衆生を行き渡る様子を風に喩える表現がある。いわゆる「法風」という言葉があるように、風は仏法そのものの感化力・伝播力を象徴しうるのである。例えば、次の慈円の歌では、

広宣布布

法の花散らぬ宿こそなかりけれ驚の高嶺の山おろしの風（慈円・拾玉集・2522）

「法の花」が仏法の象徴であり、どの宿（場所）にも必ず仏法の影響が及んでいることを詠んでいる。「山おろしの風」は、仏法が広く世に伝わることを示している。

第二に「迷妄の除去」としての風である。これは風が雲を吹き払うイメージに基づき、無明の雲（煩惱や悩み）を吹き飛ばして真理の光を顕現させる働きとして風を捉える比喻である。

無量義経三首

身につきて燃ゆる思ひを消えましや涼しき風のあふがざりせば

（西行・山家集・1538）

この歌では、心の中で燃え続ける迷いや執着（「燃ゆる思ひ」）を、涼しい風が吹き払うことで静めるという表現になっている。ここでの風は、仏法の力が煩惱を取り除くことを象徴している。

第三にやや異色であるが、「迷妄そのもの」を風に喩える場合がある。例えば、人の心を惑わせ安定させない煩惱の働きを、吹きすさぶ風になぞえる表現である。

寿量品 如医善方便

風に悩むまぐずが原に朝日影のどけき方のたよりなりけり（慈円・拾玉集・2496）

この歌では、吹き荒れる風が「まぐずが原」（雑草が生い茂る荒れ地）を悩ませるように、煩惱によつて心がかき乱される様子を表現している。しかし、そこに差し込む朝日の光（仏の智慧）が、心を静め、悟りへ導く希望となることが示されている。

つまり、釈教歌における「風」は、仏法を伝えるものとも、煩惱や迷いを払うものとも、煩惱そのものともなりうる、多義的な象徴的意味を有している。

ところが、西行の和歌表現を詳しく見ると、「風」の担う意味にはある独自の偏りがあることがわかる。それは、風が一貫して仏法の力として肯定的に描かれている点である。「風」迷妄そのもの」という否定的な用法が他の釈教歌に見られるのに対し、西行の和歌ではほとんど採用していない。むしろ風は「仏のはたらき」を示すもの、すなわち衆生の迷いを晴らし悟りへ導く積極的な力として登場する。

三、「風」と「月」の象徴的意味とその組み合わせ

西行をはじめとする釈教歌の詠み手は、「風」と「月」を独立した象徴としてだけではなく、それらの相互作用にも注目し、そこから悟りの形成過程を表現している。

風と月の関係には、大きく二つのパターンがある。第一のパターンでは、風が雲を吹き払うことで月が現れる。この場合、「風」は仏法の力を象徴し、「雲」は迷い、「月」は悟りの象徴として機能する。仏や菩薩の力によつて衆生の迷妄が取り除かれ、智慧の光が明らかになるという考え方がここに表れている。

神力品の心を

大空をみのりの風やはらふらん雲かくれにし月を見るかな

（源俊頼・散木奇歌集・872）

この歌では、「みのりの風（仏法の風）」が雲を払うことで、隠れていた月（悟りの光）が現れる様子が詠まれている。この場合、風は仏法の教えそのものであり、月が雲間から姿を現すという視覚的な情景を通じて、仏の教えが迷妄を除き、悟りを顕現させるという思想を伝えている。

これに対し、第二のパターンでは、「月」が澄み渡ることによつて雲が自然に消え、風が吹くという順序が取られる。ここでは、「風」はもはや迷妄を払う力ではなく、悟りの境地が達成された後に吹く清涼な風として機能する。この場合、悟りは外的な力によつてもたらされるのではなく、修行者自身の努力によつて心が清められることで自然に開かれるものである。明恵の次の歌はこのパターンの典型である。

禅堂へ行く時、曇りたる月、出観の後雲間より出でて、松風にたぐひてわりなきに

心月のすむに無明の雲はれて解脱の門に松風ぞ吹く（明恵・明恵上人集・88）

「心月が澄む」とは、修行を通じて心が清浄になり、悟りの光が明確になることを意味する。そして、その結果として「無明の雲（迷妄）」が晴れ、解脱の門が開かれる。ここでの

「松風」は、悟りの境地における静けさや安らぎを象徴し、悟りの完成が風の吹く情景によつて示されている（一）。

この二つのパターンの違いは、「風」が悟りに至る過程でどのように機能するかによって区別される。第一のパターンでは、風が積極的に迷いを吹き払う役割を持ち、悟りは仏の導きによってもたらされる。他力的な救済の側面が強調され、仏菩薩の慈悲によって衆生が悟りへと導かれる過程を表している。一方、第二のパターンでは、修行者の心そのものが清らかになることで悟りが開かれ、その結果として風が吹く。この場合、風は悟りの証しであり、悟りの完成を表すものとして詠まれる。

しかし、両者には共通点もある。それは、「月」が常に悟りを象徴し、「雲」が迷妄を表し、「風」が仏法の働きを担っている点である。違いは、風が悟りを開くための手段として作用するか、悟りの証しとして存在するかの違いにすぎない。どちらのパターンにおいても、「風」と「月」の関係は悟りへの道程を表現し、仏教的な真理を伝える役割を果たしている。

おわりに

西行の方便品の和歌は、従来の釈教歌と異なり、単に静的な情景を描くのではなく、「風」「雲」「月」という自然の要素を組み合わせることで、仏法の働きを動的に表現している。この構造は、『法華経』『方便品』の「諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世」という教えを視覚的に示すものであり、単なる自然描写を超え仏法的作用を具体化する試みといえる。

この和歌において、「風」は仏法の力を、「雲」は衆生の迷妄を、「月」は悟りや智慧を象徴する。それらが相互に関係し、「風が吹くことで雲が払われ、隠れていた月が姿を現す」という流れが生まれる。これは、「仏法が迷妄を取り除き、衆生を悟りへ導く」過程を象徴するものであり、西行の歌の大きな特徴である。

特に、「山の端の月」の意象が、従来の釈尊や僧侶の象徴という枠組みを超え、衆生の悟りの形成として再解釈されている点が注目される。西行の方便品の歌では、悟りは単に与えられるものではなく、「風」によって「雲」が取り払われることで「月」が輝くように、仏法の力によって迷いが晴れ、悟りの境地が開かれるプロセスとして描かれている。このように、西行の和歌では、仏法の働きが単なる理論ではなく、具体的な自然の変化として表現され、悟りへの道が直感的に示されている。

このように、西行の方便品の歌は、従来の象徴表現を踏まえつつ、仏法の働きを自然の変化の中に組み込み、悟りの形成を動的に描いた点に独自性がある。風・雲・月の相互作用を通じて、仏法の力が具体的に可視化され、衆生が悟りへと至る過程が詩的に表現されているのである。

注

- (1) 石原清志『釈教歌の研究』同朋舎、一九八〇年
- (2) 山田昭全『西行の和歌と仏教』明治書院、一九八七年
- (3) 宇津木言行『聞書集考論 西行家集の脱領域研究』花鳥社、二〇二四年
- (4) 久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』岩波書店、二〇一三年
- (5) 『長秋詠藻全評釈 下巻』武蔵野書院、二〇一八年
- (6) 西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『山家集・聞書集・残集』明治書院、二〇〇八年
- (7) 平野多恵・谷知子『秋篠月清集・明恵上人歌集』明治書院、二〇一三年

細川幽斎「九州道の記」における地名の詠み方

—実景と伝統の調和—

黄 逸松

中世末期の武将歌人細川幽斎は、「古今伝授」を代表とする多くの和歌伝統を後世へと伝えたことで和歌史において重要である。「古今伝授」については多くの研究がなされているが、それ以外に幽斎がどのような形で和歌の伝統を伝承したのかに関する検討はまだ不十分であると思われる。

現段階の成果として、二つの論文を東京外国語大学の論集『言語・地域文化研究』に発表した。一つは幽斎が伝えた歌論について、二条派歌学の金科玉条をそのまま伝えているように見えるものが実は、三条西家の秘伝もそこに織り交ぜられ、幽斎の取捨選択と組み換えによって再構築されたものと指摘した。もう一つは、幽斎が三条西公国に送った百首歌の組題の選択において、宮廷続歌会の伝統を伝承する意図があることを指摘した。

今回の発表は、幽斎の紀行文における歌枕の扱いに関する考察である。採り上げる作品は、「九州道の記」である。この紀行文は秀吉の九州征伐を受け、天正十五（1587）年四月二十一日から七月二十三日までの幽斎の旅を記録したものであり、途中幽斎が詠んだ和歌、発句、狂歌が収録されている。先行研究では、狂歌に見られる平俗化した表現を高く評価し、発句に見られる地方の人々との交流の意義を認めているが、地名を詠んだ歌に対しては伝統的な詠み方と位置付けている。しかし、幽斎は必ずしも伝統を踏まえて地名を詠んだのではない。旅の場面によって詠み方を変えているように見受けられる。

本研究では、地名、特に歌枕を詠み込んだ歌における幽斎の詠歌姿勢について分析する。往路、帰路、そして秀吉への近侍という三つの部分からそれぞれ幽斎の和歌を取り上げ、歌枕の伝統的な詠まれ方と比較する。さらに、幽斎の実体験がどのように詠作に反映されたかの視点から、幽斎の詠み方の特徴を明らかにする。その上で幽斎がどのように和歌の伝統を受け止めて、詠歌に活かしていたのかについて考察する。

細川幽齋「九州道の記」における地名の詠み方

—実景と伝統の調和—

東京外国語大学 黄 逸松

はじめに

天正十五(1587)年四月二十一日、豊臣秀吉の九州征伐¹を受け、細川幽齋(1534—1610)は居城の田辺から出発し、九州に赴いた。同年の七月二十三日に難波に帰還し、約三か月間の旅となった。その間に幽齋が詠んだ和歌や発句、人との贈答計八〇首は旅の記録とともに日記風に綴られ、「九州道の記」としてまとめられている。

紀行は題詠と異なり、作者は実際に景物を目にしてそれを題材にして歌を詠む。そのため、作者の実体験はしばしば歌に反映される。一方、幽齋は伝統的な詠み方に長じた歌人であり、典故や古歌を踏まえた歌を多く詠んでいる。では、「九州道の記」において、幽齋が見た実景と伝統はどのように詠歌に反映されたのだろうか。本研究では、このような問題意識をもって「九州道の記」の鑑賞を試みる。

一、先行研究整理と問題点

まず、「九州道の記」全体の基調について、林達也氏の研究²によれば、幽齋は歌枕についての伝承や観念を紹介することが少なく、さりげなくそれらを踏まえた歌を詠み、淡泊な記述で終わらせている。そのような姿勢はそれまでの紀行文と比べて新鮮だとされる。ほかに、鶴崎裕雄氏の研究³では、具体例の分析を通して、歌枕(あるいは名所)を詠んだ本歌取りと歌枕でない地名を詠み込んだ狂歌が多いという全体的な特徴が指摘された。

名所を詠む際に、本歌取りをするのは当時一般的な詠み方だと言える。一方、幽齋の歌学をまとめた『聞書全集』には「名所に読みならはさぬもの詠む事、其所へ行きては眼前に見る事、聞く事は證歌を求めずして讀むべきなり、習なり」⁴というような観点が見られる。つまり、名所において実際の見聞が詠み慣れていないものでも、慣例を求めずに詠むべきである。この観点は『八雲口伝』の「名所をよまむ事、常に聞きなれたる所をよむべし。但、其所にのぞみてよまむには、耳とほからむもくるしかるまじきなり」⁵に通ずるところがある。古くからの名所を詠む際の作法として捉えられる。

和歌において、実際の詠作と歌学理論は必ずしも対応していないが、名所を詠む際に、現地での見聞と名所の伝統は古くから歌人たちにとって重要な要素だと言える。それを踏まえた上で、本研究では、「九州道の記」において幽齋が詠んだ名所の歌を再検討し、実際の見聞と伝統とはどのように繋がるのかを明らかにする。方法として、「九州道の記」は紀行文であるため、本研究では幽齋の道のりに沿って本文を検討していく。紀行文全体を三段階(往路、九州滞在、復路)に分け、名所を詠んだ歌をそれぞれ取り上げ、幽齋の詠み方を考察する。

二、伝統の拠り所が窺える往路

まず、往路部分の区切りついて、幽斎が最終的に上陸した箱崎に到着した五月二十五日までを往路部分の終点とする。出発の四月二十一日から約一か月の間、山陰道に沿って船旅を中心に進んでいた。この期間の特徴として、名所を詠んだ歌からは幽斎が何を参考に伝統を踏まえていたのかが読み取れる。

例えば、「暮れわたる鐘の御崎を行く舟にわれは忘れず古郷の夢」(『衆妙集』715 番)が挙げられる。これは幽斎がかねの御崎において、地名の由来を聞いた後、『勅撰名寄』という資料を想起し、『万葉集』の歌⁶を踏まて詠んだものである。この歌は先述した鶴崎氏の研究でも取り上げられている。鶴崎氏は『勅撰名寄』⁷が永正三年(1506)年成立の宗碩編『勅撰名所和歌抄出』だという可能性を指摘し、幽斎の歌が『万葉集』の歌の本歌取りであると指摘した。

それを踏まえて本研究で注目したいのは、まず、歌枕の伝統を把握するために、『勅撰名寄』のような歌枕類聚書を幽斎が頼りにしていたことである。次に、幽斎の歌は必ずしも『万葉集』の歌の本歌取りとは言い切れない。なぜなら、幽斎自身がこの歌に対して「かやうに言ひ戯れて」と評価し、また万葉歌の下の句をほぼそのまま援用した踏まえ方は、本歌取りの作法に相応しくない⁸。ゆえに、幽斎のこの歌は古歌をもじった狂歌⁹として捉えられる。

名所であるかねの御崎において、幽斎がわざわざ狂歌風に古歌を踏襲したのは、現地で聞いた地名の由来と『勅撰名寄』の記述の間にズレがあったからである。『万葉集』や歌枕類聚書では「金」という字が使われているに対し、実際では「鐘」であるべきと聞いたのである。このように、実際の見聞と伝統にズレがある場合、幽斎はそのまま伝統を援用するのではなく、実際の見聞に忠実な詠み方をしていることが窺えた。

三、伝統への意識が強い九州滞在

五月二十五日に箱崎に上陸した後、秀吉と合流するまでの間、幽斎はしばらく随所見物をしていた。七月四日秀吉が帰路に就き、幽斎もその後出発した。この期間に詠まれた名所の歌からは伝統への意識がより強く見られる。

例えば、幽斎が袖の湊において詠んだ二首が挙げられる。「いざさらばともに濡らさむ旅衣袖の湊の浪の枕に」、「日も暮れぬいざ舟寄せて寝もしなん引敷物には袖の湊を」(『衆妙集』719 番、720 番)。『新編日本古典文学全集』の注釈によればこの二首は『伊勢物語』の歌を本歌取りし、旅愁に恋の趣を添えた作である¹⁰が、本研究ではやや違う読みを提示したい。

そもそも、袖の湊は、現代の参考書『歌ことば歌枕大辞典』では歌枕として認定されているが、『勅撰名寄』や『五代集歌枕』などの類聚書にはその名前が見当たらない。しかし、歌言葉としての源流が『伊勢物語』二十六段の歌「思ほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし舟の寄りしばかりに」にあることは首肯できる。勅撰集の恋歌にもよくみられる¹¹。

幽斎が袖の湊に臨んだ際に『伊勢物語』二十六段の歌を真っ先に想起したことは想像に難

くない。しかし、彼が詠んだ二首の歌を見てみると、一首目には古歌を踏襲した痕跡が見られず、二首目は『伊勢物語』第三段の歌「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも」を踏襲している。幽斎はなぜこのような形で伝統を取り入れていたのか。

彼の思惑を解明するために、まずはなぜ『伊勢物語』二十六段の歌を踏襲しなかったかを考察する。一つの理由として、幽斎が頼りにしていた『勅撰名寄』のような歌枕類聚書に袖の湊の名前がなかったことが考えられる。「そでのみなと」という表現が『伊勢物語』に由来し、勅撰集に多く見られても、実際の地名との関係性が薄い。そのため幽斎は直接『伊勢物語』二十六段の歌を踏まえることをしなかった。もう一つ考えられる理由として、幽斎はすでにこの旅において『伊勢物語』二十六段の歌を踏襲したことが挙げられる。それは五月七日あたり、幽斎が浦小畑という港にたまたま唐船を見て詠んだ一首である。「われもまた浦づたひして漕ぎとめぬ唐船の寄りし湊に」（『衆妙集』706 番）。初句の「われもまた」は『伊勢物語』の昔男を意識した表現である。従って、短い間に同じ古歌を二度踏まえることを幽斎は避けようとしていたかもしれない。

『伊勢物語』二十六段の歌を取り入れることが叶わず、代わりに第三段の歌を踏まえてもう一首歌を詠んだことから、幽斎は袖の湊と『伊勢物語』との関係性を強く意識していたことが窺える。そして、第三段の歌を取り入れる際に、その手助けとなったのは幽斎が見た実景だと推測できる。注目すべきは二首目の歌の初句「日も暮れぬ」である。それによって、「暮れ」、「寝」、「引敷物」、「袖」といった表現が繋がり、『伊勢物語』第三段の歌は自然と流れ込む。しかし、本文の前書きによれば、幽斎が袖の湊に向かった時は「日高く侍りければ」と記してあり、つまり正午ごろである。それを踏まえて、この二首全体は幽斎が『伊勢物語』と袖の湊を結びつけることに悩んだ挙句、夕暮れに触発されてできた作として捉えられる。

四、実際の見聞が際立つ復路

七月四日秀吉と別れた後、幽斎は船で瀬戸内海を通過して山陽道を遡り、同月二十三日に難波に着いた。この二十日あまりの復路において、幽斎が詠んだ名所の歌には実際の見聞が際立っている。

例えば、「行く舟の追風きほふ明石瀉片帆に月をそむけてぞ見る」（『衆妙集』764 番）という歌が挙げられる。この歌は七月二十二日の明け方に、明石海峡を渡り、淡路島に寄り道をしようとした際の作である。本文の前書きによれば、寄り道をするために、追い風に対して片帆で受けていたことが分かる。「かたほ」は帆を斜めにかけることを意味する。同時に、「かたほなり（片秀なり）」という形容動詞があり、完全に整っていないさまを意味する。両者が掛詞となり、ちょうど二十二日あたりの半分欠けた月を表していると解釈できる。

明石は有名な歌枕で例歌は枚挙にいとまない。しかし、幽斎は自分が経過した時の様子をそのまま歌に詠み、「かたほに月を」という前例のない表現を生み出した。实景に忠実な詠み方である。

おわりに

総じて、「九州道の記」から、幽斎が名所を詠む際に伝統と慣例を念頭に置いたことは読み取れる。だがそれと同時に、実際の見聞を重視するという詠み方が底流にあることも見逃せない。「九州道の記」において、伝統を取り入れた歌を一言で本歌取りと言っても、それは単に古歌の表現を踏襲するという営みではなかった。伝統と現実との両方を理解し、その間にある距離感を踏まえた上で両者を組み合わせるという工夫が幽斎の歌から見られる。

注

和歌の引用・歌番号は全て古典ライブラリーの『新編国歌大観』『新編私家集大成』による。『国史大辞典』『新編日本古典文学全集』などの参考書類は JapanKnowledge による。

¹ 「九州征伐」という呼び方は『国史大辞典』による。豊臣秀吉が天正十五（1587）年に行なった島津氏平定の戦いをいう。

² 林達也 1989「中世を読み解く九州道の記―戦国武将の歌と戦」国文学解釈と鑑賞五四巻十二号 131―135 頁。

³ 鶴崎裕雄 2010「細川幽斎の紀行―もう一つの紀行紹介への布石」『細川幽斎―戦塵中の学芸』笠間書院 297―317 頁。

⁴ 『日本歌学大系 第六巻』95 頁。

⁵ 『日本歌学大系 第三巻』391 頁。

⁶ 「ちはやぶるかねのみさきを過ぐれども我はわすれずしかのすめ神」（万葉集・巻七・雑歌・1234）。

⁷ 永青文庫には幽斎奥書の写本が所蔵されている。細川家北岡文庫（永青文庫）,107―36―8 出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100097003>

⁸ 例えば、二条派の重要歌論書『井蛙抄』には「私云、本歌をとれるやう、さまざまなり。一のやうは古歌の詞をうつして上下におきてあらぬことをよめり」（『日本歌学大系 第五巻』31 頁）のような言説がある。古歌の詞を踏襲する際に位置を変えることを推奨している。それ以後の歌論書にも似たような趣旨のことが書かれている。

⁹ 幽斎の時代はまだ狂歌の黎明期であるため、定義が曖昧である。林氏の研究では、「『狂歌』的な」という表現を使用しているが、鶴崎氏の研究では、「狂歌」、「狂歌風な」といった表現を使用している。幽斎の狂歌の本質については今後の課題にしたい。本研究では掘り下げる余裕がないため、一般的な表現「狂歌」を使用する。

¹⁰ 『新編日本古典文学全集 四八』557 頁。

¹¹ 例えば、「かげなれてやどる月かな人しれずよなよなさはぐそでのみなとに」（続後撰和歌集・恋二・734・式子内親王）。

『平家物語』濯頂卷前半部の形成過程

——結節点としての「女院出家」「大原入」——

野中 成淳

『平家物語』には、六代詩で終える断絶平家型と建礼門院譚で終える濯頂卷型の、大きく二種類の終わり方が存在するが、現在、発表者はとくに建礼門院譚を中心に『平家物語』の終結部の形成過程について研究している。

2024年8月の軍記・語り物研究会「大原御幸語の形成過程——その史実性の再検討も含めて——」において、史実の可能性が高いとされてきた大原御幸譚について、作為が随所に見られること、とくに大原という場所の設定は、『建礼門院右京大夫集』の影響による可能性が高いことを指摘した。

また、2025年には「安德帝入水記事の形成過程——覚一本の安德帝像の矛盾を糸口として——」という題目で、覚一本の安德帝像の矛盾の分析から、大原御幸譚（覚一本「大原御幸」「六道之沙汰」「女院死去」）が『平家物語』本編とは独立して成立したことを示す予定である（発表学会は未定）。

本発表はこれらの研究の一環として、壇浦合戦後、大原御幸譚までの建礼門院の動向（覚一本「女院出家」「大原入」）について、その形成過程を論じる。一連の記事の中心になる建礼門院の出家記事では、長楽寺の阿証坊印西が女院の戒師を務めたことが記されるが、これは史実では大原聖人湛豪とされる。この改変の背景には、『建礼門院右京大夫集』の影響が想定されるが、同様の影響は語り本系諸本の大原入記事にも見られる。一方で、読み本系諸本の大原入記事には、巻や章段を跨いだ重複が見られ、記事の編集の痕跡が存在する。ここから、大原入記事が壇浦合戦単と大原御幸譚とを繋ぐために整えられたこと、その際に影響を与えたのが『建礼門院右京大夫集』であることが明らかになる。

上記のような形成過程は『平家物語』諸本を対照させると、読み本系諸本の段階での流動が、語り本系諸本の段階で収束することがわかり、『建礼門院右京大夫集』他さまざまな典拠の影響を受けながら、それを一つの物語として収斂させる様が浮かび上がるのである。

『平家物語』灌頂卷前半部の形成過程

——結節点としての「女院出家」「大原入」——

京都大学大学院 野中成淳

一、はじめに

『平家物語』の終結部には、六代の処刑で終える「六代処刑型」と、建礼門院の往生で終える「女院往生型」とが存在する^{*1}。発表者は、とくに建礼門院譚の形成過程について研究しており、本発表はその一連の研究のうち、「女院出家」「大原入」に相当する箇所^{*2}の形成過程について検討する。

二、『平家物語』諸本の六代譚・建礼門院譚概観

『平家物語』終盤の六代譚・建礼門院譚については、諸本の間でも記事配列に違いが見られるが、章段レベルでその対応を示したのが、【表1】である。

紙幅の都合上、五本に代表させるが、それぞれの本の諸本分類上での位置づけは、四部本…読み本系・女院往生型／延慶本…読み本系・六代処刑型／盛衰記…読み本系・女院往生型／屋代本…語り本系・六代処刑型／覚一本…語り本系・女院往生型となっている。その上で、六代譚は渡瀬、灌頂卷前半部にあたる「女院出家」「大原入」は実綱、灌頂卷後半部にあたる「大原御幸」「六道之沙汰」「女院死去」は点線で囲み、それぞれの配列に異同を示した。

読み本系三本において、「女院出家」が①から④に渡っているが、それぞれ①は〈女院吉田入り〉、②は狭義の〈女院出家〉、③は〈女院の悲嘆〉、④は〈吉田在所の荒廃／女院隠遁を望む〉という内容になっている。語り本系ではこれらがひとまとめにされているが、読み本系諸本では、物語内の時系列に沿うかたちで断片的に入っている。また、女院往生型の伝本のうち、四部本と盛衰記については、「女院出家」「大原入」の記事に重複が存在する。灌頂卷前半部の記事の分布については、このように諸本ごとに大きな違いが見られるのに対して、灌頂卷後半部の三章段は、いずれの本を見ても三つでひとつのまとまりを構成していることがわかる。以下、この灌頂卷後半部を大原御幸譚と呼称するが、『平家物語』終盤の建礼門院譚については、灌頂卷前半部と大原御幸譚との間に位相差が存在することがわかる。

また、六代譚については、「六代」「泊瀬六代」についてはすべての伝本でひとまとまりであるいっぽう、六代処刑型の延慶本・屋代本では「六代被斬」が離れるが、これは「六代」「泊瀬六代」が文治元年（1185）の年末から翌文治二年（1186）の春にかけての話であるのに対して、「六代被斬」はそれより約15年後（覚一本では建久十年（1199）の頼朝死去よりも後）のこととされているためと考えられるだろう。そして、この二伝本は「泊瀬六代」と「六代被斬」の間に、文治二年（1186）の四月とされる大原御幸譚が入り込むことになる^{*3}。

*1『平家物語大事典』（東京書籍、2010年）他、先行研究では「断絶平家型」「灌頂卷型」と呼称されることが多いが、これらが厳密には語り本系の下位分類としての名称であり、本発表では読み本系諸本についても検討の対象に含むことから、終結部の主人公となる人物およびその最期の様子をもって「六代処刑型」「女院往生型」の呼称を用いる。

*2章段名は覚一本準拠。とくに断らないかぎり以下も同様である。

*3盛衰記は「六代被斬」が存在しない。この欠落を本来あったものの偶発的な脱落と見る場合は六代処刑型ということになるが、発表者は盛衰記卷四十八が四部本・長門本と同様に灌頂卷前半部の重複記事を持つことから、盛衰記作者が女院往生型を志向して六代処刑記事を削除したものと考えている。

【表1 『平家物語』諸本 六代譚・建礼門院譚配列】

四部本	延慶本	盛衰記	屋代本	寛一本
卷十一 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 女院出家① 女院出家② 卷十二 女院出家③ 女院出家④ 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 灌頂卷 女院出家(重) 大原入(重) 大原御幸 六道之沙汰 女院死去	第六本 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 女院出家① 女院出家② 女院出家③ 第六末 女院出家④ 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 女院死去 六道之沙汰 大原御幸	卷四十三 先帝身投 能登殿最期 卷四十四 内侍所都入 女院出家① 女院出家②③ 卷四十五 女院出家④ 卷四十六 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 卷四十七 女院出家(重) 大原入(重) 大原御幸 六道之沙汰 女院死去	卷十一 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 女院出家 卷十二 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 女院死去 六道之沙汰 大原御幸 六代被斬	卷十一 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 平大納言被流 卷十二 女院出家 大原入 大原御幸 六道之沙汰 女院死去 六代被斬 女院出家 灌頂卷

※六代譚にも建礼門院譚にも属さない記事が入る箇所については空白とした。【表2】についても同様である。

ここまでの分析から導かれるのは、以下の三点となる。

- (1) 六代処刑型の配列は物語内の時系列に従っている。
- (2) 大原御幸譚はかなり早い段階からひとまとまりになっていた。
- (3) 灌頂巻前半部は、もともと物語内の時系列に従っていたが、大原御幸譚に吸い寄せられるように後ろへと移動した。四部本、盛衰記に見られる記事の重複は、この過渡期の痕跡であると考えられる。

灌頂巻に関する議論としては古く、灌頂巻が特立されたものか否かとする灌頂巻特立論争があったが、灌頂巻五章段をひとくくりにして考えるのではなく、灌頂巻前半部と大原御幸譚とで分けて形成過程を考える必要がある^{*4}。

*4 一連の論争については、渥美かをる「平家物語灌頂巻成立考」(「愛知県立女子大学愛知県立女子短期大学紀要」8号、1957年)の見解が概ね支持されて、灌頂巻は特立されたものとする見方が定着しているが、灌頂巻前半部と大原御幸譚の成立事情の位相差については本発表で初めて指摘したものである。

三、灌頂卷前半部の核と流動

【表1】をもとに、灌頂卷前半部の内容をより詳細に示したものが【表2】である。

【表2】『平家物語』		諸本の灌頂卷前半部の配列	
四部本	延慶本	盛衰記	屋代本
卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 元暦大地震 吉田在所の荒廃 女院隠遁を望む 時忠配流 女院大原寂光院 入(6)	第六本 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き (5) 女院隠遁を望む 元暦大地震 吉田在所の荒廃 時忠配流 女院大原寂光院 入(6)	卷四十三 壇浦合戦譚 卷四十四 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き (5) 女院隠遁を望む 卷四十五 女院隠遁を望む 卷四十六 時忠配流 女院大原寂光院 入(6)	卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 卷十二 女院隠遁を望む 女院大原寂光院 入(6)
灌頂卷 (1) 女院吉田入(重) (3) 女院の嘆き(重) (5) 女院隠遁を望む(重) (6) 女院大原寂光院 入(7) 寂光院の描写 天原御幸譚	天原御幸譚 六代処 六代助 寂光院の描写 寂光院の寂寞 入(7)	卷四十八 (1) 女院吉田入(重) (2) 女院出家(重) (3) 女院の嘆き(重) (4) 吉田在所の荒廃 (5) 女院隠遁を望む(重) (6) 女院大原寂光院 入(7) 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚	六代助 天原御幸譚 六代処 寂光院の描写 寂光院の寂寞 入(7)
灌頂卷 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院 入(7) 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚	六代助 天原御幸譚 六代処 寂光院の描写 寂光院の寂寞 入(7)	卷四十九 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院 入(7) 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚	六代助 天原御幸譚 六代処 寂光院の描写 寂光院の寂寞 入(7)
灌頂卷 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院 入(7) 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚	六代助 天原御幸譚 六代処 寂光院の描写 寂光院の寂寞 入(7)	卷五十 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院 入(7) 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚	六代助 天原御幸譚 六代処 寂光院の描写 寂光院の寂寞 入(7)

これらのうち、(1)〈女院吉田入〉、(2)〈女院出家〉をはじめ、諸本にある程度共通する核が見られる箇所がある。たとえば(2)は、

・四部本（卷十一）

五月一日、建礼門院、御髪を下ろさせ給ふ。御戒の師には、長楽寺の印西上人とぞ聞こえし。

・延慶本（第六本）

五月一日、建礼門院は「憂世を厭ひ、菩提の道を尋ぬるならばこの黒髪を付けてもなににかはせん」と思しめして、御髪下ろさせ給ふ。御戒の師には長楽寺の阿証房上人印西を参らせられける。

・盛衰記（卷四十四）

同じき八日、建礼門院、吉田の辺にて御飾り下ろさせ給ふ。御戒の師は長楽寺の阿証坊印西

上人とぞ聞こえし。

・屋代本（巻十一）

同じき五月一日、女院、御髪下ろさせ給ひけり。御戒の師には、長樂寺別当阿証上人印西ぞ参られける。

・覚一本（灌頂巻）

かくて女院は、文治元年五月一日、御髪下ろさせ給ひけり。御戒の師には、長樂寺の阿証房の上人印西とぞ聞こえし。

のように、文治元年五月初旬に、吉田で、長樂寺の印西を戒師として出家したという要素が共有されている。だが、同じ（2）でも、延慶本には源信『出家授戒作法』や『澄憲作文集』に依拠した独自記事が存在したり^{*5}、盛衰記に印西についての紹介が記されるなど、核を中心にしつつも記事の流動が見られる。

それに対して、核すらもはっきりしないのは（5）〈女院隠遁を望む〉で、延慶本・長門本は宗盛・重衡の処刑を耳にしたことが隠遁の理由になったとするが、それ以外の伝本は

この御住まひも、都なほ近くて、玉鉾の道行き人の人目も茂くて、露の御命、風を待たんほどは「憂きこと聞かぬ深き山の奥の奥へも入りなばや」とは思しけれども（覚一本灌頂巻）のように、特定の理由を明示せず、後者はさらに覚一本のように地震にともなう（4）〈吉田在所の荒廃〉を遠因としてほのめかすものと（4）を記さないものに細分化される。

全体の傾向として、読み本系諸本については記事の異同が全体的に多い傾向にあるが、語り本系諸本になると、六代処刑型と女院往生型の違いはあるものの、記事自体の異同はおおむね収束（終息）する。その中で覚一本は、（1）～（8）の随所で大原御幸譚と被る内容を削除している。

四、おわりに

一連の考察から、灌頂巻前半部は、断片的な核は持つものの、総じて、壇浦合戦譚までの『平家物語』本編と、大原御幸譚とを接続するための結節点として整備された箇所だと考えられる。

両者のより良い接続が模索された読み本系諸本の段階には異同や独自記事が目立つが、語り本系諸本の段階になるとおおむね異同は収束（終息）に向かい、覚一本の段階では、大原御幸譚を意識した記事の編集が行われて、本来あった接合痕が目立たなくされていることがうかがえる。

使用本文一覧

『平家物語』諸本については各本の積文を作成し、それを用いた。予稿及び発表資料で使用する積文の底本としたものは以下の通り（予稿で使用した本は下線で示す）。

・四部合戦状本（四部本）…『四部合戦状本平家物語』（慶應義塾大学付属研究所編校、汲古書院）／・大島本…〈天理図書館蔵〉大島本平家物語巻十二（翻刻）」（「ビブリア」79号）／・延慶本…『延慶本平家物語全注釈』（汲古書院）／・長門本…『長門本平家物語』（勉誠出版）／・源平盛衰記…『源平盛衰記』（三弥井書店）／・屋代本…『屋代本高野本対照平家物語』（新典社）／・三条西家本…前田育徳会尊経閣文庫蔵の原本／・鎌倉本…『鎌倉本平家物語』（汲古書院）／・覚一本…『新編日本古典文学全集 平家物語』（小学館）

本発表を含む一連の研究で使用する積文の全文は、対照表の形式で『古典遺産』第74号（古典遺産の会、2025年10月31日発行）に掲載する予定である。

*5 小林美和「『平家物語』の建礼門院説話—延慶本出家説話考—」（『伝承文学研究』24号、1980年6月）

『枕草子』周作人訳と林文月訳との比較

——「頭弁の、職にまゐりたまひて」段前半部を中心に——

顧 宇豪

『枕草子』は『源氏物語』と並んで、平安文学の双璧と言われている。その影響力は海外にまで及び、多言語に翻訳され、日本古典及び日本文化の発信に大いに寄与している。各国語による『枕草子』の翻訳を分析することにより、日本古典に対する海外の認識と評価を知ることができよう。

発表者は中国出身者であるため、この度は『枕草子』の中国語訳に注目したい。『枕草子』の中国語訳は二十世紀後半から始まり、周作人氏訳（略称「周訳」）と林文月氏訳（略称「林訳」）という二種が存在している。先行の周訳は一九六四年に完成したが、一九八八年に初出版された。その内実については、張培華氏の論考「周作人訳『枕草子』の経緯と実態——「未出版」を中心に——」（2021年）が詳しく論じている。後行の林訳は一九八六～一九八八年に台湾大学の『中外文学』に連載された。二つの訳はほぼ同時期に公開されたわけであるが、林訳（譯林出版社、2011年）の「洪範新版序」によると、周訳を全く参考にしなかったという。両訳の訳者の経歴はそれぞれ日中の近現代史と深く関わっており、各々の日本語の習得及び日本古典との触れ合いは興味深い。また、両訳者は中国大陆と台湾という異なる環境において翻訳作業を行ったため、日本古典を享受する方法や中国語の使い方などにも違いがある。先行研究について、周訳は前述の張氏の論考があるが、訳文の内容には詳しく言及していない。林訳は直接的な先行研究は管見の限り存在しないが、林訳『源氏物語』に関する先行研究が参考になる。従って、次の段階としては、周訳と林訳とを比較しつつ、訳文の内容を詳細に研究していくことが必要であろう。

本発表は、両訳者の経歴及び所在環境の違いに注目しながら、周訳と林訳との比較検討を行う。さらに、両訳それぞれの不足を洗い出した上で、新たな『枕草子』中国語訳の生成へ向けて建設的な意見を述べ、日本古典の翻訳への関心を喚起したい。

『枕草子』周作人訳と林文月訳との比較

——「頭弁の、職にまゐりたまひて」段前半部を中心に——

顧 宇豪

はじめに

● 枕草子研究会ほか『枕草子大事典』（勉誠出版、二〇〇一）「枕草

子の外国語訳」（津島知明）

アウトン『日本文学史』（一八九九）

←

フランス語抄訳本（一九二八）

←

ボシヤールの仏訳（一九三四）、ウェイリーの英訳（一九二八）ほか

←

モリスの英訳（一九六七）、独訳、中国訳：周作人、林文月、露訳ほか諸国語訳

【訳本情報】

周作人（一八八五～一九六七）

翻訳時期：一九五九～一九六一

底本：池田亀鑑校『枕草子春曙抄』（岩波文庫、一九三二、能因本）

初版：『日本古代随筆選』（人民文学出版社、一九八八）

引用文献：『枕草子』（中国对外翻译出版社、二〇〇〇）

評価：安藤更生宛手紙「草率譯了」（一九六一・二）、鮑耀明宛手紙「此乃係稻梁之謀、覺得甚是粗糙」（一九六一・四）、自著『知堂回想録』

「始終覺得不滿意、覺得是超過自己的力量的工作」

林文月（一九三三～二〇二三）

翻訳時期：一九八六～一九八八

底本：松尾聰ほか『日本古典文学全集 11 枕草子』（小学館、一九七

四、能因本）

初版：『中外文学』（一九八六・七～一九八八・八）

引用文献：『枕草子』（譯林出版社、二〇一二）

評価：学術上の評価は不明。

【先行研究】

● 張培華「周作人訳『枕草子』の経緯と実態——「未出版」を中心に——」、『国文学研究資料館紀要 文学研究篇（47）』、三一～六一頁、二〇二一年三月。

● 姚継中『源氏物語』に関する翻訳検証研究の必要性… 豊子愷、林文月、姚継中の翻訳した『源氏物語』和歌を例として、『東アジア研究 13』、二〇一五年三月。二八七～三〇二頁。

【凡例】

- ① 略称：『枕草子春曙抄』Ⅱ【曙】、『日本古典文学全集』Ⅱ【全】、周作人訳Ⅱ【周】、林文月訳Ⅱ【林】。
- ② 便宜上、漢字は全て日本通用字に近い繁体字に統一した。
- ③ 底本は共に能因本であるため、異同は必要な箇所のみ表記する。
- ④ 訳文後の□内の日本語訳は発表者によるものである。

一、平安時代宮廷社会に対する認識

1、

【曙】頭の辨の職に参り給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。

【全】頭弁の、職にまゐりたまひて、物語などしたまふに、夜いとふけぬ。

【周】頭弁「行成」到中宮職院裡来、説着話的時候、夜已經很深了。

〔頭弁「行成」は中宮職院のうちに来て、話しているところ、夜すでにかなり深くなった。〕

【林】頭弁來到後宮、同我閑談之間、夜已深沉。

〔頭弁が後宮に来て、私と閑談の間、夜はすでに深くなった。〕

①職…【周】中宮職院―【林】後宮

②敬語表現

2、

【曙】「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなば悪しかりなん」とて参り給ひぬ、

【全】「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなばあしかりなむ」とてまゐりたまひぬ。

【周】頭弁說道：「明天是主上避忌的日子，我也要到宮中来值宿，到了丑時，便有点不合適了。這樣說了，就進宮去了。」

〔頭弁は言った：「明日は主上避忌の日（なので）、私も宮中に宿直しにくる必要がある（から）、丑の刻に到ったら、すなわちいささか不適切である。」このように言って、すなわち内裏に進んでいった。〕

【林】明日值宮中忌避方位之日，在丑時以前，須得趕回皇宮才行。說完，又回宮去了。

〔「明日、宮中忌避方位の日にあたり、丑の刻以前に、皇宮に急いで帰る必要がある。」言い終わって、また宮に帰った。〕

①御物忌…【周】主上避忌―【林】宮中避忌

②籠るべければ…【周】宮中に宿直しにくる必要がある―【林】皇宮に急いで帰る必要がある

③まゐりたまひ…【周】進宮―【林】回宮

二、本文対応

3、

【曙】つとめて、藏人所の紙屋紙引き重ねて「後のあしたは残り多かる心地なんする。

【全】つとめて、藏人所のかや紙ひき重ねて、「後のあしたは、残りおほかる心ちなむする。

【周】第二天早晨，用了藏人所使用的粗紙重疊着，写道：「後朝之別實在多有遺憾。」

〔翌日早朝、藏人所が使用する粗紙を用いて重ね畳んで書いた：「後朝の別れは実に多くの遺憾があった。〕

【林】翌晨，取用藏人所內的公文紙，重疊兩張，書写道：「今日似有言不盡意處。」

〔翌朝、藏人所内の公文紙を取って、二枚を重ねて、書写した：「今日日は思う存分に話しきれないところがあるようだ。〕

①紙屋紙…【周】粗紙—【林】公文紙

②後のあしたは残り多かる心地なんする…【周】後朝の別れは実に多くの遺憾があつた—【林】今日は思う存分に話しきれないところがあるようだ。

4、

【曙】夜を通して、昔物語も聞え明かさんとせしを鶏の聲に催されて

【全】夜とほして、昔物語も聞え明かさむとせしを、鶏の声にもよほされて

【周】本想徹夜講過去の閑話、直到天明、乃為鶏声所催、〔匆匆的回去〕。

〔元々は徹夜して過去の閑話を話して、空が明けるまでいたいが、乃ち鶏の聲に促されたところ、〔匆々に帰っていった。〕〕

【林】本欲徹夜与君共話往事、奈雞鳴頻催！

〔元々は徹夜して君と共に昔話を話したかったが、いかなせん鶏鳴が頻りに促した！〕

①明かさん…【周】空が明けるまでいたい—【林】省略

②鶏の聲に催されて…【周】乃ち鶏の聲に促されたところ—【林】いかなせん鶏鳴が頻りに促した！

5、

【曙】といとみじう清げに、裏表に事多く書き給へるいとめでた

し。

【全】と、いみじう清げに、うらうへにことおほく書きたまへる、いとめでたし。

【周】实在写得非常潇洒，且与事实相反的〔当作恋人關係〕，縷縷的写着，实在很是漂亮。

〔実に非常に潇洒に書いており、且つ事実と相反して〔恋人關係として〕、縷々と書いて、実にはたいへん綺麗であつた。〕

【林】那字迹十分清麗，内容卻大大与事实不相符合，妙極了。

〔その筆跡は大変清麗だが、内容は却つて事実と大いに符合しない。極めて素晴らしかった。〕

①裏表に…【周】且つ事実と相反して〔恋人關係として〕—【林】内容は却つて事実と大いに符合しない

②事多く書き給へる…【周】縷々と書いて—【林】欠落

三、和歌の翻訳

6、

【曙】「夜をこめて鳥の空寢ははかるとも世に逢坂の關は許さじ」

【全】「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」

【周】在深夜裡，假的鶏叫

雖然騙得守関的人，

可是逢坂関却是不能通融啊！

〔深夜の中において、偽の鶏鳴は、

関を守る人を騙せると雖も、

しかし逢坂関は却って融通が利かないのだよ！」

【林】「夜未央兮雞已啼，

仿声騙啓彼関守，

逢坂未許兮豈癡迷。

〔「夜尽きずに鶏既に鳴いて、

声を真似してかの関守を騙して（関戸を）開くようにさせて、

逢坂未だに許さず、あにや痴れ迷う。」〕

● ①【周】現代中国語への直訳―【林】三行詩（大風歌）

林文月『源氏物語』の中国語訳について、京都大学大学院文学研究科『世界の中の「源氏物語」…その普遍性と現代性』（臨川書店、二〇一〇）所収

林訳の問題点 ①「夜未央」―夜をこめて ②「已」 ③「癡迷」

② 関守は騙されたか？ ↓後文「心かしこき関守」

7、

【曙】「逢坂は人越えやすき關なれば鳥も啼かね[㊟]あけて待つとか」

【全】逢坂は人越えやすき関なれば鳥も鳴かぬ[㊟]に[㊟]あけて待つとか

【周】「逢坂是人人可過的関，

鶏雖然不叫，

便会開着等人過去的。」

〔「逢坂は人々皆通過できる関で、

鶏は鳴かずと雖も、

すなわち開いておいて人の通過を待っているのだ。〕

【林】「逢坂関兮人易過，

據云不及雞啼鳴，

関戸已啓兮相待和。」

〔「逢坂関は人通り易く、

噂によると鶏の鳴くに及ばずとも、

関戸既に開いて待っている。〕

①【周】現代中国語への直訳―【林】三行詩（大風歌）

②【林】「鶏の鳴きに及ばずとも、関戸既に開いて」

③【林】「待和」

四、中国語の問題・林訳における造語

8、

【曙】心かしこき關守待るめ[㊟]りと聞ゆ。立ち返り、

【全】心かしこき関守待るめ[㊟]れと聞ゆ。立ち返り、

【周】「這裡是有着很用心的守関人在哩。」又隨即送來回信，「乃是一首返歌。」

〔ここには心の利く関守がいるのよ。〕またすぐさま返信が送られてきた。〔乃ち一首の返歌…〕

【林】此地有心明神清之関守相候也。很快地，又有回音如下：

〔この地には賢くて分別のいい関守が待っているのである。〕すぐに、また以下のような返信があった…〕

①心かしこき…【周】用心―【林】心明神清

②【周】回信―【林】回音

江戸時代における『詩経』名物学の展開

—京都本草学派を中心に—

謝 蘇杭

本報告は京都本草学の代表者である稲生若水・松岡恕庵・小野蘭山などを中心に、それらの『詩経』に対する「名物学」的研究の内容と発展経緯を解明しようとするものである。近世期本草学者の学問における関心は、主として三つの領域に集中している。すなわち、伝統医学の傍流となる「薬学」と、動植鉱物の名実同定を重視する「名物学」、さらに天産物の有用性に目をつけ、その産業化によって実利を得ることを目的とする「物産学」である。そのなかに、近世期における「名物学」の発展は、『詩経』をめぐる注釈と考証を中心に展開されてきた。それに関する学問は、『詩経』名物学と呼ばれている。その根底をなすのは、朱子学における「正名論」や「格物致知」の思想と考えられる。

これまで行われた『詩経』名物学に関する研究は、文学という文脈で語られているものが多く、『詩経』名物学類著作の記述内容を焦点に本草学史の視点で分析を行うもの、あるいは、その記述内容自体の変化と発展に即して史的な整理を行うものは未だに見られていない。本報告はこれまでの『詩経』研究における空白を補完する意味で、とりわけ本草学史上「正統派」と呼ばれている「京都本草学派」を中心に、その『詩経』名物学類著作の記述内容について掘り下げたい。

近世期詩経研究の代表格といえる京都本草学派による『詩経』名物学研究は、もともと『詩経』に出てきた動植物に対する名実同定にとどまっていた。しかし近世中後期になると、その記述に生態や製法などといった内容が見られ、「物産学」的な色合いがついてきたのである。本報告では、各時期における京都本草学派の『詩経』名物学著作を取り上げ、それらの記述内容を分析しつつ、『詩経』名物学の発展の実態について具体的に検討していこうとする。

江戸時代における詩經名物学の展開—京都本草学派を中心に—

千葉大学 謝 蘇杭

はじめに

本発表では、江戸時代の本草学において『詩經』名物学がどのように展開し、特に京都本草学派によってどのような学問的成果が生まれたのかを論じる。『詩經』は中国の古典の一つであり、その詩篇には多くの動植物の名称が含まれている。これらの名物に関する考証は、単なる文学的研究にとどまらず、自然科学や薬学とも関連を持ち、江戸時代の学問体系の中で重要な位置を占めた。本発表では、稲生若水、松岡恕庵、小野蘭山といった学者たちの研究を分析し、近世日本における『詩經』名物学の展開とその変遷を明らかにする。

一、本草学の名物学的伝統と『詩經』

中国には、古来より薬学としての本草学とは別に、「名物学」と呼ばれる博物学的伝統が存在した。名物学は、文学や史書に現れる動植物などの名称が何を指すのかを考証する学問であり、その背景には『論語』の「正名」や「多識」などの思想があった。また、朱子学の「格物致知」とも関連づけられることがある。

名物学の代表的な書物として、唐の『芸文類聚』などの類書や、中国の『爾雅』、『山海經』などが挙げられる。これらは知識の集積であり、百科全書としての役割を果たした。しかし、百科事典の流行は文化の啓蒙には貢献したものの、学問の深化には必ずしも結びつかなかった。特に本草学においては、名義の考証が優先され、実物の観察が軽視される傾向があった。

名物学の研究において重要視されたのが『詩經』である。『詩經』に見られる動植物に関する研究は、三国呉の陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』（通称『陸疏』）をはじめとし、宋・元・清の時代を通じて発展し、日本にも影響を与えた。江戸時代には、稲生若水らによる『詩經』名物研究が行われ、中国古典を基盤とした「知の日本化」が推進された。

また、日本における本草学の展開には『本草綱目』の伝来が大きく関与しており、それを受けた林羅山の『多識編』は、名物学的な研究書として位置付けられる。『多識編』の書名は『論語』「陽貨篇」の「多識」に由来するとされるが、実際には本草学に密接な意味を持つ概念であり、名物学的文脈で使用されてきた。

しかし、名物学の研究が「名（知）の蒐集」にとどまり、実物の研究が軽視されると、学問の発展が停滞する危険がある。そのため、名物学を「物産学」へと発展させるためには、典籍上の「名」から現実の「物」へと研究の重点を移行させる必要があった。江戸時代の京都本草学派、特に稲生若水の研究にはこの「物産学志向」が見られたが、真の「物産学」の確立は、小野蘭山の時代を待たねばならなかった。

次章では、稲生若水や松岡恕庵らの『詩經』名物学研究を取り上げ、京都本草学派の学問観についてさらに考察する。

二、京都本草学派の『詩經』名物学研究

（一）稲生若水と『詩經小識』

京都本草学派の先駆者である稲生若水（1655～1715）は、加賀藩に仕えた本草学者・儒学者であり、日本の産物を網羅する大著『庶物類纂』を執筆した。この書は中国古典

を広く引用し、産物を分類・考証したが、千巻を予定しながらも生前には 362 巻しか完成しなかった。これは本草学と名物学の新たな方向性を示すものだった。

新井白石の依頼に応じ、若水は『詩經小識』を著した。これは『詩經』に登場する動植物について考証するものであり、若水は多数の中国古典を引用し、学問的厳密さをもって取り組んだ。しかし、未刊行のまま広く写本が流布し、後世の研究に影響を与えた。

（二）松岡恕庵と『詩經名物考』

松岡恕庵（1668～1746）は若水の門下であり、元は儒学を学んでいたが、『詩經』に登場する動植物の名を詳しく究明する必要を感じ、本草学へ転向した。彼の代表作『詩經名物考』は、植物の名称や薬効を記録するが、『詩經』の文脈には触れていない。これは弟子や後世の学者によって編集された可能性がある。

（三）江村如亭と『詩經名物辨解』

松岡恕庵の弟子である江村如亭（?～1732）は、師の研究をもとに日本初の『詩經』名物学研究書『詩經名物辨解』を刊行した。本書は、多くの動植物の形態や生態に関する記述を含み、学問的に高い完成度を誇る。如亭は序文で、儒学者が名物考証を軽視することで、『詩經』の知識が正しく伝わらなくなっていると指摘し、本書の目的は『詩經』学習のためであると明言している。

若水、恕庵、如亭の学問的姿勢は、中国古典の知識を重視し、それを整理・分類することにあった。しかし、この名物学的研究は、現実の物産利用を重視する方向へは進まず、学問の発展に限界をもたらした。こうした傾向は、小野蘭山の時代に変化が生じ、本草学が新たな発展を遂げることになる。次章では、蘭山の名物学研究と京都本草学派の学問観の転換について考察する。

三、蘭山の「物産」への眼差し

小野蘭山（1729～1810）の時代になると、京都本草学派の学問的性格に大きな変化が生じた。蘭山は、稻生若水—松岡恕庵—蘭山という学統を意識しながら、本草学を儒学的思想から切り離し、独立した専門知として確立しようとした。

蘭山が晩年に門人へ宛てた書簡の中に、次のような文が見られる。

名物之事ハ前々より儒家面々ニ被考置れ候も、専門之人ハ無之、物産吟味之事ハ稻先生より之事と相見へ申候。（中略）元来貝原、稻、松岡三先生ハ皆伊藤家ニ而同友之事なれば、互ニ相談も可有之事也。

本艸ノ学ハ稻先生より先師へ伝わり候由。即、物故之節も封し遺して先師へ被伝候書付も有之候よし、嘗而聞及べり。貝原先生ハ稻先生より先達而物故せられし故、貝原先生より先師へ伝わると云事ハ無之事ニ候。（「小野蘭山寛政七年書簡下書」により）

以上の文面によると、蘭山からすれば、従来の「名物学」は儒者による考証にとどまり、専門分野として発展しなかったが、一方で蘭山自身は「物産吟味」の重要性を強調し、より実証的な研究を推進した。この即物的な視点は、尾張本草学派へと受け継がれ、近世本草学の研究方法に大きな影響を与えた。

また、同じく「小野蘭山寛政七年書簡下書」には、「凡本艸之学ハ右之通、品物も追々相出、名目も追々相知れて、日新之業なれば、今より以後も、歳ヲ逐而改正もあるべき事なれば、他ノ学業とハ違ひ、古の伝来ノ通りを永く相守ル事ハ成難事也」という文面が見られる。蘭山は本草学を「日新之業」（日々進化する学問）と捉え、古典に頼

る学問のあり方を批判した。彼は、新たな動植物や薬品が発見される中で、過去の説を固守することは誤りであるとし、知識の更新と情報交換の重要性を説いた。これは、江戸本草学派が実践していた物産情報の共有とも共通する姿勢であり、結果的に、京都本草学派と江戸本草学派の対立的な特徴が薄れ、中国古典の権威からの脱却という共通の方向性が見られるようになった。

四、蘭山の『詩経産物解』

この章では、蘭山の代表的『詩経』名物学著作——『詩経産物解』を取り上げて検討する。蘭山のこの著作は、第二章で挙げた京都本草学派の『詩経』名物学の著作と比べて、いくつかの特徴が見られる。

（一）分類上の特徴

若水の『詩経小識』と江村如圭の『詩経名物弁解』は、「草部」「木部」「羽部」などに分類されており、これは『爾雅』に基づく伝統的な「共世界分類」の方式を踏襲している。一方、蘭山の『詩経産物解』は、『詩経』の原本の順序に従って種目を並べる構成を採用しており、従来の名物学の枠を超え、新たな分類法を模索していたことがうかがえる。これは、中国古典辞書の影響から脱却しようとする蘭山の学問的姿勢を示している。

（二）生態と方言名への関心

○卷耳

ミヽナ艸。子ズミノ耳。ミヽナ子コノミヽ、備前。ホトケノ耳、能登。ミヽナ艸ハ人日ノ七種一種、葉小ニシテ形鼠耳ニ似タリ。方書ニ如鼠耳ト云。其葉對生シテ、葉紫、黒色茎、葉小シ、毛茸アリ。人日ノ時分、茎葉地ニ付テ芋蔓ス。三月頃茎ニ多ク細枝ヲ別テ、白色ノ細花ヲ發ス。形ハコヘ花ニ能ク似タリ。花落テ、實ヲ結。夏月、苗根死テ、其實落テ、秋冬又生ス。

（『詩経産物解』より）

卷耳の俗名のところ、複数の俗名を並べただけでなく、『詩経小識』と同じように、地域名も付け加えている。ただ、『詩経小識』には一部の項目しか見られないのに対して、『詩経産物解』には、ほぼすべての項目に地方の呼び方が載せられている。蘭山にとって、方言への関心はすでに本草学研究の一部になっているに違いない。

本書にはすでに漢籍からの引用があまり見られない。前節に述べたように、蘭山の時代になると、知識人の漢籍に対する吸収はすでに非常に成熟した段階に達しており、逆にそのような中華的世界観から脱却する傾向が見られている。本書の「卷耳」の項目には、中国古典への引用が見られていないが、その代わりに、卷耳に対して、日本の風土に即して、より詳細にその形状と生態を記録することができた。このことは、伝統的詩経名物学から近代的自然誌への飛躍といえよう。

（三）品物の工芸面の重視

『詩経産物解』には、従来の詩経名物学の著作に見られない独特なところがまた多く存在している。一例を引くと、本書では、蘭山が物産学の延長線上にある、品物の工芸の面に着目している。

○漆

ウルシ。山中自生多シ。一葉大抵二十（枚斗）。上ニ止葉アリ。其葉ニ毛茸アリ。新葉出テ、梢ニ花ヲ発六七寸ノ穂ニナリテ、黄白色跡ニ實アリ。大サ二分斗。圓平ナリ。茶色ニシテ青色ヲ帶、外皮ヲ去レハ、中ニ堅キ子アリ。ソレヨリ蠟ヲ出ナリ。コノ木ノ皮ニ横ニ鋸ヲ加ウレハ、脂ヲ出ス。中華ニハ採ヨウ異ニシテ、竹箇ヲ木ノ中ニ入レタイテトルナリ。即ウルシナリ。漆ハ奥州出羽下野江戸越前ヨリ出ルヲ上品トス。セシメウルシト云テ、甚ツヨシ。ツギ漆ニ用日向ヲ其次トス。小細工ニ用吉野ハ弱ナリ。朱漆ニ至ス。中国西国ヲ甚下品トス。漆細工ハ日本カ上品ナリ。中華ノ漆器甚弱。東西洋考三統う志（日本ノ處ニ）ヲ引、曰、以漆制器甚（工？ユ？）経。龍山墨談曰、泥金画漆之法、古亦無有。宣徳遺漆工、令至倭國、傳其法以歸ト云々。コレヲ以見レハ、金蒔繪ナドハ日本ヨリ傳タルモノナリ。

（『詩経産物解』より）

『詩経産物解』の「漆」の項目は、本書全体から見ても、相当に長い紙幅が割かれている。その内容を確認していくと、「ウルシ。山中自生多シ……中ニ堅キ子アリ。ソレヨリ蠟ヲ出ナリ」のところまでは、漆の生態と形状に関する記述である。それから、「コノ木ノ皮ニ横ニ鋸ヲ加ウレハ……即ウルシナリ」のところまでは、漆の製法に関する記述である。さらに、「漆ハ奥州出羽下野江戸越前ヨリ出ルヲ上品トス……漆細工ハ日本カ上品ナリ」のところまでは、日本における漆の品質に対する評価である。最後の「金蒔繪ナドハ日本ヨリ傳タルモノナリ」のところまでは、中国が漆工を日本に派遣して日本の漆の技法を学ぼうとする逸話が取り上げられている。

「名称」・「形状」・「生態」・「製法」・「品質」・「逸話（歴史）」——従来の詩経名物学著作には、おそらく最初の二項しか取り上げられていないだろうが、蘭山の『詩経産物解』はその範疇をはるかに乗り越え、詩経名物学の記述の世界に新たな次元を切り拓いたといえよう。

おわりに

「原典至上主義」とされがちな京都本草学派は、その『詩経』名物学研究において、それぞれの特色を有しており、小野蘭山に至って、古典考証から脱却する傾向が見られたのである。

一般的に、広い意味での本草学は、三つの分野の学問を内包している。すなわち「薬学」・「名物学」・「物産学」という三分野である。本草学者であれば、多かれ少なかれ、この三つの分野を同時に兼務している。にもかかわらず、曾占春の言うように、「本草ハ方技ノ材」であり、「名物ハ詩書ノ用」であり、「物産ハ農事ノ本」である。三者の間にはかなりの距離と本質的な異なりを持っている。それでも、ある種の形而上的な「理想／理念」（＝学問観）によって、三者はそれぞれの本草学者のなかに統合されている。さらに、それぞれの本草学者の態度と研究方法に合わせて、その傾向性が変わっていく。名物学でいえば、一概に「名物学的本草研究」といっても、「名」に重点をおくか、「物」に重点をおくかによって、研究の傾向性が変わってくる。

また、まさに「世界像」の変革に伴って本草の分類が変わっていくのと同じように、二百年以上にわたる江戸時代の歴史の流れのなかで、本草学者の具体的な実践は、その学問観の変化とともに変わっていく。京都本草学派の『詩経』名物学研究の発展経緯は、まさにそのような変化を反映しているのである。

『通俗三国志』章題の典拠と方法

—幸田露伴の方法への復帰と再検討—

王 順鑫

『通俗三国志』は、『三国志演義』全編を日本で初めて翻訳したものである。その登場を契機に、中国演義小説を底本とする通俗物が陸続と刊行され始めた。

『通俗三国志』の翻訳底本について、最初に論じた露伴は『通俗三国志』と『李卓吾批評三国志』及び毛宗崗本『三国志演義』との章題を対照させて、その底本が『李卓吾批評三国志』と指摘している。露伴以後、小川環樹氏、徳田武氏、長尾直茂氏などは、本文の対照比較をして、『通俗三国志』と呉観明本及び緑陰堂本『李卓吾批評三国志』、『三国志』、朝鮮版周曰校本『三国志伝演義』との関係を明らかにしてきた。

露伴は章題を比較対象としたのに対して、露伴以後の研究者達は本文比較に集中してきた。現存した『三国志演義』諸版本の数多さに比べれば、露伴の比較範囲は限られたとしか言えない。とは言え、章題比較には本文比較で見えない世界が潜在する可能性も無視できない。

以上を踏まえて、本発表は露伴の方法を再提起し、『通俗三国志』と『三国志演義』諸版本との章題比較を試みる。その結果、以下のことが明らかになった。

第一、『通俗三国志』は章回形式を踏襲しないのは、分巻不分回の『三国志演義』版本の影響を受けたと考えられている。

第二、『通俗三国志』の翻訳底本は総目録と部分的な本文の章題が欠けるようである。よって、『通俗三国志』の総目録は翻訳し終わった本文の章題を纏めて新しく作ったものである。

第三、欠けた章題を訳出するために、『通俗三国志』は『三国志演義』諸版本の本文と批評文のみならず、『資治通鑑綱目』のような史書をも参照した。特に、章題に見える劉玄德のみを「帝」と呼ぶ傾向は『資治通鑑綱目』に共通している。

第四、『通俗三国志』章題の翻訳と整理には統一意識が見える。読者の理解をスムーズにさせようとした故か、『通俗三国志』の章題は底本の表現に拘らずに、人名、用語、形式を統一するように工夫した。

『通俗三国志』章題の典拠と方法

— 幸田露伴の方法への復帰と再検討 —

国文学研究資料館外来研究員、中国人民大学博士後期課程

王 順鑫（オウ ジュンキン）

○方法と目的

章題比較という幸田露伴の方法論に復帰して、その可能性を確認しながら、幸田露伴の方法論の弱み—具体的に言えば比較対象の数が少なく比較範囲が限られたこと—を克服する上で、『三国志演義』諸版本（二十二種類の版本）との比較を通して、章題という視点で『通俗三国志』の章題の位相を再検討することを試みる。

一、『通俗三国志』について

五〇巻二四〇段。目録一卷。五十一冊からなる。漢字片仮名表記。湖南文山訳とされる。一六九一（一六九二（元禄四）五）年刊。『三国志演義』全篇を日本で初めて翻訳したものである。訳出作業は文山ひとりではなく、弟である称好庵徽菴を含む複数の翻訳者によってなされたと推測される。

二、『通俗三国志』翻訳底本に関する先行研究と問題点

（一）翻訳底本に関する先行研究

（1）幸田露伴「新訂通俗三国志解題評説」（幸田露伴校訂『新訂通俗三国志』、日本文芸叢書第二巻、東亜堂、一九一一年）

今の『絵本三国志』は李本に依るなり。其の毎章の標語は、単行にして対偶せず、第一回「祭天地桃園結義」といふものは、李本の旧に依るなり。

（2）小川環樹「文山訳の原本」（小川環樹著『中国小説史の研究』第二部第二章第三節、岩波書店、一九六八年）

『通俗三国志』巻三八「孔明七擒孟獲」に見える「鬚」の誤字に注目し、『通俗三国志』の翻訳底本は「李卓吾のどれかであった」と結論している。

（3）徳田武「解説」（徳田武編『対訳中国歴史小説選集4 李卓吾先生批評三国志』、『ゆまに書房、一九八四年』）

『通俗三国志』の本文中に原文に訓点を施す形で引用された詩歌・書牘・上表文等を比較対照し、『通俗三国志』の翻訳底本を蓬左文庫所蔵本に定めた。

（4）長尾直茂『通俗三国志』をめぐる諸論考」（長尾直茂著『本邦における三国志演義受容の諸相』、勉誠出版、二〇一九年）

『通俗三国志』巻一六本文における表現に見える宮内庁書陵部所蔵『李卓吾先生批評三国志』（緑陰堂本）と朝鮮版周日校本『三国志演義』の影響。

(二) 問題点

(1)『通俗三国志』の翻訳底本を検討する時に、幸田露伴は章題の比較を推論の立脚点としたのに対して、露伴以後の研究は本文の比較に集中している。章題も小説の重要な構成部分の一つであるが、露伴以後は注目されなくなってきた。

(2) 露伴の研究では、比較対象となるのは『通俗三国志』の章題と『李卓吾先生批評三国志』の章題と『四大奇書第一種』(毛宗崗批評本『三国志演義』)である。現存する『三国志演義』版本の数からみれば、それは非常に限られた範囲で行われた比較研究としか言えない。

▽『李卓吾先生批評三国志』と『四大奇書第一種』のみならず、現存する多数の『三国志演義』版本と『通俗三国志』の章題を対照比較すれば、新知見が発見されるはずである。

三、『通俗三国志』と『三国志演義』諸本における章題

○『通俗三国志』:

①総目録題(総目録に書かれた題) ②巻目録題(毎巻の目録に書かれた題) ③本文題(本文に書かれた題) ④画題(挿絵に付され題) ⑤上欄題(本文上欄に書かれた題)

○『三国志演義』諸本:

①総目録題 ②巻目録題 ③本文題 ④画題(挿絵に付され題) ⑤上欄題(本文上欄に書かれた題)

四、『通俗三国志』と「分巻不分回」の『三国志演義』諸本

(一) 翻訳底本『李卓吾先生批評三国志』(呉観明本)の章題形式

第一回 祭天地桃園結義 劉玄德斬寇立功 第二回 安喜張飛鞭督郵 何進謀殺十常侍

第三回 董卓議立陳留王 呂布刺殺丁建陽

↓「分回」⇨「第〇回」という序数の記しを付ける。両段構成。

(二)『通俗三国志』の章題形式

巻之一 祭天地桃園結義 劉玄德破黃巾賊 安喜縣張飛鞭督郵 何進謀殺十常侍

董卓起兵入洛陽 呂布刺殺丁建陽

↓「第〇回」という序数の記しが見えない。一段構成。紅林健志氏「近世小説における章回形式」(二〇一九年近世文学会春季大会研究発表)によれば、それは軍記の形式に倣うのである。

(三) 分巻不分回系統の『三国志演義』諸本の章題形式

嘉靖本・周曰校本・夏振宇本など「演義」系統の早期版本に属するものと、葉逢春本・余象斗本・誠德堂本・熊弘貴本・楊春元本・鄭世容本・湯賓尹本・劉龍田本・劉榮吾本・朱鼎臣本・費守齋本・黃正甫本など「志伝」系統の諸本。

○【嘉靖本】第一巻

祭天地桃園結義 劉玄德斬寇立功 安喜張飛鞭督郵 何進謀殺十常侍

董卓議立陳留王 呂布刺殺丁建陽 ……

↓「第〇回」という序数の記しが見えない。一段構成。軍記に倣うのではなく、軍記形式に近い分巻不分回系統の『三国志演義』諸本の章題形式を取る可能性。

五、『通俗三国志』と『李卓吾先生批評三国志』(呉観明本)以外の『三国志演義』諸本

(一) 章題の比較

『通俗三国志』章題

李本章題

別本章題

劉玄德破黃巾賊

劉玄德斬寇立功

破黃巾（『三國志平話』）

劉玄德立功破黃巾（劉榮吾本）

斬黃巾英雄首立功（毛本）

陶謙再讓徐州（夏本上欄題）

雲長五關斬六將（楊春元、湯、劉榮吾、

熊沖宇、費本）

關雲長五關斬六將（鄭本）

漢壽侯五關斬六將（毛本）

決漳河水浸冀城（余本画題）

決漳河水浸灌冀州（楊春元本画題）

決漳河之水灌冀州（鄭本画題）

決漳河水浸冀城（劉龍田本画題）

曹操決漳水滄冀州（劉榮吾本画題）

曹軍決漳水滄冀州（黃本画題）

決漳河許攸獻計（毛本）

孔明登台祈風破曹（余本画題、楊春元本
画題）

孔明登壇祈東南風（劉榮吾本）

孔明定計擒張任（熊清波本）

孔明定計擒將（夏本上欄題）

趙咨入魏說曹丕（劉龍田本画題）

司馬炎復築受禪臺（鄭本）

孔明七星壇祈風

七星壇諸葛祭風

孔明定計擒張任

孔明定計捉張任

趙咨入魏說曹丕

吳臣趙咨說曹丕

司馬炎築受禪臺

司馬復奪受禪臺

(一) 本文の比較

○『通俗三國志』卷之一「祭天地桃園結義」

ソノ後、青州幽州徐州冀州荊州揚州兗州豫州ノ間ニハ、家々ニ大賢良師張角ト書テ敬ヒ貴コト鬼神ヲ礼スルガ如ナリケレバ、張角心ノ内ニ非分ノ望ヲ發シ、先大方ノ馬元義ト云モノニ、金銀ヲ持セ禁裏ニ入テ密ニ十常侍ガ心ヲ結シメ。

○翻訳底本『李卓吾先生批評三國志』（呉観明本）

青幽徐冀荊揚兗豫、其八州之人、家家侍奉大賢良師張角名字。角遣大方馬元義、暗賚金帛、結交十常侍。

○劉龍田本『三國志演義』

青徐幽冀荊楊雍豫千里之間、家家侍奉大賢良師、張角遂懷異心、遣馬元義暗賚金帛、結好中常侍。

○鄭本『三國志演義』

青徐幽冀荊楊兗豫千里之間、家家侍奉大賢良師、張角遂懷異心、遣馬元義暗賚金帛、結好中常侍。

○熊沖宇本『三國志演義』

青徐幽冀荊楊兗豫千里之間、家家侍奉大賢良師、張角遂懷異心、遣馬元義暗賚金帛、結好中常侍。

○湯本『三國志演義』

青徐冀荊楊徐兗八州之人、家家侍奉大賢良師張角名字、角遂懷異心、遣大方馬元義暗賚金帛、結交中常侍。

六、『通俗三国志』における劉備称呼の改変と由来

(一) 翻訳底本『李卓吾先生批評三国志』（呉観明本）章題における劉備の呼称

A 第七三回	劉備進位漢中王	B 第七七回	漢中王痛哭関公	C 第八〇回	漢中王成都称帝
D 第八一回	劉先主興兵伐呉	E 第八三回	劉先主猊亭大戦	F 第八四回	先主夜走白帝城
G 第八五回	白帝城先主託孤				
↓「劉備」から「漢中王」、さらに「先主」へ。魏主・蜀主・呉主の並列呼称。					

(二)『通俗三国志』章題における劉備の呼称

a 卷三一	玄徳進位漢中王	b 卷三三	漢中王大哭関羽	c 卷三四	漢中王即皇帝位
d 卷三五	蜀帝起兵伐呉	e 卷三五	蜀帝大戦猊亭	f 卷三六	蜀帝夜走白帝城
g 卷三六	白帝城蜀帝託孤				
↓「玄徳」から「漢中王」、さらに「蜀帝」へ。特に、魏と呉の国主が即位しても「帝」と呼ばれていない。					

(三)『三国志演義』諸本と関係資料における劉備の称帝と呼称変化

○嘉靖本・周本・夏本・熊飛本・夷本・朝鮮本

漢中王成都称帝 ↓ 劉先主興兵伐呉

○葉本、余本、熊清波本、鄭本、湯本、劉龍田本、朱、費本、黄本

漢中王成都即帝位 ↓ 劉先主興兵伐呉

○楊春元本・鄭本・湯本・劉栄呉本・熊冲宇本・費本・黄本

玄徳成都即帝位 ↓ 劉先主興兵伐呉

○ほか

漢中王立皇帝位（劉龍田本画題）

漢中王即帝位（朱本画題）

↓劉備のみを「帝」と呼ぶ傾向も、『通俗三国志』における「漢中王即皇帝位」に一致する表記も、『三国志演義』諸本に見当たらない。

(四)『資治通鑑綱目』における劉備の称帝と呼称変化

○『資治通鑑綱目』卷十四「昭烈皇帝章武元年」

夏、四月、漢中王即皇帝位。

その後、『資治通鑑綱目』卷十四「昭烈皇帝章武元年」条に「秋、七月、帝自将伐孫權」とあり、卷十四「章武二年」条に「帝進軍猊亭」、卷十四「章武三年」条に「夏、四月、帝崩於永安」とあるように、劉備を「帝」と称するようになった。劉備の死を「崩」という「天子の死」を意味する言葉で記した。↓劉備のみを「帝」と呼ぶ傾向も「漢中王即皇帝位」という表記も『通俗三国志』に一致する。

○熊清波本『三国志演義』序文「重刊杭州考訂三国志伝序」

『三国志』一書、創自陳寿。厥後、司馬文正公修『通鑑』、以曹魏嗣漢為正統、以蜀呉為僭国、是非頗謬。迨紫陽朱夫子出、作『通鑑綱目』、継春秋絕筆、始進蜀漢為正統、呉魏為僭国、於人心正而天道明。則昭烈紹漢之意始暴白於天下矣。

↓蜀漢を正統とする性格は『通鑑綱目』から始まったものである。その性格は、『通鑑綱目』を経て、日本江戸時代の『三国志演義』の翻訳書である『通俗三国志』にも影響を与えたと考えられる。

七、『通俗三国志』章題に見える統一意識

読者を分かりやすくさせる為に、翻訳工房で調整・修正されたと考えられる章題がある。

デビュー作『ひと夜』から始まる革新：

宇野信夫と一幕物の世界

エレンチノワ クリスティーナ
Erenchinova Kristina

本発表では、昭和期歌舞伎における宇野信夫（1904-1991）の一幕物に注目し、その意義を考察する。宇野は昭和を代表する劇作家であり、庶民の日常や感情を繊細に描く「世話物」の名手として知られる。六代目尾上菊五郎との協力により数多くの作品を発表し、戦後には浄瑠璃や近代文学の翻案を手掛けた一方、独自の一幕物形式によって新たな可能性を提示した点でも注目される。

一幕物は、短い上演時間の中で登場人物の心理や人間関係を凝縮して描く形式であり、宇野はこの手法を積極的に用いた。宇野の代表的な一幕物には、デビュー作である『ひと夜』

（1933）、『吹雪峠』（1935）、戦後の『俤』（1948）、『下町』（1956）などが挙げられる。本研究では、『ひと夜』、『吹雪峠』を分析し、宇野がなぜこの形式を採用したのかを明らかにする。特に、彼の作劇における「はかなさ」の表現と、「写実性」を重視した演出技法に着目する。

また、西洋演劇の影響と江戸庶民文化の再現という二つの側面が宇野の作劇にどのように交差しているのかを検討する。さらに、短時間で観客に強い印象を与えるための演出技法——緊張感の演出、登場人物の心理描写、自然な会話表現——について分析し、彼の作劇の革新性を明らかにする。

筆者の関心は、宇野信夫の世話物が昭和期の歌舞伎においていかに庶民の日常を描き出し、新たな価値観を提示したかを明らかにすることである。特に、既存の研究では、宇野の翻案作品における構成上の工夫が論じられてきたが、本発表では、一幕物を取り上げることで宇野の創作活動の別の側面を浮き彫りにし、昭和期歌舞伎における彼の位置づけを再評価することを目指す。宇野信夫の一幕物は、昭和歌舞伎における表現の可能性を広げ、新たな地平を切り開いたと言えるだろう。

デビュー作『ひと夜』から始まる革新：

宇野信夫と一幕物の世界

東京大学 エレンチノワ クリスティーナ
Erenchinova Kristina

はじめに

本発表では、昭和期の歌舞伎において宇野信夫（1904–1991）が創作した一幕物に焦点を当て、その特徴と意義を考察する。宇野信夫は、世話物を中心とした劇作を通じて昭和歌舞伎の新たな可能性を提示した劇作家であり、「昭和の黙阿弥」とも称された。彼の作品には、江戸の庶民の生活が生き生きと描かれ、人生のはかなさと温かさが交錯する独自の世界観が表れている。

しかし、昭和期において一幕物は歌舞伎の中では比較的珍しい形式であった。その中で宇野が一幕物を積極的に採用した背景には、彼の作劇に対する独自の思想がある。本発表では、宇野がこの形式を用いてどのように庶民の生活や心理を描き出したのか、また彼の作品に見られる演出技法の特徴を明らかにすることを目的とする。

具体的には、宇野のデビュー作『ひと夜』（1933）および『吹雪峠』（1935）を取り上げ、これらの作品の構成、演出技法、主題を分析する。さらに、宇野の作劇における西洋演劇の影響を検討し、彼の作品の独自性を浮き彫りにする。宇野の一幕物が昭和歌舞伎にどのような影響を与えたのかを考察することで、彼の劇作家としての位置づけを明確にしたい。

一 宇野信夫の劇作家としての出発——『ひと夜』とその構造的特徴

宇野信夫の戯曲『ひと夜』は、1933年に雑誌『劇と評論』9号に『短夜』というタイトルで掲載された。当初の原題は『ひと夜』であったが、雑誌掲載時に変更され、後に再び原題に戻されることとなる。1960年に出版された『宇野信夫戯曲選集』では、原題である『ひと夜』の名で収録されている。掲載後、築地座から上演の申し込みを受け、同年10月に上演され、これが宇野の劇作家としての正式なデビュー作となった。ただし、『ひと夜』は宇野が初めて執筆・発表した戯曲ではなく、あくまで舞台上で上演された最初の作品である。翌1934年には、同じく『劇と評論』に『吹雪峠』が掲載され、翌年1月に東京劇場で初演された。

『ひと夜』は、1933年に雑誌『劇と評論』9号に『短夜』という題で掲載された。当初の原題は『ひと夜』であったが、雑誌掲載時に一時的に変更され、後に再び元のタイトルに戻された。1960年に刊行された『宇野信夫戯曲選集』には『ひと夜』の名で収録されている。本作は掲載後、築地座から上演の申し込みを受け、同年10月に舞台上で初演された。これにより、宇野は劇作家としてのキャリアを本格的にスタートさせた。ただし、『ひと夜』が宇野にとって最初に執筆・発表した戯曲ではなく、舞台上で上演された初の作品である点を考慮する必要がある。翌1934年には、同じく『劇と評論』に『吹雪峠』が掲載され、翌年1月に東京劇場で初演された。

宇野が劇作家としての道を歩み始めたのは、『ひと夜』よりも前の時期にさかのぼる。彼の最初の戯曲は、1931年に文芸雑誌『三田文学』に掲載された『父親』と『家』である。当時、宇野は本名であ

る宇野信男の名義で作品を発表していたが、同年の第 9 号に掲載された一幕劇では、現在の筆名である宇野信夫を用いている。

これら初期の作品と『ひと夜』には共通する特徴がある。それは、宇野が日常生活の中にある人間関係や心理的な葛藤を細やかに描こうとする姿勢である。しかし、当時の批評家・岩崎良三は『父親』について、「リアリズムとはこのような見方を指すのではないⁱ⁾」と批判し、宇野が「自分の周囲にある因果からこの作品を生んだのではないかⁱⁱ⁾」とも指摘した。この批判は、『ひと夜』にも一定の関連性を持つ。

しかし、『ひと夜』では、宇野の作劇手法がより洗練され、現実の人物や環境を観察し、そこからドラマを構築する試みが明確になっている。例えば、主人公・義道は、宇野の近所に住んでいた日蓮宗の行者をモデルにしている。また、舞台となる家の設定も、彼が日常的に目にしていた隣家の造りを参考にしたものである。こうした身近な題材の採用は、宇野のリアリズム志向を示すものであり、後の作品にも一貫して見られる特徴である。

二『ひと夜』の構造と課題

『ひと夜』は、宇野信夫の正式なデビュー作であり、彼の作劇における特徴や課題が凝縮された作品である。本作は、短い上演時間の中で登場人物の感情や人間関係を凝縮する一幕物として構成されており、後の宇野作品にも通じる演劇技法が用いられている。本章では、『ひと夜』の構造的特徴を分析し、劇的展開や演出技法の観点からその意義と課題を検討する。

本作の舞台は、主人公・義道の家の前の道と室内のみで展開され、場面転換は一切行われぬ。こうした空間の制約により、物語は登場人物の会話を中心に進行し、写実的な演出が求められる。短い時間の中で緊張感を高め、登場人物の心理を際立たせる手法は、宇野の一幕物に共通する特徴の一つである。

戯曲を前半と後半に分けられる。前半では義道と亀吉の掛け合いが中心となる。義道は酒に酔っており、亀吉を帰そうとしない。このやり取りはユーモラスな要素を含みつつも、義道の人間性や立場を浮き彫りにする役割を果たしている。一方で、この場面に松太郎が一時的に登場するものの、彼の役割は曖昧であり、劇の進行に大きく寄与していない。

後半では、松太郎とその妻・おとよの対立が主題となる。ここでは、夫婦の関係性を軸にしたドラマが展開されるが、第一部とのつながりがやや弱く、物語全体の統一感が損なわれている。登場人物の背景や動機が十分に説明されていないため、観客にとって感情移入しにくい側面がある。

本作の課題として、特に対立構造の不明瞭さと心理描写の掘り下げの不足が挙げられる。『ひと夜』は、義道、亀吉、松太郎、健吉、おとよの 5 人の登場人物によって展開されるが、劇的な対立の構造が十分に整理されていない。特に、前半と後半の関連性が希薄であり、劇全体の流れがやや断片的になっている。観客が作品の主題や焦点を把握しにくい点は、宇野の初期作品としての課題の一つといえる。

宇野の一幕物は、日常的な会話を通じて登場人物の心理を描くことに特徴がある。しかし、『ひと夜』では、特に松太郎とおとよの関係性の描写が十分ではなく、彼らの感情の変化が説得力を持って伝わ

りにくい。これにより、クライマックスのドラマ性が弱まり、観客の関心を持続させる要素がやや不足している。

こうした課題は、宇野が後に発表する『吹雪峠』において克服され、より洗練された構成と緻密な心理描写が試みられることになる。『ひと夜』は、宇野の作劇における出発点として重要な作品でありながら、同時にその後の発展のための試行錯誤が見られる作品でもある。

三『宇野信夫の作劇思想——「はかなさ」と写実の追求』

歌舞伎評論家の宮岸（1992）は、宇野の作品における核心的な要素として「はかなさ」を指摘し、その背景には、宇野が大学卒業後に就職が決まらず、デビューまでの数年間にわたって習作を重ねた経験があると述べている。宮岸は「はかなさ」を「むなしい」「あっけない」「無常」という意味で捉え、初期の作品である『ひと夜』や『吹雪峠』にその特徴が色濃く表れているⁱⁱⁱと指摘する。『自選世話物集』の中で、世話物の戯曲において「はかなさ」を重要な要素の一つとして挙げており、この概念が彼の作劇にとって大きな意味を持つことを示している。

この「はかなさ」の感覚は、歌舞伎だけに由来するものではなく、西洋演劇の影響を受けたものでもあった。例えば、宇野はビルドバックの『商船テナシティ』を好評価しており、「人の世のはかなさと、人の心の暖かさを、しみじみと感じました」^{iv}と述べている。しかし、「はかなさ」だけでは限界だったのも事実である。宇野曰く、『吹雪峠』の初演は「評判にもならなかった^v」と語っており、単に無常観を描くだけでは、観客の強い関心を引きには不十分であった。では、宇野はこの「はかなさ」の他に、どのような要素を作品に取り入れようとしたのか。

一つの重要な要素は、登場人物の生活様式を写実的に描き出すことである。この点は、宇野が自作を執筆する際だけでなく、他の作家の作品を脚色する際の基準にもなっていた。例えば、『ひと夜』の前半で、酔っている義道と亀吉のやり取りは登場人物の日常が細やかに描かれ、観客にとって身近な存在として映るよう工夫されている。こうした生活の写実的な描写こそが、宇野の作劇における特徴の一つであり、彼の作品が持つ独自性を支えている。

宇野が登場人物の生活を写実的に描こうとした背景には、江戸時代の芸術文化への強い関心があったと考えられる。彼は講釈や落語を頻繁に鑑賞し、歌舞伎においても四代目鶴屋南北や河竹黙阿弥の作品を高く評価していた。こうした鑑賞体験を通じて、宇野自身も江戸庶民の生活をリアルに描くことを目指すようになった。この江戸文化への関心は若い頃に限らず、彼の作劇活動全体を通じて一貫したテーマであった。

しかし、『吹雪峠』のように、宇野自身が好んで書いたものの、成功しなかった作品も少なくない。戦前の作品の上演記録を調べると、限られた回数しか上演されなかった戯曲がいくつも存在する。その背景には、そもそも世話物が観客を惹きつけにくいという問題があった。時代物が派手な演出や壮大な物語を特徴とするのに対し、世話物は日常の些細な出来事を中心に据えるため、観客にとっての娯楽性が乏しく感じられる場合もあった。宇野自身、六代目尾上菊五郎（1885-1949）の「世話物のうまい役者が、ほんとうにうまい役者だ^{vi}」という言葉に賛同しており、世話物の難しさを十分に理解していた。世話物では、日常的な設定をいかに面白く見せるかが重要であり、その点で劇作家の技量

がより求められる。宇野は時代物の執筆も試みたものの、「ほんとうは市井の人物を書く方が好きです^{vii}」と語っており、最終的には世話物に戻る事となった。

また、宇野は一度観てしまうと先の展開が分かる筋重視の芝居は再演時に面白みに欠けると考えていた。そのため、彼の作品における魅力は、台詞や登場人物の描写に重点が置かれている。例えば、宇野の作品では、人情の問題を取り上げたり、皮肉を利かせた場面を効果的に活用したりすることが多い。また、彼の戯曲の台詞は、ドラマチックな表現を抑え、実際の会話に近い形で書かれている。哀れさや悲劇性を持つ場面であっても、登場人物の言葉遣いは飾り気のないものになっている。

戦後の宇野は、若い役者を指導する立場にもなったが、彼のポリシーとして登場人物の性格を詳細に説明することはなかった。彼は、「事細かに説明しなければわからないような性格の人物や、ときあかさなければ納得のゆきかねる主題だったら、芝居として屹度面白いことはないと思います^{viii}」と述べている。このように、宇野は劇作家としての役割を、単に明確なメッセージを伝えることなく、観客に余白を与えることにあったと考えていた。彼は脚本を通じて観客が楽しめる芝居を提供しつつ、解釈の幅を持たせることで、より多様な視点から作品を受け止められるようにしたと考えられる。

おわりに

本発表では、宇野信夫的一幕物に焦点を当て、その劇作の特徴と意義を考察した。特に、彼の正式なデビュー作である『ひと夜』を中心に、その構成、演出技法、主題の特徴を分析し、彼の作劇思想における「はかなさ」と「写実性」の重要性を明らかにした。

また、宇野の作劇における「はかなさ」は、単なる無常観ではなく、庶民の生活の中にある感情の微細な変化を描くことに重点が置かれている。この点で、彼の作品は従来の世話物とは異なる独自のリアリズムを示している。また、彼は西洋演劇の影響を受けつつも、歌舞伎の伝統的な表現を活かしながら、登場人物の日常的な言葉遣いや振る舞いを重視し、より自然で説得力のある劇世界を構築した。

宇野的一幕物は、昭和歌舞伎に新たな可能性を提示した点で大きな意義を持つ。彼の作品は、短時間の中で人間ドラマを展開するという新たな演劇形式を探究し、写実性を重視した世話物の新しい方向性を示した。その試みは、後の昭和歌舞伎の中で独自の影響を与え、現代においても再評価されるべき価値を持っている。

注

ⁱ 岩崎良三「六月の戯曲―演劇時評」『三田文学』6(7), 1931年7月. p.29.

ⁱⁱ 同上

ⁱⁱⁱ 宮岸泰治「宇野信夫のドラマのこと」『悲劇喜劇』45(3), 1992年3月. p. 64.

^{iv} 宇野信夫『自選世話物集』, 青蛙房, 1972年. p. 10.

^v 宇野信夫『役者と噺家』, 九藝出版, 1978年. p. 48.

^{vi} 宇野信夫『自選世話物集』, 青蛙房, 1972年. p. 23.

^{vii} 同上, p. 21.

^{viii} 宇野信夫『宇野信夫戯曲選集』第5巻 時代劇, 青蛙房, 1960年. p. 335.

帝国の統治恐慌と熱帯病について

―森三千代の「南溟」を中心に―

謝 亜平

森三千代（1901-1977）は夫の金子光晴と共に南洋・西洋・中国を遍歴しており、戦時中に文化プロパガンダ機関である国際文化振興会の嘱託として働いていた彼女は文化使節として外務省により仏印に派遣された。しかし、従来の研究では金子光晴を中心に扱ったものは多い一方で、森三千代は常に従属的地位に置かれている。加えて、戦争責任については、森三千代に関する評価は曖昧なままである。故に、発表者は森三千代に焦点を絞り、彼女が戦争に対する認識への再評価を試みようとする。

「南溟」という作品は 1940 年 11 月に河出書房によって出版された同名の小説集に収められた中編小説である。小説は、高木笙子という日本人女性が伯母の意志に従い結婚したが、アルコール中毒の夫を我慢できず四年後に離婚を決め、その後ジャワで客死した父親の墓を訪ねるために南洋に渡ったことを物語っている。先行研究においては、南方に移動した高木笙子に力点を置き森三千代の南方体験がその背後にあるとする考察が行われた。しかし、作中人物はマラリアやデング熱と深く関わっており、産後マラリアで心臓が悪くなり一時的に日本に引き上げたが最終的に死んでしまった笙子の母親や、雑誌の主幹を務めており熱帯病がこじれ肺が悪くなった櫻内一郎などが挙げられる。熱帯病により、日本人男性も女性も帝国日本の南洋進出に寄与できなくなるが、この視点は従来研究の俎上にあまり載せられていない。

そのために、本発表では「南溟」を取り上げ、熱帯病が帝国日本の南洋進出に具体的にどのような影響を与えたのか、また帝国日本の南洋医療に対する認識がどのようなものであったかを時代資料を跡付けながら明らかにする。更に、熱帯病が帝国日本の進出や統治に与えた影響を森三千代自身がどのように捉えたのかを深く掘り下げ、ひいては森三千代による帝国日本の文化工作への協力を明らかにする。

帝国の統治恐慌と熱帯病について

—森三千代の「南溟」を中心に—

筑波大学 謝 亜平

*本稿で使うテキストは「森三千代（1940）『南溟』、河出書房」による。特に説明がない限り、頁数だけを示す。なお、引用内容に差別的表現が含まれるが、時代背景を鑑見て修正を行わない。

1、森三千代とその南洋体験

森三千代（1901-1977）は南洋に二回渡った。1929年に、上海で展覧会を開催することにより旅費を工面した後に、夫の金子光晴とともにアジア・ヨーロッパの旅行に出発した。6月半ば頃、二人はシンガポールに到着し、シンガポールとジャワの各地にある名所旧跡・植物園・動物園を観光したばかりでなく、日本人クラブや会館で風俗画の展覧会を開催した。しかし、一人分の旅費をしか工面できなかったため、森三千代は先にパリに向かい出発した。ヨーロッパで二年余りの生活を送った後、森三千代は1932年4月頃南洋を経由し日本に戻った。初めての南洋体験について、詩人・エッセイストである牧羊子は1992年の時点で「光晴と三千代の欧州行よりも、南方行がより精彩を放って」おり、「詩人の大いなる虚無は存分に手足をのばして、蒼天にちりばめられた星群のように南方洋に蟠集する島嶼、半島を巡歴する。」¹と高く評価している。

また、森三千代が二度目に南洋に渡ったのは1942年1月であり、戦時中に文化プロパガンダ機関である国際文化振興会の嘱託として働いていた彼女は文化使節として外務省により仏印に派遣された。三ヶ月ほどの期間では、森三千代は大使館の領事や大使とともに安南各地を周遊し、安南の権力者にも一般民衆にも積極的に接した。ここから、森三千代の文化使節の役割を十分に果たしたいという意欲、現地人にできるだけ近づけようとした姿勢が見られる。2016年時点での小林氏による記述を借りれば、「森の仏印訪問の隠された目的が同地で語り継がれていた民話を集め、そこに込められた民衆の奥深い真実を日本の読者のために記録することにあった」²ためである。このような南洋体験を踏まえ、森三千代は南洋について小説、旅行記、民話集などの多岐にわたる文体で数多くの作品を出した。

「南溟」は森三千代の南洋体験を基として書かれた中編小説であり、1940年11月に河出書房によって出版された同名の小説集に収められた。先行研究では、南方に移動した主人公の高木笙子に力点を置き森三千代の南方体験がその背後にあるとする考察が行われた。³しかし、帝国日本の南洋進出を阻害した

¹ 牧羊子『金子光晴と森三千代 おしどりの歌に萌える』、マガジンハウス、1992年、158頁。

² 小林富久子「森三千代の「東南アジア」小説—「国違い」「帰去来」の先駆性」、新・フェミニズム批評の会編『昭和前期女性文学論』、2016年、230頁。

³ 楠井清文「森三千代の南方体験と移動する女性表象」フェンスレス：文学・映画・演劇・文化運動研

熱帯病は従来研究の俎上にあまり載せられていない。そのために、本稿では「南溟」を取り上げ、熱帯病が帝国日本の南洋進出に具体的にどのような影響を与えたのか、また帝国日本の南洋医療に対する認識がどのようなものであったかを時代資料を跡付けながら明らかにする。更に、熱帯病が帝国日本の進出や統治に与えた影響を森三千代自身がどのように捉えたのかを深く掘り下げ、ひいては森三千代による帝国日本の文化工作への協力を明らかにする。

2、帝国日本のマラリアへの対応策

マラリアは熱帯病の一種であり、ハマダラカという蚊の吸血によりマラリア原虫が人間の体内に侵入することで感染する。蒸し暑い熱帯の自然環境が蚊の繁殖に適した環境を提供しているため、近代に南洋進出した日本人によっては、マラリアは「熱帯の鬼」⁴と考えられていた。「南溟」では、笙子の「脛の内側に蚊の喰った痕が赤く脹れたり、搔き跡の血がにじんだりしてゐる」(40 頁)、「石室の隅の、冷っこい水面に近く、蚊が湧いてわやわやしてゐた」(40 頁)と書かれている。ここから、熱帯地域の日常生活でマラリアにかかるリスクが高いことがわかった。

当時、マラリアに対応するためには色々な予防法は提唱され、キニーネの内服予防はその一つである。キニーネを生産するためには、キナという樹木の皮が必要とされる。しかし、キナの栽培はジャワに集中しており、蘭印政府の統制・輸出制限により、日本はキナの入手が容易ではなかった。日本の製薬企業はキナ樹を台湾で栽培するのを試みようとしたが、「この量はジャワでの年間生産量の 4%程度なので台湾でのキナ皮生産の貢献が限定的と言える」⁵。「南溟」では、笙子の父親である高木進は最初にジャワで病院を経営していたが、後にキナの栽培に転換するようになったが、「たゞ生産高がごく僅かで、その点ではお話になりません。お墓守りをしてゐる土人達のほまち程度のもの」(122 頁)である。それ故に、原料供給の制約により日本におけるキニーネの生産量が多いとは言えず、その希少性が薬の重要性を浮き彫りにした。

戦争の拡大とともに、日本軍部はアテブリンとプラスモヒンという合成マラリア剤の開発にも着手した。大体 1940 年頃には、合成マラリア剤の工業的製造は可能となった⁶。つまり、小説集『南溟』が発表された 1940 年頃には、日本ではようやく合成マラリア剤の製造が進み、キニーネに代わる薬が工業的に生産できる段階となった。この時代背景を踏まえると、「南溟」ではマラリアによる日本人の死が当時の戦地や植民地では依然として深刻な問題であり、合成マラリア剤の普及もまだ十分ではなかったことが読み取れる。

究誌 (6)、2022 年、7-23 頁。

⁴ 宮島幹之助 (1919)『熱帯生活』南洋協会・日本之医界社、28 頁。

⁵ 坂田隆 (2022)「第二次大戦末までの日本でのマラリア剤生産、日本軍のマラリア標準治療法、マラリア剤配布」石巻専修大学研究紀要第 33 号、93 頁。

⁶ 同上、96 頁。

3、マラリアで南洋進出に寄与できない日本人

小説「南溟」においては、マラリアにより身体が壊れた人物は何人も描かれている。笙子の母親はその一人であり、「産後にマラリヤに罹った笙子の母は、心臓をわるくして、それからは南洋を懼れ、再度ジャバにわたることを極度に拒んでゐる」(13 頁)。マラリアにより心臓が悪くなっていたため、母は笙子を連れて日本に引き揚げたが、最終的に死んでしまった。笙子の母親は日本女性として、夫とともに南洋へ渡り夫婦の愛情を維持することで日本の南洋開発を支えるという翼賛が期待されていた。が、彼女は途中でマラリアにより帰国し、夫と別々に暮らすことになった。これにより、夫婦の感情に悪影響を及ぼすだけでなく、日本の南洋進出にも寄与できなくなる可能性もある。

笙子の母親以外に、月刊雑誌『南方』の主幹を務めていた櫻内一郎の死亡もマラリアと深く関わっている。櫻内一郎は南洋に渡った後に、最初に領事館の書記生として働いていたが、二年後に病気になった。櫻内一郎に加わり、笙子と同じ船でジャワに渡った里見もマラリアにやられた。Y 鉱業の技師として働いていた里見は、常に日本とジャワの間で往来していたが、マラリアで身体が弱くなっており、日本に引き揚げざるを得なかった。戦時中、日本では女性と男性にそれぞれ異なる役割が期待されていた。女性には花嫁として南洋に赴き、夫婦の感情を維持し夫の南洋進出を支えることが求められていた一方で、男性は南洋を開発するために、優良健全な身体を持つことが必要である。よって、櫻内にせよ里见到せよ、マラリアで健康が損なわれた以上には、南洋移民としての役割が果たせなくなり、国家の南洋進出における理想的な移民像・国民像から逸脱してしまう。

上記したように、笙子の母親、櫻内一郎、里見という三人を通じて、女性も男性もマラリアにより南洋進出に寄与できなくなることを示唆しているのみならず、マラリアが家庭、文化、経済という面で南洋進出に与えた影響を浮かび上がらせる。故に、「熱帯の鬼」と言われるマラリアとの闘いは、南洋進出の成否を左右する重要な要素の一つである。

4、南洋進出への不安

マラリアなどの熱帯病は帝国日本の南洋進出を阻害していたため、マラリアに対応できる予防法や南洋現地における日本医療の発展が求められるわけである。キニーネは一定の効果を持つものの、マラリアを根治するというわけではない。そのために、南洋地域で日本医療を展開することは一層重要となる。

当時のジャワでは、蘭印政府の政策による制約があったため、日本人は病院を開業し医療事業を展開するのは極めて困難である。その結果、現地で生活する日本人は、オランダ人の病院や華人の医師に頼らなければならない状況に置かれた。しかし、「南溟」では「支那人の醫者には、消毒もろくにしないで平

氣で手術を」(55 頁) したことで、山口徳松は子供を失ってしまった。以上から、日本人が現地で医療事業を展開できない一方で、安全且つ信頼できる医療を受けられる場が限られていたことが伺える。

日本医療が南洋における窮地は蘭印政府の制限と深く関わったものの、日本政府が南洋に対する認識が足りないこともその一因である。伴野庸三は他の日本商人と合資で大きな雑貨店を開こうとしたが、「日本の眼は北に氣をとられて南はお留守だ」(76 頁) と嘆いた。その上に、櫻内一郎は雑誌『南方』を創刊した原因について、「『南方』は日本人を覚醒させるために、日本人と闘ったのです」(64 頁) と述べた。櫻内によれば、日本人は南洋人との親交を深め、南洋人を西洋人から解放させるべきであるが、日本人はそのような責任を意識していない。そのために、『南方』を創刊することで日本人の「覚醒」を促し、将来日本の南洋進出に貢献したい。伴野の嘆きも櫻内の話しも、日本政府が南洋進出を重視していなかったことを裏付けている。日本政府が南洋進出を重視しなかったため、南洋における日本医療の発展にも影響を与えた。医療体制が整わない南洋では、日本人は十分な医療を受けることができず、マラリアにかかると「死ぬつもり」(91 頁) さえを持っている。

5、おわりに

上記したように、小説「南溟」におけるマラリアに焦点を絞り、日本の南進政策と結び付けながら考察を行った。熱帯環境によりマラリアにかかりやすいのに加わり、蘭印政府の制限で、日本はマラリアを予防できるキニーネの生産原料を輸入できず、ジャワで日本医療を展開することもできなかった。しかし、マラリアに罹ると、日本人の健康を損なうだけでなく、南洋における経済開発や文化工作の展開も阻害してしまう。こうした現状は日本政府が南洋進出に対する認識が足らず、国家が政策的課題を抱えていたことを映し出している。国家が南洋進出を重視しないと、日本人が南洋で十分な医療支援を受けられなくなり、ひいては南洋進出にも影響を及ぼすという悪循環となっている。そのために、日本の南洋進出に対する懸念も一層高まるようになった。

森三千代は東洋・西洋を旅したため、外部から帝国日本を見られる視点を得た。戦時中、森三千代は実際の行動で戦争に加担したがないものの、南洋体験を通じて南洋における日本人の窮地を実感できた。それ故に、「南溟」に登場する人物が南洋進出に対する不安や懸念を抱える姿は、森三千代自身の実感を反映できる。こうして、作中人物の櫻内一郎が雑誌『南方』を通じて日本人を「覚醒」させようとしたことは森三千代が小説「南溟」で日本人に南洋の重要性を意識させようとしたことと紙一重で接合する可能性がある。

松岡譲『敦煌物語』における「大谷ミッション」の表象

——未公開草稿を手掛かりに

劉 東波

二〇世紀初頭、敦煌莫高窟の「蔵経洞」が発見され、イギリス、フランス、ロシア、日本など多くの国から探検隊が敦煌を訪れ、その歴史的意義が注目された。このような背景を踏まえ、松岡譲は昭和一三年に日本の大谷探検隊をモデルにして『敦煌物語』を創作した。戦時中の刊行にもかかわらず、発売と同時に売り切れるほどの人気を博した作品である。

発表者は大学院時代から日本近代文学における「西域物」をテーマに研究を続けている。2018 年からは日本学術振興会の科研費支援を受け、宮澤賢治、松岡譲、井上靖などの自筆資料や未公開資料を入手してきた。今回の発表で扱う資料は、松岡譲の出身地・新潟県長岡市の郷土資料館に所蔵されているものである。発表者の著書『井上靖とシルクロード』（2020 年、七月社）には関連資料のリストが付録として収録されているが、それを本格的に研究に活用するのは今回が初めてである。

『敦煌物語』は、昭和一三年の初版（『改造』掲載）から、昭和一八年（単行本）、昭和二二年（未公開原稿）、昭和三六年（『世界教養全集』収録）と三度の改稿を経ている。三回目の改稿では細部の変更が見られるが、大きな改変はない。一方、発表者が発見した昭和二二年版（二回目の改稿）では、全体構成まで改変されていることが確認された。

本作では、古代から近代に至る西域および中央アジア探検に関する数多くの物語が描かれている。特に、日本の大谷探検隊について「探検隊」ではなく「ミッション」と称している点が特異である。松岡は他国の探検隊を「強盗」と批判しつつも、「大谷ミッション」に対しては曖昧な態度をとっている。これは松岡が仏教と深く関わりがあったことに起因すると考えられる。また、僧侶で探検家の橘瑞超を「立花」という名で登場させた点も注目に値する。

昭和一八年の改稿を詳細に分析し、「大谷探検隊」を「大谷ミッション」とした理由や、登場人物「立花」と橘瑞超の関連性について考察し、「大谷ミッション」の描写意図を探ることが本発表の課題である。

松岡譲『敦煌物語』における「大谷ミッション」の表象 ——未公開草稿を手掛かりに

南京大学 劉 東波

一、はじめに

松岡譲（明治24～昭和44年）は、新潟県長岡市古志郡石坂村（現・長岡市村松町）出身の作家である。彼は夏目漱石の娘婿であり、また芥川龍之介の親友としても広く知られるが、その作品自体はあまり読まれておらず、作家としての言及は少ない。松岡は『敦煌物語』（日下部書店、昭和18・1）をはじめとする西域を題材とした作品を創作し、特に井上靖にも直接的な影響を与えた。近代日本文学における西域作品を論じる上で、宮澤賢治とともに、松岡は重要な存在である。

松岡の伝記研究を長年行っていた関口安義は、松岡を「不遇なる作家」と評している^①。また、娘の半藤末利子（随筆家、漱石山房記念館名誉館長）は、「父は世間から抹殺された」と述べている^②。

明治33年（1900年）に莫高窟より「敦煌文書」が発見されて以来、敦煌学の発展が進み、その成果として、海外の探検家や研究者によるスタインの『彷徨へる湖』（筑摩書房、昭和18・4）などの著作のほか、日本国内でも上原芳太郎編『新西域記』（有光社、昭和12・4）などの研究が発表されている。これらの研究成果は、専門領域にとどまらず、多方面に影響を与え、特に近代日本文学において顕著な影響を及ぼした。具体的な例としては、松岡譲の長篇小説『敦煌物語』（『改造』昭和13・10）や、井上靖の長篇小説『敦煌』（『群像』昭和34・1～5）が挙げられる。

松岡の小説は、敦煌莫高窟の藏経洞から古文書類が発見された直後の時代背景をもとに描かれた。一方、井上靖の作品は、これらの古文書類が小洞窟に隠される直前を舞台としている。いずれの作品も、敦煌学の進展から影響を受け、最新の研究成果を反映させたものである。

本論では、まず西域探検の歴史的背景から『敦煌物語』の成立過程を考察し、次に、日本の大谷ミッションと他の二つの探検隊（イギリス、フランス）の描写を比較しながら、本作の主題を検討する。

二、古今の西域探検

『敦煌物語』は、老画家である「主人」が訪問者である「私」に物語を語る形式で進行する。「主人」は自身の小博物館に収蔵された品々を披露しながら、それぞれの由来や価値を「私」に説明する。その過程で、彼は書庫から敦煌写経を取り出し、「私」に手渡す。巻尾には天和五年（566年）という六朝時代の年号が記されており、「主人」は中央アジア探検と関連づけながら、その背後にある物語を語り始める。

作中の老画家のモデルについて、松岡譲は『敦煌物語』の「あとがき」（昭和18年版）で次のように述べている。

（前略）尚ほ中村不折書伯が自ら秘庫をひらいて、珍藏の敦煌経数十巻の披見を

① 関口安義『評伝 松岡譲』（小沢書店、平成3・1）

② 2018年7月20日、筆者は世田谷区にある半藤末利子氏のお宅で、松岡譲の作家生涯をテーマにインタビューを行った。

許され、それによつて古代のイメヂをまざゝと懷かせて下すつたのは、終始一貫この作品を生む為に何よりも有難い助けになつたことも書き加へておくべきであらう。

中村不折は洋画家であり、書家としても著名で、作家との交流も多かった。また、彼は多くの貴重な書画や金石を収集するコレクターでもあり、敦煌写経の一部を所蔵していた^①。東京都江東区にある書道博物館は、昭和 11 年（1936 年）に中村が創設したものであり、現在も多くの敦煌写経が展示されている。この記述から、作中の老画家のモデルは中村不折であることが特定できる。

老画家は、敦煌文書の収奪を「文化侵略」と評している。この「文化侵略」という語は、近代の中央アジア探検を指していると解される。本作では、イギリス、フランス、日本の三つの探検隊が敦煌において古文書を入手する経緯が描かれるが、松岡は老画家を通じて、イギリス探検隊とフランス探検隊を「強盗」「列強」「大泥棒」として厳しく批判する。一方で、日本の大谷ミッションに対しては、「立花大人（大谷ミッションのリーダー）にお気の毒」と述べ、明らかに同情的な視点を示している。

また、作品の「あとがき」からは、松岡が『大唐西域記』に強い影響を受けたことがうかがえる。『大唐西域記』は玄奘三蔵による西域探検記であり、『敦煌物語』の重要な典拠資料の一つとされる。作中では、スタイン、ペリオ、立花の三探検隊のリーダーが、それぞれ古文書を入手するために「玄奘三蔵」の名を借りて王道士を説得する場面が描かれている。松岡は、この場面において、単なる物質的な対価（馬蹄銀）だけでなく、精神的側面からの説得という独自の解釈を加えている。

三、大谷探検隊から大谷ミッションへ

『敦煌物語』において、三つの探検隊が敦煌で古文書を入手する過程が描かれている。イギリスおよびフランスの探検隊に対しては、「列強」「泥棒」「野蛮な侵略行為」などの語が用いられ、厳しい批判が展開されている。しかし、日本の探検隊は「大谷ミッション」と称され、異なる視点から描写されている。特に、松岡は大谷探検隊の橋瑞超をモデルとし、「立花」という架空の人物を創作している。

「ミッション」という語は、「伝道、宣教、使節団」を意味し^②、この用語を選択することで、松岡は日本の探検隊を他国の探検隊と明確に区別している。

立花の人物造形について、松岡は『敦煌物語』の「あとがき」（昭和 18 年版）で以下のように述べている。

私はさうした新興日本の象徴としての若い一人のチャンピオンを点出させたかつたので、こゝで橋氏をかり来つたのであるから、故意に本名を避けた事を断はつておかなければなるまい。

また、同じ「あとがき」では「青年美僧」とも表現されており、松岡が橋瑞超に抱いていた理想が伺える。本作における立花は、他の探検者と本質的に異なる存在として描かれており、その人物像は以下の二つの台詞によってより明確になる。

吉川さん、これもみんな猊下のお陰です。僕たちはああいう不世出の世界的偉人を宗主にもつて、その特別な恩寵をうけているのですからね。身に余る冥加という

① 中村不折及び中村の収蔵品について、『書道博物館図録』（台東区芸術文化財団、平成 12・4）と『中村不折のすべて：書家・画家』（台東区芸術文化財団、平成 25・3）を参照した。

② 『日本国語大辞典』（小学館、2000 年 11 月）

か、身命を賭してあくまで使命を果たしますよ。（『敦煌物語』十二 より）

お住持。僕は御名にかけて絶対にだまし討ちはしません。だから貴僧も仏弟子の一人として、僕の聖業に一臂の力をかしてくださってもよろしいはず。（『敦煌物語』十三 より）

関口安義は、立花の描写について「橘瑞超をモデルとした日本探検隊の立花という青年の描き方に、仏教徒としての松岡譲の理想が託されている」と指摘している。また、上原和は「著者は、自分自身の敦煌への憧れ、シルクロードへの求法巡礼の見果てぬ夢を、この一篇に託しはしなかったであろうか」と述べている^①。こうした先行研究からも、松岡が立花に自身の理想を投影していることが明らかである。

本作において、スタインとペリオは蔵経洞の古文書を一括で購入しようと試みたが、王道士は馬蹄銀による交渉に応じず、最終的に彼らは玄奘三蔵の名を借りて古文書の一部を入手するに留まった。松岡はこの場面を描くことで、寺院（莫高窟）を必死に守ろうとする王道士の姿を際立たせている。

一方、大谷ミッションの立花はどのように経巻を手に入れたのか。彼は「白人のミ蔵」たちと同様に玄奘三蔵の名を用いて王道士を説得しようとするが、「しかし、いずれもこの方面の単なる学者というだけで、僕みたいな仏教者すなわち仏弟子ではないのです」と主張し、自らを他の探検者と区別している。また、立花の同行者である通訳の李が王道士に対し暴力的な手段を用いた際には、それを諫める姿勢を示している。立花は一貫して完璧な仏教者として描かれている。

しかし、典拠資料によれば、実際には橘と吉川が脅迫行為を行っていたとされる。松岡は、立花を理想化するため、作中においてそのような行為をすべて通訳の李に帰属させたと考えられる。したがって、大谷ミッションや立花の描写は、松岡譲による仏教的理想の投影であり、史実とは異なるフィクションの側面を持つ。

四、まとめ

松岡譲は、実家の本覚寺を継がなかったが、その生い立ちにより敬虔な仏教徒であった。寡作な作家とされる彼の創作の多くは仏教に関連するものであり、その関心の根底には幼少期の宗教的環境、西域探検の歴史、敦煌学の発展があると考えられる。『敦煌物語』の成立にはこれらの要素が不可欠であり、それらが本作に色濃く反映されている。

本作には、三つの探検隊による敦煌文書の入手過程が描かれているが、日本の探検隊である大谷ミッションは他の探検隊と異なる位置づけがなされている。未公開資料^②「西域探検」の「序文」によると、松岡は「敗戦後」の昭和22年に「青少年に広い文化史を学んでほしい」と述べており、また、草稿作品からは侵略戦争への反省の意図も読み取れる。仏教徒である松岡は、自身の西域と仏教への理想を、架空の人物である立花に投影し、求法巡礼の道をたどる青年使徒を描き出した。本作の主題は、西欧列強の探検隊による「文化の名を借りた野蛮な侵略行為」への批判と、仏教徒の理想的な西域探検の在り方を描くことにあると考えられる。

① 上原和「『敦煌物語』の今日的意味」（『敦煌物語』講談社、昭和56・7）

② 長岡市郷土史料館所蔵。2018年3月から7月まで、筆者は草稿に関する調査を行った。

日本語と中国語の間

－ 楊逸、李琴峰、横山悠太による「日本語文学」のバイリンガル性－

ザ・ベレジナ・オリガ
Zaberezhnaia Olga

この2年間『21世紀の日本』という著書（来年発行の予定）の序章と第6章「日本らしさの発見－現代文学における時代の主役たち」に取り組み、文学作品における自己認識、言語的アイデンティティ、多言語社会の日本といった問題に興味を持ち、その引き続きとして現代文学における言語とアイデンティティを探り始めたのが今回のテーマに至ったいきさつである。

現在「バイリンガル」・「マルティリンガル」以外に「複言語的」・「ヘテロリンガル」など、単一言語に対する概念が強力的になり、日本語以外の様々な言語背景を持った作家が日本語で執筆している。作家が日本語が母語でなくてもよいという多文化の影響が投影されている「日本語文学」が注意を引く。

本発表では特に日本語と中国語のバイリンガル作品に注目する。漢字が中国から伝来した日本語には既存の日中バイリンガル性が認められている。それを踏まえて現代中国語の要素が何らかの形で取り入れた日本語文学の三作を分析する。

横山悠太『吾輩ハ猫ニナル』では中国語の単語が多数使われ、それにひらがな・カタカナ・中国語発音のルビがつきことば遊びとパロディーを目指した、異言語との衝突が視覚的に強調されたバイリンガルな環境が作られる。

楊逸『ワンちゃん』では中国語風な発言、地方の日本語・中国語由来の独自の表現によってバイリンガルな環境が成されている。

李琴峰『彼岸花が咲く島』では中国語と日本語が混ざった言語と、漢語が完全に排除された「ひのものとことば」という人工言語によって言語とイデオロギー・社会・ジェンダーとの関係が問われ中国語と日本語の相互関係および日本語の複言語的性格が明らかにされている。

このような文学は日本と中国の交差点にあり独立とした「日本文化」・「中国文化」の概念を疑い言葉が共存するという複言語的な環境を成り立たせる言える。

日本語と中国語の間

－ 楊逸、李琴峰、横山悠太による「日本語文学」のバイリンガル性－

天理大学 ザベレジナヤオリガ
Zaberezhnaia Olga

一、日本語文学について

作者が日本語が母語ではなくてもいいという「日本語文学」は長い歴史を持つが、その概念自体はポストコロニアルのものであり、実際に文壇に認められたのは李恢成が1972年に芥川賞を受賞した時であると言える。郭南燕(2013)の定義によると日本語文学とは書き手が日本人、日本語が母語でなくてもよいこと、日本語で書くことにはあらゆる選択肢があったこと、外からの視点で日本語と日本文化を観察し解釈していること、独自の日本語運用法があること、多言語・多文化の影響が投影されていることなどの条件が指摘されている。

現在はアメリカ出身のリービ英雄、アーサー・ビナード、台湾出身の李琴峰と温又柔、ドイツ在住の多和田葉子、アメリカ在住の水村美苗をはじめ、複言語的な背景を持つ多数の作家が日本語を創作言語として選び活躍している。その作品に研究者の関心が向いたのは最近のことであるが現在日本語文学は様々なアプローチから取り扱われている。

本稿では特に中国関連の作家に焦点を当て、日本語と中国語の影響を受けた表現を使った作品を分析し、そのバイリンガル性による特徴を明らかにしたい。周知のとおり、日本語は中国語と密接な関係にあり、漢文が文章語として古くから使われ、漢字や漢字文化も中国から導入されてきた。日本語は中国語の要素を吸収し現代日本語は漢字や漢語なしでは考えられないものである。このような日本語の元来(漢字登場以来)の「ハイブリッド性」は多くの研究者に指摘されてきたがハイブリッド性に加えて日本語は「中国との出会依頼、戦略的融合・妥協・同化のプロセスによる絶えない、飽きることのない翻訳作業」として定義されている(YIU 2020)。このように日本語と中国語の間の翻訳作業は日本語の不可欠なプロセスであると言える。

しかし、口語はどうであろうか。漢文が使われていたが近代文学でも話し言葉としての中国語の影響が一切なかった。学習を受けなかった日本人は中国語会話が理解できない。そのことは現代日本語作家が少しずつ変えようとし日本と中国の間に言語の橋を架けているとも言える。

日本語作家が外部から日本語を観察でき意識的に、あるいは無意識にもう一言語(もしくは複数の言語)への翻訳作業を作品に取り入れているのは多くの研究者に指摘されてきた。そしてここで取り扱う作家は「絶えない翻訳作業」を意識し意図的に作品にその用法を取り入れているのである。そのバイリンガル性を生かした現代日本語文学の新しい在り方や可能性を探る。

二、横山悠太の言葉遊びによるバイリンガル性

横山悠太(中国語話者)の夏目漱石のパロディー『吾輩ハ猫ニナル』では中国と日本の間

に存在する青年、磯田カケルの心理が描かれている。中国人の母と中国に住みビザ関係の手続きで日本に行くことになるという内容であるが、この作品はあらずじより言葉遊びに集中している。カケルは学校で日本語を学び、日本人の父と過ごした時間をよく思い出し、アニメ好きの友達がいるなど、日本語と日本文化と接触する機会が多い。

この小説は「日本語を学ぶ中国人を読者に想定した小説」として意図的に工夫して作られたものと紹介される。従って主人公のバイリンガル性は次のように表現される。

1) 漢字とルビの活用

「^{とう}爸さん」、「^{かん}覚じる」、「^{ラーメン}拉麺」、「^{きまぎま}各種各様」のように中国語での表記に日本語のふりがながついている。あるいは「^{チャイニーズ}汉语」や「^{日本語}日語」のように中国語の単語（汉语、日語）を半分中国語半分日本語にしルビは外来語にされている。

2) 慣用句の使用

「自分はそれを眼にしたとき、^酔酔を飲むような嫉妬を覚えた」のように中国語の慣用句（^酔酔を飲む＝嫉妬する）を日本語の文章に取り入れる。あるいは「^{脾気}脾気が合う（＝性格が合う）」のように日本語の慣用句を中国のと合わせる。

3) 漢字による解釈と表現

友達の^{ピアオズアナン}朴沢男がアニメのファンあり、彼は^{ピアオヂヤナン}朴宅男と周りに名付けられていたことで明らかに「オタク」の意味が伝わる。加えて、カケルの女らしい知り合いの一人の描写ではわざと「やつ」を「^{やつ}她」として中国語の「彼女」という意味を含む。このような漢字とふりがなの合わせは女性的男性の雰囲気伝える。

カケルは日本語の漢字仮名交じり文が「けったい」であると言っているが、日本語は彼の中に丈夫な根をおろしている。横山はあらゆる言葉遊びによって主人公のバイリンガルな世界を詳細に表している。現代中国語、日本語の和語・漢語・外来語の合わせは彼の頭の中で混ざっている。このように中国と日本の間に迷う主人公の心境、二重のアイデンティティを持つ一人の像がいきいきと成り立つ。

三、楊逸における発言のバイリンガル性

『ワンちゃん』は楊逸（中国出身）の初作であり、日本語が「未熟」あるいは「粗雑」であると批判されながら芥川賞の候補となった。芥川賞を実際に受賞した小説『時が滲む朝』における独自の中国由来の表現などというハイブリッド的要素はすでに谷口幸代氏（郭南燕 2013 参照）によって分析されている。加えて『時が滲む朝』は中国と中国人をテーマにしているが『ワンちゃん』ではバイリンガルな主人公と日中間の往来が描かれるため本稿では『ワンちゃん』に集中したい。

『吾輩ハ猫ニナル』と同様に日本と中国の間に取りかかった中国人の主人公「ワンちゃん」（木村さん）の人生をめぐる小説である。ワンちゃんの中には中国の過去（結婚生活と離婚）、日本の現在（日本に逃げて結婚した夫と姑の世話、）そして中国の現在（成長した息子、中国人女性と日本人男性の「国際結婚の仲介人」としての仕事）が交じり合い存在している。

登場人物は様々なことばを使う。日本人のほとんどは四国のなまりで話しワンちゃんが話している日本語も「ここは田舎、サービス悪い、しょうがないね」であるように意図的に未熟なものにされている。ここで特に注目を引くのは、中国人の発言である。中国の地方でワンちゃんの手伝いをする秋姉は田舎のことばを使うそうだが、それを表す日本語には例えば次のような文がある。

「この子はね、去年女の子を出産して姑に追い出されちゃってさ、半年前に離婚させられちゃったんだ。可哀相に、ずっと落ち込んでて、お母さんも参っちゃってさ、何とかして欲しいと、頼んできて、可哀相に…」

以上は秋姉が中国の女性を見合いで紹介することばである。「聞く」レベルでは話し言葉として「出産」が不自然である。加えて人の姑は他人の前で「お姑」と呼ぶのが一般的であるが、ここでは「お」が欠けている。「読む」段階でも漢字表記の「可哀相に」と「して欲しい」が日本人が話す日本語とは異なる印象を与える。このような中国語の影響がみられる文は実際に読者にとって中国で中国語を話す女性のイメージを作ること成功していると言える。そしてそれはワンちゃんの日本語と違って作家が無意識に取り入れた方法であると推測できる。

このように楊逸は横山のルビや言葉遊びと異なり意図的・あるいは意図的でない登場人物の発言的描写によってバイリンガルの環境を成している。

四、李琴峰の言語的ディストビー

李琴峰（台湾出身）の『彼岸花が咲く島』では言語が主なテーマといえる。「ニライカナイ」（日本）から追い出された主人公の少女が「島」に漂いついた。女性が支配している「島」に昔日本と台湾から逃げた人々が合流し住むようになった。島の人は日本語と中国語が混ざった「日本語」を話し、その指導者の「ノロ」は「女語」（現代日本語）ということばを使う権利がある。そして主人公の「宇美」が生まれたニライカナイでは漢字をすべて削除した「ひのものとのことば」が使われている。宇美は友達になったヨナと一緒に島の歴史を知っていく。一般の人が使う「日本語」と漢字のない「ひのものとのことば」は異言語や異文化への嫌悪から生まれたものとして否定的に描写されているが、女語（日本語）は一番地位の高いことばであり、女語ができる大ノロも正義正しい人物として描かれている。言語が自然に交流しなければならなくだれもが切り裂いたり、自分の所有物ににしたり、不可欠な部分を取り除いたりすることができないと作家が言いたいのである。このように李琴峰は文章に中国語の要素を日本語に導入しないのだが、日本語の元来のバイリンガル性（あるいは複言語的性格）や言語間の交流の必要性を出張する。

終わりに

以上の主人公は中国語と日本語の間に存在しているのが共通点である。日本語文学は作家の複言語的な背景からアイデンティティの問題を扱うものが多く自分自身の体験を書く

作家は少なくない。以上の作品も作家自身の体験に基づいているが主人公は作家が外から観覧する別の人である。

作家は主人公とそのバイリンガル性に対して異なるアプローチをとる。横山悠太は直接漢字とルビの接着・慣用句の取り付けによって翻訳に近い方法を使い、作品が「絶えない翻訳作業」そのものであると言える。それに対して楊逸は日本語に中国語の要素を融合させようとしている。李琴峰は人工的な言語なディストピーを描いている。いずれの方法も中国語と日本語の共通歴史による日本語のハイブリッド性が可能にしたものである。それは日本語を多様化し新しい表現が生まれ日本語文学の発展とともに中国語の影響が現代日本文学にとって昔とは異なる形での表現力につながるであろう。

対象作品

李琴峰(2024)『彼岸花が咲く島』文藝春秋

楊逸 (2008)『ワンちゃん』文藝春秋

横山悠太 (2014)『吾輩ハ猫二ナル』講談社

参考文献

郭南燕 (編) (2013)『バイリンガルな日本語文学：多言語多文化のあいだ』．三元社、
Kleeman, Faye Yuan (2018). Intertwining Tongues : Bilingualism and Hybrid Texts in Contemporary Japanese Literature: From I am a Cat to I Become a Cat. *The Journal of Japanese-Language Literature Studies* 6 (1):21-31.

Yiu, Angela (2020). Literature in Japanese (Nihongo bungaku): An Examination of the New Literary Topography by Plurilingual Writers from the 1990s. *Japanese Language and Literature*, Vol. 54 (1). Pp .37-66.

Ed. by Rachael Hutchinson and Leith Morton (2016). *Handbook of Modern Japanese Literature*. Routledge.

「童謡」の概念再考 “Childlike, though Never Childish”

——金子みすゞの「童謡」を手がかりに——

ム テ ィ グ リ ナ スベトラーナ
Mutygullina Svetlana

日本の詩歌といえば短歌や俳句が代表とされるが、重要な近代詩の一ジャンルとして「童謡」がある。とりわけ、金子みすゞの童謡は日本人の感性に深く根付いている。みすゞの詩は多言語に翻訳されているが、ロシア語訳はまだ存在せず、ロシアにおける日本の童謡研究も限定的である。発表者は、西洋の詩の理論に依拠して、みすゞの童謡の韻律上の特徴を明らかにし、それを活かすロシア語訳を作成している（「研究業績」別紙参照）。その研究過程で、日本独自の「童謡」の概念を明確にし、西洋の児童詩との違いを解明する必要があると考えた。

西洋の日本文学研究においては、童謡は“Nursery Rhymes”や“Children Songs”に分類されるが、果たしてそれで十分であろうか。

本発表は、「童謡」の独自性を再考し、ロシア文学および西洋文学における児童詩と比較しながらその特質を明確にすることを目指す。その方法として第一に、大正期の児童雑誌『赤い鳥』『童話』、及び畑中圭一『日本の童謡』、井上英二『童謡百年史』における「童謡」観を考察する。第二に、20世紀ロシアの児童文学の特性を示す、ソ連期の児童文学理論家 K.チュコフスキーの『2歳から5歳まで』や、日本の大正期の童謡運動に影響を与えた『マザーグース』、金子みすゞの作風と比較される19世紀ヴィクトリア朝詩人 K.ロセッティの詩とその日本語訳を参照する。

以上の方法を通じて、西洋近代における〈子供〉の誕生（P.アリエス）に基づく西洋の児童詩と、日本文学の近代化の中で生まれた「童謡」が、大人から子どもを分かつ点で共通する一方、北原白秋・西條八十らの「童謡」が実は大人も読者としている（「童謡」によって大人を対象とする詩では表現できないものを表現する）ことが指摘できる。

児童詩の枠組みを超える作品が、地域を超えて生み出されていた点に注目したい。本発表は、日本の「童謡」を通じて、近代社会で一般化した児童詩の概念を見直すことを最終的な目標とする。

「童謡」の概念再考“Childlike, though Never Childish”

——金子みすゞの「童謡」を手がかりに——

青山学院大学

ムティグ リナ スベトラナ
Mutygullina Svetlana

はじめに

金子みすゞは、大正期の児童雑誌『童話』をはじめ、『婦人倶楽部』や『赤い鳥』に詩を投稿し、童謡詩人として文学活動を展開した。現在では、日本の小学校でその詩が教材として採用されるなど、子ども向けの詩人としてのイメージが定着している。また、金子みすゞの詩の翻訳本に目を向けると、華やかな挿絵とともに「幼児向けの読みもの」として紹介されることが多く、あるいは「平易な詩集の翻訳」として扱われる傾向にある。しかし、堀切実や木原豊美によれば、みすゞは「単なる童謡詩人ではなく」、「近代詩の一角を占める大人の詩人として認められるべき存在である」¹とされる。さらに、Alice Major も「彼女の詩に響く声はしばしば子どもらしいが、決して子どもじみではない (The voice in her (Misuzu) work may often be child-like, but it is never childish)」²と指摘する。本発表では、これらの先行研究に賛同しつつ、金子みすゞの作品を近代詩として再考する。

現代文学における金子みすゞの位置付けを明確にするため、まず二十世紀初頭における「子ども」の捉えられ方を整理し、当時の世界の児童文学および日本の童話・童謡の発展段階を概観する。次に、日本とロシアの児童文学論を比較し、日本の童謡の特質を明らかにする。そして最後に、金子みすゞの詩4編を取り上げ、その作風の特徴を検討する。

二十世紀までの児童文学の様子

二十世紀以前、「子ども」や「幼年期」に対する特別な扱いは一般的ではなかった。これは、子どもの高い死亡率や医療・技術の未発達と深く関わる世界的な現象である。子ども観の変化は、J.J.ルソー (1712～1778) の『エミール』(1762年)に端を発するとされるが、当時は「子どもを理想化し、愛情をもって育てる」考え方は受け入れられておらず、むしろ異端視されていた。しかし、『エミール』の教育思想は、十九世紀以降の子育てや教育に大きな影響を与えた。

また、当時の児童文学には、現在のような「子ども向け」の明確な枠組みがなく、子守唄や言葉遊び、おとぎ話、歌謡などの民謡文学が中心だった。十八～十九世紀には、J.ニューベリーの『マザーグース』(1765年)、H.C.アンデルセン (1805～1875)、グリム兄弟 (1785～1863/1786～1859)、K.ロセッティ (1830～1894) らの作品が登場した。これらは伝承民謡や伝説を基にしつつ、暗い現実を描くことも多かった。同時代のC.ディケンズ (1812～1870) の『オリヴァー・ツイスト』(1837～1839)も、児童文学とされるが、もともとは社会批判の文脈で書かれたものである。

十九世紀後半になると、リアリズムを残しつつ子ども時代の楽しさを描く作品が生まれる。L.キャロル (1832～1898) の『不思議の国のアリス』(1865)、M.トウェイン (1835

～1910) の『トム・ソーヤーの冒険』(1876)、J.M.バリー (1860～1937) の『ピーターとウェンディ』(1911) などが代表的である。これらの作品は児童文学や児童文化に影響を与え、日本の童謡の発展にも寄与した³。

日本における 1920 年代の童話・童謡の展開

金子みすゞは大正 12 年 (1923)、児童雑誌『童話』9 月号に「お魚」を発表し、昭和 4 年 (1929) までに『婦人倶楽部』『金の星』『赤い鳥』『愛誦』などに 80 編以上を投稿した⁴。

日本の童話・童謡運動は、大正 7 年創刊の『赤い鳥』を起点とし、北原白秋 (浪漫主義) と西條八十 (象徴主義) が主導した。彼らは西洋詩の影響を受けながら、日本の伝統詩歌 (歌謡) と結びつけ、新たな詩の形を模索し、「童謡」と名付けた。

『赤い鳥』の作家たちは童話を「子どものため」に限定せず、普遍的な文学と捉えていた。小川未明は「童話は童心を失わないすべての人のための文学」、秋田雨雀は「人類の『永遠の子ども』のためのもの」とし、島崎藤村も「童心を基調とする文学形式」と位置づけた⁵。

北原白秋は、童謡を「童心童謡の歌謡」と定義した。また、日本のわらべ歌の詩形式や仏教的「自他一如」の思想を童謡の本質と捉え、「童謡は児童の幻想を歌うだけでなく、自己の芸術を高める行為である」と考えた⁶。西條八十もまた、童謡は「詩人の芸術理念が透徹しているべき」と述べ、単なる子ども向け表現にとどまらない芸術性を追求した⁷。

『赤い鳥』の読者層について田中卓也は、「小学生向けながら、実際には大人読者の方が多く、総合雑誌化を迫られていた」と指摘している⁸。一方、同時期のソ連では、K.チュコフスキー (1882～1969) が「死や悲しみは子どもにふさわしくない」と主張し、対象読者を明確にした⁹。しかし、北原、西條、チュコフスキーの三者は「児童向けであっても詩は常に詩である」という点で一致していた。

以上を踏まえると、日本の童謡は小さな子ども向けの作品を含むが、現代の児童文学の枠には収まりきらない。そのため、「児童文学」ではなく、「歌謡風の近代詩」として考察するのが適切である。

金子みすゞの詩の〈童心〉

金子みすゞの作品は、童謡の流れを受け継ぎつつも、生まれ育ちの仙崎村 (山口県長門市) の伝統や仏教的世界観を背景に独自の詩を創作した。同氏は子どもの視点を借りながら、大人の読者にも訴えかける「寂しさ」「生と死」などのテーマについて作品を生み出した。その中から 4 編を取り上げる。(以下、『金子みすゞ童謡全集』を参照する¹⁰)

「仏さまのお國」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、292 頁】

おなじところへゆくのなら、/み仏さまはたれよりか、/わたくしたちがお好きなの。//
あんない子の花たちや、/みんなにいい唄きかせてて、/鉄砲^{てっぽう}で射たれる鳥たちと、/おなじところへゆくのなら。//ちがうところへゆくのなら、/わたくしたちの行くところは、/一ぱ

んひくいとこなのよ。//—ばんひくいとこだって、/私たちには行けないの。/それは、支那より遠いから、/それは、星より高いから。

高橋美帆にによれば、この詩は、みすゞが気に入った詩を『琅玕集』手帳に書き写したK.ロセッティの「いと低きところ」(“The Lowest Place”, 1863) という作品には共通した雰囲気を感じられるという¹¹。ロセッティの原詩は児童詩ではなく宗教詩であり、宗教的な感覚は女性詩人に共通する要素の一つと考えられる。みすゞの詩にも、自らの死を意識したり、身の回りの死を悲しむ内容が多く見られる。

「繭とお墓」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、141 頁】

かいこ まゆ
蚕 は 繭 に/はいります、/きゅうくつそうな/あの繭に。//けれど、蚕は/うれしかろ、
ちょうちょう
/蝶々 になって/飛べるのよ。//人はお墓へ/はいります、/暗いさみしい/あの墓へ。//そして、いい子は/翅が生え、/天使になって/飛べるのよ。

みすゞの作品には仏教的な要素だけでなく、キリスト教の象徴も表れている。堀切実の研究によると、みすゞは『赤い鳥』に掲載されたアンデルセンの「天使」や、ヒューゴの「薔薇と墓」に感動し、これらのイメージを自身の詩作に取り入れていたという¹²。これらの原作はいずれも児童詩ではなく、小さな子を亡くした親の悲しみや、恋人を失った者の嘆きが描かれている作品である。みすゞの詩もまた、親が子どもに死について優しく語りかける作品として解釈できる。

「わらい」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、227 頁】

ばら けし
それはきれいな 薔薇 ばらいろで、/芥子 つぶよりかちいさくて、/こぼれて土に落ちたとき、/ぱっと花火がはじけるように、/おおきな花がひらくのよ。//もしも 泪なみだがこぼれるように、/こんな笑いがこぼれたら、/どんなに、どんなに、きれいでしょ。

みすゞの詩は、同声合唱曲集『このみちをゆこうよ』(カワイ出版、2016 年) にも収録されており、子どもが歌う機会もある。しかし、その内容には人生の苦しみや悲しみを深く理解した大人の視点が含まれている。

「さよなら」【金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』、132 頁】

降りる子は海に、/乗る子は山に。//船はさんばしに、/さんばしは船に。//鐘の音は鐘に、/けむりは町に。//町は屋間に、/夕日は空に。//私もしましょ、/さよならしましょ。//きょうの私に/さよならしましょ。

「今日の私」はどんな人か——この問いに、大人でさえ答えに窮することがある。みすゞの詩に見られる問いかけは、小さな子どもというよりも、思春期の青年の成長や内面的な葛藤に近いのかもしれない。失望や失敗を経験しながら、過去の自分と決別し、新たな自

分へと生まれ変わろうとする意志がそこには感じられる。

むすび

日本の童謡は、西洋の十八～十九世紀の児童文学および浪漫主義の詩人の理想の影響を受けつつ、日本独自のテーマや形式を取り入れ、子どもだけでなく幅広い読者を対象とした「歌謡風の近代詩」として発展した。なかでも金子みすゞの童謡は、口語的な表現を多用しながらも、「宇宙の在り方」や「自然と人間の関係」といった宗教・哲学的な問題を内包し、「孤独」や「生と死」といった、単に子どもを楽しませるだけではないテーマを扱っている。そのため、みすゞの詩は、単なる児童向けの作品ではなく、自己や世界について理解を深めつつある青年層にも響く内容であると言える。

こうした点を踏まえると、みすゞを「児童詩人」あるいは「近代詩人」として単純に分類することは適切ではない。彼女の詩には、「わかりやすさ」と「深遠さ」という二面性が共存しており、その独自の詩的存在を総合的に捉える視点が求められる。

(注)

(1) 堀切実、木原豊美『金子みすゞ再発見：新しい詩人像を求めて』勉誠出版、2014年。

(2) Major A., Meldrum Y. Shell of Moon and Sun. Poems by Misuzu Kaneko: translated by Yukari Meldrum and Alice Major. Independently published, 2019. [in English]

(3) 参考文献：Aries, P. Rebyonok I semejnaya zhizn pri starom poryadke. Izdatelstvo Uralskogo universiteta, 1999. [in Russian] (P.アリエス『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすゞ書房、1980年。【日本語訳】)；Christian Galan, Harald Salomon. Histories of Children and Childhood in Meiji Japan. Routledge, 2024. [in English]；神宮輝夫『児童文学の中の子ども』日本放送出版協会、1974年。

(4) 松本裕子『金子みすゞと詩の王国』文藝春秋、2023年。

(5) 河原和枝『子ども観の近代——『赤い鳥』と「童心」の理想——』中央公論社、2018年。

(6) 畑中圭一『日本の童謡——誕生から九〇年の歩み——』平凡社、2007年。

(7) 注1と同じ。

(8) 田中卓也「近代日本における児童教育雑誌の成立と読者共同体の成立過程に関する研究——児童文芸雑誌『赤い鳥』における読者投稿欄の分析を中心に——」吉備国際大学 社会福祉学部 子ども福祉学科 (研究成果)、2008年。(URL: <https://junsei.ac.jp/conference/confe2008/syoroku/ke08.pdf>、2025年3月5日参照)

(9) Chukovsky, K. Ot dvukh do pyati. Azbuka, 2019. [in Russian] (コルネイ・チュコフスキー『2歳から5歳まで』理論社、1996年。【日本語訳】)

(10) 金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』JULA出版局、2022年。

(11) 高橋美帆「女性詩人の葛藤—クリスティーナ・ロセッティと金子みすゞ」『ヴィクトリア朝文化 研究』第4号、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2006年、54-67頁。

(12) 注1と同じ。

安部ヨリミの創作活動とその生涯に関する伝記的研究 —プロレタリア作家から歌人への変貌—

倉地 智哉

今日まで安部ヨリミは安部公房の実母として断片的に言及されるに留まり、今年の公房生誕100年に伴う伝記的研究の高まりにおいても、ヨリミは初期のプロレタリア文学活動や晩年の歌誌への短歌投稿が言及されるのみである。しかしヨリミは、東京でのプロレタリア文学の刊行後に渡満し、満洲で童話作家として活動したほか、引揚げ後には、北海道の複数の郷土短歌結社に参加し、晩年まで旺盛な作歌活動に取り組んでいた。

晩年の公房が、自身における「親の生活感覚」の影響に言及してヨリミの学生運動を紹介したように、共産党文学者としての公房に対するヨリミの影響は否定できず、さらに今日では、引揚げ作家である公房に関するポストコロニアル研究が朴裕河、波瀾剛、呉美姫、解放によって、ナショナリズム研究が Richard F. Calichman や坂堅太によって展開されている。しかし 公房は、ヨリミらと共に渡満し、引揚げたのであり、「子と共に引揚げ来し家は荒れながら白樺浅く色付きゐたり」や「古い姉は引き揚げし吾の手を握り声を放ちて泣き止まざりき」などの短歌を詠んだヨリミは、今後、公房と共に引揚げ作家として研究されるべき対象である。

中村三春が指摘するように、バルトの「無数にある文化の中心からやってきた引用の織物」というテキスト解釈における「引用」には、作家情報や機能としての作者の要因が充当される可能性を有している。したがって、言語論的転回以降の日本近代文学研究において、テキスト論に対して、作家の伝記的調査が軽視される趨勢は見直されなければならない。

この問題意識に基づき、本発表では、ヨリミの新出資料である随筆2編、書簡2通、批評3編、短歌 1179 首のほか、ヨリミの親近者や高校の同窓生などの関係者による多数の証言などに基づきながら、東京から満洲、北海道を経て、埼玉へと至るヨリミの生涯の全体像を辿ることで、テキストを形成する引用としての作家情報を明らかにすることを試みる。

安部ヨリミの創作活動とその生涯に関する伝記的研究 ——プロレタリア作家から歌人への変貌——

名古屋大学 倉地 智哉

1. はじめに

安部ヨリミ（旧姓井村）は、1899年に北海道石狩国上川郡東鷹栖村（現・北海道旭川市）で生まれ、北海道庁立旭川高等女学校（現・北海道旭川西高等学校）卒業後、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）国文科に進学したが、在学中の1921年に社会主義婦人団体・赤瀾会の講演のビラを校内の掲示板に貼り、退学処分を受けた。翌1922年末には、満洲医科大学（現・中国医科大学）奉天医院小児科勤務の安部浅吉と結婚し、1924年3月に、異端社から長編小説『スフィンクスは笑ふ』を刊行している⁽¹⁾。

近年では、公房の〈生誕100年フィーバー〉が起こり⁽²⁾、鳥羽耕史『安部公房：消しゴムで書く』（ミネルヴァ書房、2024年）や、神奈川近代文学館の「安部公房展：21世紀文学の基軸」など、伝記的な研究や紹介の一環としてヨリミが言及されることが増加しているが、ここにおいてもヨリミは、公房の実母として断片的に言及されるに留まり、わずかに初期のプロレタリア文学活動や晩年の歌誌への短歌の投稿が紹介されるのみである。

そこで本発表では、ヨリミの新出資料である随想や短歌のほか、ヨリミの近親者や高校の同期生などの関係者による証言に基づきながら、プロレタリア作家から歌人へと変貌する、ヨリミの生涯の全体像を辿ることを試みる。

2. 北海道庁立旭川高等女学校時代

桜花会は、元・北海道旭川西高等学校同窓会会長・久志光穂（1回生）の提案により、1979年5月13日を以て、従来の北海道西高等学校同窓会とは別に結成された、北海道庁立旭川高等女学校同窓会である⁽³⁾。桜花会発足時に「理事」⁽⁴⁾を務め、1988年の結成10周年記念事業における記念誌の部を担当した、ヨリミの義姪にあたる田中末子／スエコ（33回生）は、当時について「庁立旭川高女同窓会が「桜花会」の名を冠して復活し、その結成記念誌が第一回総会当日発刊されて10年経ちました」として言及している⁽⁵⁾。

⁽¹⁾ 拙稿「安部ヨリミに関する基礎的研究：童話「太郎さんと鼻」他一編と書簡二通紹介及び解題」『解釈』71巻1号、2025年2月、52頁。

⁽²⁾ 鳥羽耕史「安部公房の死没から生誕一〇〇年まで：作家の歴史化と読み直しのプロセス」『日本近代文学』111号、2024年11月、168頁。

⁽³⁾ 藤木利男・桜井多美子・佐々木サヨ・木村昌子「特別座談会 桜花会：そのはじめ」旭川西高等学校編『創立80周年記念誌』北海道旭川西高等学校、1987年、171頁。

⁽⁴⁾ 北海道旭川西高等学校創立100周年記念誌編集委員会編『北海道旭川西高等学校創立100周年記念誌』北海道旭川西高等学校創立100周年記念事業協賛会、2008年、656頁。

⁽⁵⁾ 田中末子「記念誌 いい記念誌にしよう：私達は燃えました」桜花会10周年記念誌編集委員会編『桜花 北海道庁立旭川高等女学校同窓会〈桜花会〉10周年記念誌』北海道庁立旭川高等女学校同窓会「桜花会」10周年記念総会実行委員会、1988年、139頁。

8期生であるヨリミは、この結成記念誌において、スエコの実姉・渡辺三子からの依頼を受け、随想「明石先生の意義ある一言」を発表した⁽⁶⁾。ここでヨリミは、「鈴木先生は、黒皮のスリッパを外輪にペタンペタンとお歩るきになったのを忘れないのに、明石先生のお足許は（中略）思い出せません」としたうえで、「でも私は先生から意義ある一言を教えられました。教育勅語の中の博愛衆に及ぼし という言葉です」と回顧している⁽⁷⁾。

明石先生は、初代校長の明石孫太郎、鈴木先生は、音楽科教諭の鈴木はなのことである。明石については、「日常生活に於ける礼儀作法」として、「生徒各自をして朝登校前に着袴して床の間の前又は神前に端坐せしめ、教育勅語を奉読することを日課」とさせていたことが知られており⁽⁸⁾、鈴木については、ヨリミの同期生である築島喜代子が、「音楽学校出たてで、美しく優しい音楽の鈴木花子先生、裁縫の小貫しく先生には、第二寄宿舎の舎監として特別にお世話になった」と回顧している⁽⁹⁾。

3. 東京女子高等師範学校時代

1919年4月、ヨリミは旭川高女の薦挙によって東京女子高等師範学校に進学した⁽¹⁰⁾。東京女高師は、その「女子高等師範学校教育要旨」に「殊ニ教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉体シテ、其ノ実効ヲ挙ゲンコトヲ務ムベシ」⁽¹¹⁾とあるように、その教育方針を教育勅語に求めており、ヨリミは東京女高師進学後も教育勅語に密接に関係することとなった。

菅聡子は、「『教育勅語』に基づく良妻賢母主義教育を受けながら、しかし同校からは良妻賢母の枠を大きく逸脱した、すぐれた教育者・研究者が数多く輩出された」と指摘している⁽¹²⁾、ヨリミの場合における逸脱は、社会主義への共鳴によるものであり、ヨリミは、校内の掲示板に赤瀾会の講演のビラを貼って校長室に呼び出され、「教育者も社会主義が何者であるかを知つて置く必要があります」と発言したのち、退学処分を受けた⁽¹³⁾。

⁽⁶⁾ 田中スエコ「カルチャーショック！ 母の実家 安部家の思い出」『郷土誌あさひかわ』34巻7号、1993年7月、36頁。

⁽⁷⁾ 安部よりみ「明石先生の意義ある一言」桜花会結成記念誌実行委員会編『桜花 桜花会（北海道庁立旭川高等女学校同窓会）結成記念誌』桜花会、1979年、46頁。

⁽⁸⁾ 北海道庁立旭川高等女学校編『まごゝろ記念號三十年史』北海道庁立旭川高等女学校行幸並三十周年記念事業協賛会、1938年、118頁。

⁽⁹⁾ 築島喜代子『夕あかね』私家版、1982年、34—35頁。

⁽¹⁰⁾ 『官報』1960号、1919年2月17日、9面。

⁽¹¹⁾ 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会、1984年、75頁。

⁽¹²⁾ 菅聡子『女が国家を裏切るとき：女学生、一葉、吉屋信子』岩波書店、2011年、64頁。

⁽¹³⁾ 「よみうり婦人欄 赤瀾会のビラを学校の掲示板に貼つて女高師を追はれた安部よりみ夫人が長篇の小説を発表」『読売新聞』1924年4月2日、朝刊、4面。

退学後のヨリミは、「共産主義研究宣伝及プロレタリア文学ヲ標榜」⁽¹⁴⁾する、異端社発行の芸術綜合雑誌『異端』の「会員」⁽¹⁵⁾として、1924年3月に異端社初の単行本である『スフィンクスは笑ふ』を刊行し、翌1925年3月に『光に背く』と改題して洪文社より自費出版した。後者の序文において、「此の小説を読んで、女は少しでも、自責の念からのがれ、男は伝統のエゴイズムから開放されるならば満足である」⁽¹⁶⁾と記したヨリミについて、公房は「プロレタリア文学をやっていた」⁽¹⁷⁾と説明し、玉井五一は、「プロレタリア文学の婦人部か何かで活躍していられた」と回顧している⁽¹⁸⁾。

4. 旭川アララギ短歌会時代

ヨリミの末娘である康子の証言によれば、引揚げ後のヨリミは、公房と春光の学費を捻出するために旭川で農業を始めた⁽¹⁹⁾。公房の自筆年譜には、「母はそこで百姓をすることにして」⁽²⁰⁾とあり、1955年の「東鷹栖村民名簿」では、ヨリミの職業は「農業」⁽²¹⁾となっているほか、ヨリミの義姪孫にあたる安部宏和は、「公房さんのお母さんのヨリミさんは一時期、3線18号の安部家の畑地で農業をしていました」と証言している⁽²²⁾。

さらにヨリミの甥嫁にあたる飯澤尋子は、「九重織りでネクタイや帯締めを作り、学費の足しにしていましたし、冬には編み物教室をして、十人ほどの生徒さんの指導もしていました」と回顧しており⁽²³⁾、ヨリミの隣人の鈴木優子は、「一冬の間、ヨリミさんから和裁を習いました。手先が大変器用で浴衣や帯などきれいに縫っていました。教え方はとても優しくかったです」と証言している⁽²⁴⁾。さらに石川淳は、自身のネクタイについて、「これは安部公房君の母堂が手づから織つてわたしに贈られたもの」⁽²⁵⁾と説明している。

ヨリミは、同時期である1950年10月、前川正が編集する『旭川アララギ会報』9号の「新人会員紹介」にその名が掲載されて以降、同誌同号から20号、及び『旭川アララギ月報』21号、そして1950年と翌1951年の年刊歌集に短歌や短歌批評を発表した。堀田綾子（現姓三浦）は、「ある日、六十歳前後とおぼしき婦人が初めて出席した。快活で、

⁽¹⁴⁾ 朝日新聞社編『朝日年鑑 1925年版』朝日新聞社、1924年、519頁。

⁽¹⁵⁾ 「六号雑記」『異端』3号、1924年2月、57頁。

⁽¹⁶⁾ 安部頼実「序に代へて」『光に背く』洪文社、1925年、2頁。

⁽¹⁷⁾ 安部公房「年譜」『新鋭文学叢書2 安部公房集』筑摩書房、1960年、277頁。

⁽¹⁸⁾ 玉井五一・坂堅太・橋本あゆみ・山口直孝「玉井五一氏に聞く：戦後の文学芸術運動をめぐって 付『記録芸術の会月報』総目次」『二松学舎大学人文論叢』91号、2013年10月、117頁。

⁽¹⁹⁾ 木村陽子「瀋陽の安部公房：作家となる以前の執筆活動を中心に」『目白大学人文学研究』11号、2015年3月、231頁。

⁽²⁰⁾ 前掲「年譜」279頁。

⁽²¹⁾ 東鷹栖村史編集委員会編『東鷹栖村史』東鷹栖村史編集委員会、1955年、339頁。

⁽²²⁾ 東鷹栖安部公房の会編『「安部公房と東鷹栖」：安部公房はここにいた』書誌未記載、10頁。

⁽²³⁾ 同上、8頁。

⁽²⁴⁾ 同上、10頁。

⁽²⁵⁾ 石川淳「歌仙」『群像』7巻6号、1952年6月、28頁。

臆することなく発言するこの人には、どこか童女性があって、私は直ちに好意を持つことができた。その名を安部よりみと言った」⁽²⁶⁾、また「作家安部公房氏のご母堂安部よりみ氏も入会していて、ちょうどその頃、公房氏が芥川賞を受賞し、会員たちを喜ばせたものであった」と回顧している⁽²⁷⁾。

5. かぎろひ詩社と読者投稿欄時代

1972年6月、かぎろひ詩社は札幌支部を結成し⁽²⁸⁾、ヨリミは同年7月14日と9月5日に札幌エルム会館で行われた歌会に参加して⁽²⁹⁾、同年12月の『かぎろひ』に、「新入会員」⁽³⁰⁾として紹介されている。当時について、旭川高女の同期生である小野キマは、「月例歌会の帰り路、何かの話から私が「今日は三月六日ですから皇后様のお誕生日でしたわね」と申しましたらよりみ様は「あら、よく思い出して下さったわねえ、公房は今アメリカに行っているの」と、にこやかに相好を崩して微笑まれました」と回顧している⁽³¹⁾。

さらにヨリミは、『かぎろひ』のほか、合同歌集である、『躍如』（かぎろひ詩社、1989年）、『萌生』（かぎろひ詩社札幌支部、1977年）、『輪唱』（同、1982年）、『揺曳』（同、1987年）、『視座』（同、1992年）にも短歌を掲載しており、当時購読していた『短歌研究』と『短歌』の読者投稿欄についても、最晩年まで短歌の投稿を続けていた。

6. おわりに

晩年にヨリミは、「八十年に余る私の一生には、栄光もありましたが、幾つかの絶望にも逢いました。でも幸福な夢を見ていた様な思い出が、私の後にはあるのです。それは或は私の心の中に、抒情の椅子「短歌」があったからではないでしょうか」と述懐した⁽³²⁾。公房研究において、詩人としての公房が研究されているように、今後、歌人としてのヨリミの再解釈が必要である。

さらに宮武城吉とその実娘・山根カリミの述懐によれば、ヨリミは、脳溢血で倒れた翌年である1985年の満洲教育専門学校附属小学校のPTA同窓会において、「満洲は良かったなあ、今一度帰りたいなあ」と独りごとを洩らされた。眼の奥に光るものを漂わせていた」⁽³³⁾という。公房研究において引揚げ作家としての公房が研究されているように、ヨリミの引揚げ体験に関する研究についても今後の課題としたい。

⁽²⁶⁾ 三浦綾子「安部公房氏のお母さまのこと」『郷土誌あさひかわ』34巻7号、1993年7月、17頁。

⁽²⁷⁾ 三浦綾子「私の中の短歌 ②」『朝日新聞』1977年10月9日、朝刊、13面。

⁽²⁸⁾ 木村隆編「創刊四十周年 かぎろひ略年譜」『かぎろひ』41巻6号、1994年11月、2頁。

⁽²⁹⁾ 「札幌歌会詠草」『かぎろひ』19巻6号、1972年11月、8—9頁。

⁽³⁰⁾ 「新入会員」『かぎろひ』20巻1号、1972年12月、8頁。

⁽³¹⁾ 小野きま「安部よりみ様のご逝去を悼む 天竺の夫婦椿の花は散らず」『かぎろひ』37巻6号、1990年11月、9頁。

⁽³²⁾ 安部よりみ「低唱」かぎろひ詩社札幌支部編『輪唱 かぎろひ詩社札幌支部十周年記念合同歌集』かぎろひ詩社札幌支部、1982年、24頁。

⁽³³⁾ 宮武城吉「OLD—P.T.A.」『陵南だより』58号、1985年8月、33頁。

多和田葉子「ペルソナ」における遊歩者の表象

邢 亜南

本発表では、多和田葉子「ペルソナ」(1992)における「遊歩者」の表象を分析することを通して、この作品を再読したい。発表者はこれまで多和田葉子の作品を研究してきたが、とりわけ関心を持つのはその初期作品である。創作活動の出発点に当たる初期作品に立ち戻ることは、作家として成熟していく過程を俯瞰する手掛かりとなるだけでなく、出発期から現在に至るまで持続的に抱え続けている文学的関心を探る上でも重要な契機ともなる。その中で、これまであまり注目されてこなかった遊歩者という人物形象が浮かび上がってきた。この形象は『百年の散歩』において最も顕著に表れているが、その雛型は「ペルソナ」に遡ることができる。本作はほぼ同時期に発表された他の作品に比べると、それほど注目されていないものの、異国の都市を遊歩する行為やそれに内包される境界侵犯性に焦点を当てることで、多和田の初期作品における新たな意義を見いだすことができる。

題名が示すように、本作はドイツで留学している日本人女性道子の日常を通じて顔と仮面というテーマが多層的に書かれた作品である。先行研究では、顔と仮面のせめぎ合いから人種やジェンダーを含む様々な境界線がテキストに書き込まれることが議論された。しかし、道子の遊歩行為について検討された例はまだ見当たらない。

本論では、道子の遊歩を二つの部分に分けてその詳細を考察していく。前半では、道子の遊歩が掘り起こした歴史を考察しながら、彼女の遊歩が「見る／見られる」という視覚的枠組みに依存しながら、他の身体感覚を喚起する特徴を明らかにする。後半では、道子の面を被って街を歩き回る行為に焦点を当て、能の文脈における喪失と救済というモチーフと結びつけて検討する。最後に、「隅田川の皺男」や『百年の散歩』における遊歩者も視野に入れ、多和田文学における遊歩者の系譜を浮き彫りにすることで「ペルソナ」の持つ意義を明らかにしたい。

多和田葉子「ペルソナ」における遊歩者の表象

中山大学 邢 亜南

1、はじめに

1992年に発表された「ペルソナ」¹は多和田の初期作品の代表作といえる。弟の和男と共にハンブルクで留学している道子を中心に語る本作は、道子が精神病院の図書室で働く友人のカタリーナから、同じ病院で働く韓国人の看護夫セオンリョンが病人を犯したと疑われる事件を聞かされることから始まる。院内では数回にわたって会議が行われるが、東アジアの人間の顔は優しそうに見えるが、表情がないので、その下に残忍さが潜んでいるという噂が広まり、セオンリョンは胃を壊して別の病院に入院した。道子がこのことを弟と話したら、二人の意見が違うことが明らかになる。翌日、道子は朝早くからアパートから出て街を歩きだした。その日が家庭教師をしている佐田さんの家に行かなければならないと思いつつも、街を歩く衝動に駆られる。そしてつい急いで佐田さんの家に来たが、上の子の誕生日パーティーだった。そこに溶け込めない道子は隙を見て壁にかかっている「深井の面」を外して、自分の顔に被ったまま街に出て、歩きだした。

異国に生きる日本人女性という設定は多和田の初期作品によく見られるパターンである。しかし、「ペルソナ」は異国の都市を遊歩する行為を中心に、歴史、身体と記憶が交錯するという新たな展開を示している点で、ほぼ同じ時期に発表されたほかの作品とは一線を画す。本作に関する先行研究は少なく、主に顔²や境界線³の問題に焦点を当てた論考が見られるものの、道子の遊歩行為やその遊歩が歴史や記憶といかに絡み合うかという点については十分に論じられていない。本発表では、道子を遊歩者と位置づけたうえで、その遊歩行為に注目し、以上の問題を分析し、そこに抵抗の契機が孕まれていることを明らかにしたい。

2、歴史を掘り起こす遊歩

作中におけるハンブルクという都市は、道子の遊歩に必要な不可欠な物質的基盤を提供するだけでなく、彼女の遊歩を通して、外国人労働者を受け入れるドイツの歴史が作品の表面に浮か

¹ 初出は『群像』1992年6月号。本稿における「ペルソナ」からの引用は、講談社による文庫本（2010年）に収録されるものに拠る。以下から、多和田葉子「ペルソナ」、頁数と略す。

² 鈴木智之は「ペルソナ」における顔の問題に焦点を当てて、本作を顔の「現われなさ」²を主題としたものだと指摘している（「異邦の顔——多和田葉子『ペルソナ』における他者の現れ（なさ）」『顔の剥奪——文学から「他者のあやうさ」を読む』、青弓社、2016年、105—137頁）。

³ 疋田雅昭は「ペルソナ」に書き込まれる健常／異常、ジェンダー、国籍など多くの境界線の問題を中心に論じている（「錯綜する境界線——多和田葉子『ペルソナ』論——」『移動と立教大学日本文学』113巻、2015年1月、149—182頁）。

び上がってくる。道子がエルベ川沿いの近くまで来て、冷凍魚を加工する工場で働くトルコ人の女性労働者たち、難民、アルバニアからの青年と遭遇する設定は、単なる偶然として片付けることはできない。なぜなら、これはドイツが外国人労働者、再定住者、難民を受け入れる歴史を強く想起させるからである。第二次世界大戦後の西ドイツは経済復興のための労働力が足りないという難題を解消するために、イタリア、スペイン、トルコなどとの間に労働力を受け入れる政策を実施し始めたのである。また旧ソビエト連邦の解体とともに、ポーランドやルーマニアなどからドイツ系の移民（再定住者）が再びドイツに流入してきた。このような移民の流れは、道子が出会う人々を通じて作品の中に浮かび上がるのである。その中で労働者を受け入れる政策は第一次オイル・ショックのよって一時的に停止したが、「トルコ人の数は、1983年にドイツ政府が帰国奨励策を打ち出して帰国者を援助したために1984年には一時的に減少するものの、一貫して増え続けている。そうして在独トルコ人が現在ドイツ総人口の2.5%を占めるまでになった」⁴のである。とくに注目すべきは、1970年代末期から労働力としてドイツに受け入れられる外国人の中からドイツ語で作品を発表した人が出てきて、1985年にはドイツ語を母語とせず、ドイツ語で文学活動を行っている作家が選考の対象とされるシャミッソー賞が設立されたことである。シャミッソー賞の受賞者の中でトルコ出身の作家が最も多いだけでなく、女性作家たちの活躍が特に目を引く。道子が「ドイツに住みドイツ語で小説を書いているトルコ人の女性作家たちについて」⁵の論文を書こうとする設定は、この状況を色濃く反映しているといえる。道子の遊歩を通じて、ドイツが外国人労働者、再定住者を受け入れる歴史が掘り起こされる中で、ハンブルクは単なる都市にとどまらず、ドイツ全体の縮図として機能するようになる。ここで現在と過去が重層的に交差し、想起の空間として変容していくのである。

3、新しい女性遊歩者としての道子

周知のように、19世紀のパリを無目的に歩く回るブルジョワ男性のことを指す「遊歩者」という人物形象は、その登場時点から、ブルジョワ男性の経験の特権的に称揚し、女性の存在が不可視化され、あるいは排除されている状況を典型的に反映している。これに対して、レベッカ・ソルニットは、1850年代と60年代のデパートの開店によって公共の場に姿を表すことに「女性遊歩者の起源がある」⁶と指摘している。つまり、消費者であることは自らが消費される商品（売春の対象）でないことを証明しているわけである。だが、消費のために街に出ることは、女性遊歩者が男性遊歩者と同じく無目的に都市を歩くことを妨げるだけでなく、その行動範囲が消費とかかわる空間に限定されるという側面も否定できないだろう。女性遊歩者を論じ

⁴ 島途健一「『文学』と『現実』の間——ある在独トルコ人女性作家の社会性——」、東北大学『国際文化研究科論集』（10）、2002年、168頁。

⁵ 多和田葉子「ペルソナ」、57頁。

⁶ レベッカ・ソルニット『ウォークス——歩くことの精神史』東辻賢治郎訳、左右社、2017年、399頁。

る際、往々にして消費と結びつく「目的」のことをどのように位置づけるかが依然として重要な問題である。この点は朝早く出る道子が朝早くでかける場面に顕著に表れている。和男に「どこへ行くの」と聞かれると、道子は「佐田さんの奥さんに変圧器を買ってくると頼まれたから」と答える。

しかし、道子は目的と消費と結びつけられる女性遊歩者の枠から逸脱している側面を持っている。それは、「本当は行きたいところがあるのに恐ろしいので先へ先へと延ばしてるようでもあった。本当に行きたいところが他にあることは道子にも分かっていた。ただ、それがいったいどこなのかが分からないのだった」⁷と表現されるように、まず目的を持つ遊歩を拒否することに現れる。何よりも道子の遊歩に貫かれているのは、「避けたいと思っていたところへ一歩ずつ深く踏み込んでいった」や「足が止まらないのだった」⁸といった、主体の統御を失う感覚である。「避けている通りや避けている地区」は、ここで無意識の表出として、都市の表面に覆われた歴史のことや身体に刻みこまれた記憶のことを指すことができる。道子の遊歩は、意識と無意識が交錯し、都市の中に埋もれた過去の痕跡を掘り起こす旅のように描かれる。

4、境界を攪乱する遊歩

遊歩者を論じる際に、ジェンダーのほか、遊歩者と群衆の関係にも目を向ける必要がある。見遊歩者は単に都市の群衆の中の一人物ではなく、群衆の中に身を置きながらも、同時に群衆を対象として観察する存在である。言い換えると、観察者と観察対象という構図を保つため、遊歩者は群衆と適度な距離を保つことが重要となる。ところが、道子は他の地域から来た外国人と遭遇する場面では、いずれの場合においても観察者と観察対象の境界が打ち崩され、自己解体的な様相を呈しているのである。例えば「女たちの服には魚のにおいが染み込んでいた。そばを通る時、道子の口の中に唾液が沸いた」⁹のである。このことは、身体が密閉されたものではなく、外部からの刺激を受ける多孔質なものであることを示唆している。同時に、嗅覚を媒介とした身体的結びつきが、道子と彼女たちとの間に生成されたのである。続いて道子は難民の収容所とプレハブのアパートの近くを通った際、それぞれ黒人の男たちとアルバニアからの青年に声かけられたのである。彼らと言葉を交わすことは、道子の観察者としての立場に揺さぶりをかけるのみならず、彼女自身が「外国人」であるという他者性を強く意識させる。そして同時に、韓国人やベトナム人と区別される「日本人」としての自己証明は、道子に求めている。道子の遊歩は、和男と共に住むアパートと佐田さんの家という二つの場を起点としている。これらの空間に居心地の悪さを覚え、そこから出ることは、「日本人」という自明視されてきたアイデンティティへの揺さぶりから起因すると考えられる。この揺さぶりは遊歩を通し

⁷ 多和田葉子「ペルソナ」、32 頁。

⁸ 多和田葉子「ペルソナ」、38 頁。

⁹ 多和田葉子「ペルソナ」、39 頁。

てさらに「外国人」という集団アイデンティティに絡み合い、道子の他者認識と自己認識のねじれを引き起こす。そして、このねじれは彼女の自己分裂を一層深めていく。

5、面を被ったまま歩くこと

これまで論じたように、道子の遊歩は、安定した秩序から逸脱する意味を帯びながら、同時に自己解体、自己分裂的な様相を呈しているのである。このことをどう解決するかということ念頭において、最後では深井の面」を被ったまま街を歩き回ることについて考察する。

能の女面において「深井の面」は子を持つ中年女性を表し、『海人』『隅田川』といった狂女物の演目で登場することが多い。これらの狂女は夫あるいは我が子を失ったことが多いため、「愛しい夫や子どもにも再会すれば、狂女は狂乱の状態から正気にかえるのが一般的な結末である」¹⁰。つまり喪失によって引き起こされた狂気が、その対象の回復によって回復されるのである。「精神病院という言葉が背後から聞こえた」¹¹と表現されるように、面を被ったまま街を歩き回る道子は狂気に陥ると思われている。「深井の面」に孕まれる喪失と回復のテーマと合わせて見ると、道子の行為は、喪失とそこからの回復を求めることとして考えられるだろう。能面を被ることが自分自身の顔を隠すこととなるから、道子の喪失感はず顔の喪失から由来すると考えられる。作中には道子の顔が日本人らしくないことが数か所で示されていることと合わせて見ると、典型的な日本人の顔とされる能面を被ることは、失われた顔を回復しようとする理解できる。しかし、皮肉なことに、道子が一番日本人らしく見えたこの日に、「人々は道子が日本人であることに気づかないのだった」¹²ため、顔の喪失は解決される見込みがない。そして、能面を被る道子は和男が待っていると思われる中華料理屋をいくら探しても見つからない。これは、顔の喪失やアイデンティティの揺さぶりは決して解決されず、むしろ宙吊りされることを示唆している。換言すれば、道子の遊歩は、安定した場所に着地することを意味するのではなく、歩くことそのものが彼女の拠り所であるということを語っている。

6、終わりに

ここまで分析してきたように、道子の遊歩は、都市や身体に刻み込まれる歴史と記憶を掘り起こし、安定した秩序からはみ出す抵抗の可能性を持つ。こうした女性遊歩者の人物形象は本作をはじめとして「隅田川の皺男」「変身のためのオピウム」「百年の散歩」などにも頻繁に登場し、新たな系譜を生成した。多和田の初期作品には同時代性や歴史とのつながりが希薄だと思われるが、遊歩を通して歴史と記憶を前景化させる「ペルソナ」も十分注目に値する作品と言える。

¹⁰ 松岡心平編『能って、何?』、新書館、2000年、89-90頁。

¹¹ 多和田葉子「ペルソナ」、74頁。

¹² 多和田葉子「ペルソナ」、76頁。

インフォメーション・セッション発表

(ポスターは令和 7 年(2025 年) 5 月 10 日(土) 10:00～
5 月 30 日(金) 17:00(日本時間)に当館ウェブサイト
PDF で公開されます)

1900-1920 年代の東京における文学者とカフェ

五木田 星南

明治～昭和期の作家たちにとって、カフェはただの飲食や仕事ではなく、同じ時を生きる作家同士を結び付ける交流の場でもあった。しかし、明治～昭和期のカフェと作家にまつわる研究では、いずれも交流の場としてのカフェが当時の作家たちの文学や思想にどのような影響をもたらしたのか検討されていない。本発表では、その検討の足掛かりとして、文学者が震災前後の 1900-1920 年代にカフェをどのように描いたかという視点から、文学者にとってカフェはどのような場であったのかを考察する。

広津和郎は、「吉井勇及びスバル派の当時の新興芸術派達」、谷崎潤一郎、長田秀雄などを「文壇カフエエ党の第一期生」とし、広津自身らを「第二期生」とした(「カフエエ漫談」(1930))。本発表では広津の区分を参考に、二つの世代にとってのカフェの共通点・相違点を、第一世代は主に木下杢太郎(『スバル』派に属する)、第二世代は主に広津和郎の随筆から分析する。

本発表では、第一に、木下杢太郎の随筆から、芸術家のサロンとしてのカフェの姿を見ていく。「パンの会」の思想やその背景を踏まえ、西欧の象徴、ないしは日本の芸術家が“芸術家”(西欧の芸術家を手本とする)としてのアイデンティティ創出のための装置としてカフェを捉えようとしていたことを示す。

第二に、「パンの会」とは対照的に、西欧模倣という日本の特徴を象徴するものとしてカフェを挙げている広津和郎の随筆から、1910 年代後半～1920 年代のカフェが芸術家のサロンとしてではなく、気楽に入れて珈琲を飲む場所として機能していたことを論じる。

最後に、木下杢太郎(「第一期生」)にとっても、広津和郎にとっても、カフェは他者と繋がる場であったことと、それに付随する共通点や相違点を改めて検討する。それによって、1900-1920 年代の文学者たちにとってカフェがどのような場であったのかを総体的に考察し、結びとする。

『江戸六地藏建立之略縁起』の分析（類本情報のお願い）

杉本 和江

地藏坊正元は、品川寺（宝永 5 年）を初めとした江戸六地藏を建立した。発表者は、近世鑄造技術の視点から、江戸六地藏の調査を行い、その過程で『江戸六地藏建立之略縁起』（以下『略縁起』と称す）を知ることとなった。（三船温尚・杉本和江編『江戸大仏』2024 年）

建立にあたって正元が行ったのは、『略縁起』を刊行し、奉加勧進を出さないこと、寄進者が正元のもとに届けるよう記すことだった。『略縁起』とこれに類する書は、国文学研究資料館所蔵本（以下、国文研本と称す）を含めて 12 冊（うち 1 冊は、国文研本の模写）、概ね二種類に分けられることを確認している。その内容は、六地藏建立の寄進に関する部分と地藏菩薩の利益を述べた部分から成っている。なかでも、注目したいのは、地藏菩薩の利益を述べるに際し、「破地獄文」に添えられた挿図である。12 冊中 10 冊が同趣の絵柄となっている。図中、地獄の業火に落ちてゆく一人は、『和字絵入往生要集』（以下『往生要集』と称す）の寛文 11 年本の「黒縄地獄」で、釜に落ちなんとする人に酷似している。他にも、獄卒の姿などに『往生要集』との関係を強く意識させる部分がある。なお、国文研本のみ多色刷りと考えられる。

加えて、『略縁起』では、「女中がた子どもたち」も読みやすいようにと、全て平仮名だけで書かれた地藏菩薩の利益や靈験が記されており、いわゆる勧化本の要素を含んでいる。末尾の「口上」には、この『略縁起』はいつまでも手元に置いて「人々様へ御よみきかせたのみあげ候」と結んでいる。地藏坊正元の六地藏建立を支えた『略縁起』の成立には、出版文化の隆盛に加え、唱導文化の影響があったと考えられる。

こうした『略縁起』の分析を通して、近世の造像活動、特に鑄造像製作の社会的・文化的背景を明らかにしたいと考えている。なお、発表者は、『略縁起』の流布した状況とバリエーションを明らかにするため、類本の情報を求めている。

発表者紹介

(※発表者の所属は応募時の情報も含む)

■研究発表■

王 格格 WANG Gege

(北京外国語大学日本学研究センター 博士後期課程／国文学研究資料館 外来研究員)
2008年に中国華中師範大学日本語学科を卒業後、京都大学で学んだ。2024年6月から2025年6月までの一年間、国文学研究資料館で外来研究員として研究を行っている。修士課程では、中世和歌を専攻し、現在は奈良時代から平安時代初期の書序に興味があり、書序の文体、及び勅撰三集・『古今和歌集』の序文に伝えられた当時の文芸観を課題としている。これまでに発表した論文として、「「ともしび」考——京極派歌風をめぐって——」(『歴史文化社会論講座紀要』2021年2月)、「永正十三年七月二十九日和漢聯句(三の折) 訳注」(渡邊樹、王格格、宮武衛『国語国文』第91巻第7号、2022年7月)、「『風雅和歌集』の禅宗和歌について——花園院の禅宗主張を窺う——」(『東アジア文明講座紀要』2025年2月)などがある。

栗田 岳 KURITA Gaku

(電気通信大学 准教授)

上智大学文学部国文学科を卒業し、その後、博士学位は、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻で取得した。主な研究分野は上代・中古文学の言語である。個人的には文学・語学の別を意識していないが、傍から見れば、文法研究をしてきたということになるかと思う。研究方法上の特徴は、用例の文脈を読み込み、そこから得られた解釈に基づいて分析を進めていく点にあると思っている。たとえば『紫式部日記』の「才さかし出ではべらむよ」や、紀友則の「しづ心なく花のちるらむ」等について、助動詞ム・ラム・ケムの振る舞いに着目しながら、それらがどのように解される文なのかを論じたことがある。語学的な分析の結果が、作品の理解にも資するものとなるよう、心がけているつもりである。

羅 杰彬 LUO Jiebin

(千葉大学人文公共学府 博士後期課程)

中国の寧波大学を卒業し、学部時代、盛岡大学に一年間交換留学をする。その後、千葉大学の博士前期課程を修了し、現在は博士後期課程に在籍している。研究分野は中世文学で、主に西行の釈教歌について研究している。これまでに、西行の釈教歌に関する論文として、「十楽」「十題十首」「地獄絵」などのテーマを扱ったものを執筆した。

黄 逸松 HUANG Yisong

(東京外国語大学大学院総合国際学研究科国際日本専攻 博士後期課程)

2019 年 7 月中国華東理工大学日本語学科を卒業。2021 年 4 月東京外国語大学大学院総合国際学研究科国際日本専攻博士前期課程に入学し、2023 年修了。その後、同大学の博士後期課程に進学し、中世和歌、特に細川幽斎について研究している。発表論文に「『聞書全集』に見られる細川幽斎の伝統継承の具体像—『詠歌大概抄』からの受容と組み換え—」(『言語・地域文化研究』30 号)、「細川幽斎「玄旨百首」から見る和歌の伝統—同題先例の考察を通して—」(『言語・地域文化研究』31 号)がある。

野中 成淳 NONAKA Jojyun

(京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

早稲田大学文学部、東京大学大学院人文社会系研究科の修士課程を経て、現在は京都大学大学院文学研究科の博士後期課程に在籍している。『平家物語』を中心に、中世の軍記物語の研究をしている。その中でも、現在は、『平家物語』の終わり方にかかわる問題として、灌頂巻の形成過程について研究している。2024 年 8 月の軍記・語り物研究会大会にて大原御幸譚の史実性についての発表を行った。

顧 宇豪 GU Yuhao

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士後期課程 修了)

広島大学大学院で修士号と博士号を取得した。大学院在学中は平安中期に生きた陽成院及びその皇子元良親王に関連する歌合・私家集について研究してきた。これまで発表した論文は陽成院一族の和歌作品の表現や周辺人物の考証を中心に論じている。その経験を活かし、視野を広げたいと思い、本発表では、『枕草子』の中国語訳に注目し、中国における日本古典に対する認識を確認したいと考えている。

謝 蘇杭 XIE Suhang

(千葉大学普遍教育センター 非常勤講師)

中国浙江省杭州市出身。2014 年江西科技師範大学薬学部製薬工程専攻卒業。2017 年浙江工商大学東方語言文化学院・日本語言語文学専攻日本歴史文化コースにて修士号取得。2021

年千葉大学人文公共学府歴史学コース博士後期課程修了、博士号取得。研究分野は日本近世史、特に日本近世における本草学およびそれに関連する近世社会の文化的・経済的現象に注目している。博士論文「実学視点下の近世本草学の系譜学的研究」（2021年4月）のほか、「近世中期の本草学における『実学の転回』：平賀源内を中心に」（『思想史研究』2023年3月）や、「近世本草学における儒学思想に対する受容と反発：中国の伝統的世界像の視点から」（『思想史研究』2020年2月）、「近世前期本草学における実学思想の考察：稲生若水と貝原益軒を例に」（『千葉大学人文公共学研究論集』2019年3月）などがある。

王 順鑫 WANG Shunxin

（中国人民大学 博士後期課程／国文学研究資料館 外来研究員）

中国人民大学博士後期課程に在籍。研究分野は、日本近世における中国白話小説の受容研究である。訓訳本、通俗物、読本など、日本近世小説における中国白話小説の受容史を研究している。

エレンチノワ クリスティーナ ERENCHINOVA Kristina

（東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コース 博士後期課程）

2016年にロシア・ノボシビルスク国立大学にて東洋学の学士号を、2018年にサンクトペテルブルク大学にて修士号を取得し、2023年には東京大学で修士号を修めた。昭和期の歌舞伎、世話物、そして宇野信夫の作品を研究対象とする。2024年8月、The 21st OHSAWA COLLOQUIUMにて *Enhancing Emotional Depth: Uno Nobuo's Playwriting in "Sonezaki Shinjū"* を発表した。

謝 亜平 XIE Yaping

（筑波大学人文社会科学研究群人文学学位プログラム文学サブプログラム 博士後期課程）

中国の鄭州大学を卒業後、吉林大学に進学した。近代の日本人女性作家による文学に興味を持っている。これまでに、清水紫琴の「移民学園」における部落差別や平民主義について論文を発表した。博士後期課程では、主に南洋・中国・西洋を遍歴した女性作家、森三千代に焦点を絞り、研究を行っている。

劉 東波 LIU Dongbo

（南京大学外国語学部 助理教授）

新潟大学で6年間留学し、修士号（2016年）・博士号（2019年）を取得、専攻は国文学である。日本学術振興会の特別研究員（PD）を経て、現職。研究分野は、日本近代文学、近代の中日交流史などである。2020年に、単著『井上靖とシルクロード』（2020年12月、七月社）を出版した。『『敦煌』の創作から見る井上靖の文学歴史観』（『外国語文研究』第12号、2024年6月）、「宮澤賢治の西域物の原点を遡る」（『日本研究』第90号、2021年12

月)などの論文を発表している。

ザベレジナヤ オリガ ZABEREZHNAIA Olga

(天理大学国際学部 特任准教授)

モスクワ国立大学のアジア・アフリカ諸国大学を卒業し、修士課程をサンクト・ペテルブルグ大学東洋学部で修了した。博士課程はモスクワ大学に戻った。青山学院大学と東京大学での留学経験がある。大学院から日本文学の研究を始め、近代文学(白樺派、宮沢賢治)を中心に研究してきたが、最近は現代文学に興味が向いている。昨年、ロシアの研究会で日本語文学に関する発表を行い、現在は『21世紀の日本』という共著論文の序章と文学についての章に取り組んでいる。

ムティグリナ・スベトラナ MUTYGULLINA Svetlana

(青山学院大学大学院文学研究科日本文学・日本語学科 博士後期課程)

ロシア出身、MEXT 奨学金受賞者。現在、金子みすゞの童謡およびその翻訳方法について研究を進めている。2023年に『緑岡詞林』に「金子みすゞ童謡の露訳における翻訳方法——詩的翻訳における問題とその解決方法をめぐって」を投稿し、2024年12月8日に開催された全国大学国語国文学会にて「金子みすゞの童謡とその翻訳——言語的分析——」について発表を行った。

倉地 智哉 KURACHI Tomoya

(名古屋大学大学院人文学研究科日本文化学講座 博士前期課程)

2024年4月、名古屋大学大学院人文学研究科日本文化学講座博士前期課程入学。日本近現代文学・在日朝鮮人文学専攻。本発表に関わる資料紹介に「安部ヨリミに関する基礎的研究——童話「太郎さんと鼻」他一編と書簡二通紹介及び解題」(『解釈』2025年2月)、口頭発表に「東京女子高等師範学校と〈赤瀾会〉——山口小静と井村ヨリミの社会主義運動を中心に」(第10回日韓学術交流会、2025年2月11日)、論文は『文藝空間』より近刊。

刑 亜南 XING Yanan

(中山大学外国語学院日本語学科 講師)

東京大学大学院人文社会系研究科博士号(文学)を取得後、同研究科現代文芸論研究室教務補佐を経て、現職。研究分野は日本近現代文学、多和田葉子の作品研究。これまでに発表した論文としては、「翻訳者の変身——多和田葉子『文字移植』論」(現代文芸論研究室論集『れにくさ』第13号、2023年3月)、「視線と変身——多和田葉子『かかとを失くして』」論(『跨境・日本語文学研究』第17号、東アジアと同時代日本語文学フォーラム、高麗大学校日本研究センター(編)、2023年12月)などがある。

■インフォメーション・セッション発表■

五木田 星南 GOKITA Sena

（国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科比較文化専攻日本文化研究専修 博士前期課程）

国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科比較文化専攻日本文化研究専修博士前期課程に在籍。研究分野は日本近現代文学、日本地域研究。特に文学者同士の交流に深い関心がある。国際基督教大学の卒業論文では、梶井基次郎の死にまつわる三好達治の四行詩から、三好の心中における梶井の死の受容について分析した。修士論文では、ソシアビリテ論等を用いながら、多くの文学者が集まった東京のカフェを対象にして研究している。

杉本 和江 SUGIMOTO Kazue

（古美術修理 すぎもと 個人事業の専従）

早稲田大学を卒業し、近世の鑄造技術、庶民信仰、そして鑄物製品が社会にもたらす影響について研究を行っている。これまでに発表した論文には「鑄形考」（アジア鑄造技術史学会誌）があり、また共著として『江戸大仏』（三船温尚・杉本和江、2024年7月、八木書店）がある。

第48 回国際日本文学研究集会

開催日：令和7(2025)年5月10日(土)～5月11日(日)

会 場：国文学研究資料館大会議室及びオンライン (Zoom ミーティング及び YouTube ライブ配信)

※ハイブリッド開催

主 催：大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館

【プログラム一覧】

5月10日(土)

13:00～13:10 開会挨拶 渡部 泰明 (国文学研究資料館 館長)

総合司会 ダヴァン ディディエ (国文学研究資料館 教授)

研究発表

第1セッション

13:10～13:40 奈良・平安初期の書序と進書表について
—「古事記序」再論—
王 格格 (オウ カクカク／北京外国語大学日本学研究センター 博士後期課程
国文学研究資料館 外来研究員)

13:45～14:15 文の解釈と作品の解釈
—『伊勢物語』「さるさがないきえびす心を見てはいかがはせむは」考—
栗田 岳 (クリタ ガク／電気通信大学 准教授)

休憩 10 分 (14:15～14:25)

第2セッション

14:25～14:55 西行の釈教歌における自然と仏教的解釈
——法華經二十八品歌の「方便品」を中心に
羅 杰彬 (ラ ケツヒン／千葉大学人文公共学府 博士後期課程)

15:00～15:30 細川幽斎『九州道の記』における地名の詠み方—実景と伝統の調和—
黄 逸松 (コウ イツショウ／東京外国語大学大学院総合国際学研究科
国際日本専攻 博士後期課程)

15:35～16:05 『平家物語』灌頂巻前半部の形成過程
——結節点としての「女院出家」「大原入」——
野中 成淳 (ノナカ ジョウジュン／京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

休憩 10 分 (16:05～16:15)

第3セッション

16:15～16:45 『枕草子』周作人訳と林文月訳との比較
——「頭弁の、職にまゐりたまひて」段前半部を中心に——
顧 宇豪（コ ウゴウ／広島大学大学院人間社会科学研究科博士後期課程 修了）

16:50～17:20 江戸時代における詩経名物学の展開—京都本草学派を中心に—
謝 蘇杭（シャ ソコウ／千葉大学普遍教育センター 非常勤講師）

17:20～17:30 インフォメーション・セッション

・1900-1920年代の東京における文学者とカフェ
五木田 星南（ゴキタ セナ／国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科比較文化専攻
日本文化研究専修 博士前期課程）

・『江戸六地藏建立之略縁起』の分析（類本情報のお願い）
杉本 和江（スギモト カズエ／古美術修理 すぎもと 個人事業の専従）

5月11日（日） 総合司会 山本 和明（国文学研究資料館 教授）

第4セッション

10:35～11:05 『通俗三国志』章題の典拠と方法 —幸田露伴の方法への復帰と再検討—
王 順鑫（オウ ジュンキン／中国人民大学 博士後期課程
国文学研究資料館 外来研究員）

11:10～11:40 デビュー作『ひと夜』から始まる革新：宇野信夫と一幕物の世界
Erenchinova Kristina（エレンチノワ クリスティーナ／東京大学総合文化研究
科超域文化科学専攻表象文化論コース 博士後期課程）

11:45～12:15 帝国の統治恐慌と熱帯病について—森三千代の「南溟」を中心に—
謝 亜平（シャ アヘイ／筑波大学人文社会科学研究群人文学学位プログラム
博士後期課程）

休憩 90分（昼食・交流会）
（12:15～13:45）

第5セッション

13:45～14:15 松岡譲『敦煌物語』における「大谷ミッション」の表象
——未公開草稿を手掛かりに——
劉 東波（リュウ トウハ／南京大学外国語学部 助理教授）

14:20～14:50 日本語と中国語の間
—楊逸、李琴峰、横山悠太の「日本語文学」におけるバイリンガル性—

Zaberezhnaia Olga (ザベレジナヤ オリガ／天理大学国際学部 特任准教授)

- 14:55～15:25 「童謡」の概念再考 “Childlike, though Never Childish”
——金子みすゞの「童謡」を手がかりに——
Mutygulina Svetlana (ムティグリナ スベトラーナ／青山学院大学大学院
文学研究科日本文学・日本語学科 博士後期課程)

休憩 20 分 (15:25～15:45)

第6セッション

- 15:45～16:15 安部ヨリミの創作活動とその生涯に関する伝記的研究
——プロレタリア作家から歌人への変貌——
倉地 智哉 (クラチ トモヤ／名古屋大学大学院人文学研究科日本文化学講座
博士前期課程)
- 16:20～16:50 多和田葉子「ペルソナ」における遊歩者の表象
刑 亜南 (ケイ アナン／中山大学外国語学院日本語学科講師)
- 16:50～ 閉会挨拶 新美 哲彦 (国際日本文学研究集会専門部会 部会長)

第48 回国際日本文学研究集会予稿集

2025 年 4 月 25 日発行

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館

〒190-0014
東京都立川市緑町 10-3
電話 050-5533-2650
FAX 042-526-8604
URL <https://www.nijl.ac.jp/>

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館 

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE
NATIONAL INSTITUTES FOR THE HUMANITIES